

---

# とある科学の完全調整（フルチューニング）

うきせくさこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の完全調整  
フルチューニング

### 【Nコード】

N8634W

### 【作者名】

うきせくさこ

### 【あらすじ】

起きたら裸で見知らぬ殺風景な部屋。しかも女になってる?!白衣の男にミサカ0000号フルチューニングと呼ばれる。ミサカ?フルチューニング?取り合えず裸見んな!

『とある魔術の禁書目録』の世界を舞台にミサカ000000号に憑依した男の死亡フラグ回避ストーリー

## 第一話

目を覚ますと真っ白な部屋だった。自分の家には、こんな部屋なんてない。

寝ぼけた頭で昨日の事を思い出す。昨日はたしか自室のベッドで眠ったはずだ。じゃあここはどこなんだ？

辺りを見回してみる。いかにも病院とかで見かけそうな機材（脈拍やら脳波測りそうな機械）やらが周りであって、生活感のカケラもない。

もしかしてここは病院で、寝ているうちに運び込まれたんだろうか？

取り合えずベッドから起き上がる。てか服着てないじゃねえかと、視線を下げると寝ぼけた頭が完全に覚めた。

20数年お付き合いしてきた息子がいない！？代わりに胸がほんの少し自己主張しているし！起きたら女になっていた！

「起動したか、ミサカ000000号」  
フルチューニング

一人混乱していると、白衣の男が部屋に入ってきた。黒髪がボサボサとしていて体格がヒョロツとしたいかにも研究者な中年の男である。

さて混乱している俺はこの時どんな答を出したか？

気付いたら女になっていた 白衣の男は何か知っている こいつが犯人 今の状況、少女の裸 元男と男が織り成す18禁なことをされてしまう ヤられる前に殺れ

普通に考えればどう考えてもおかしいのだが、混乱してるのと、女性の体になり見知らぬ男に裸を見られた嫌悪感からか、怒りが沸々と沸き上がり

「てめえ、こつちにくるんじゃねえええつ!!!!!!」

と男めがけて殴りかかった。

殴ろうと拳を突き出した瞬間、バチバチと音がなり、拳が光りはじめた。

「やめッ!?!ぎゃああああああああああ!!!!!!」

やめろと言われても、拳はすんで止まったが帯びた光は止まらない。結局光が男に触れた途端、男は激しく痙攣して倒れた。あ、口から泡まで吹いてる。

改めて拳を見る。先程よりは幾分が眩しさは衰えたが、相変わらずバチバチと音が鳴っている。

これはもしかして電気か? ロリコン変態野郎による貞操の危機を前にして、能力( )が目覚めたとかいうやつなんだろうか?

そんなバカなことを考えながら、この世界の  
フルチョーニング  
0000号としての日々が始まった。

ミサカ0

## 第二話

白衣の男との一連の騒動は外まで響いたらしい。慌てて研究員らしいやつらが何人が駆け付けてきた。(こちらも慌ててベッドに逃げ込んだ)

白衣の男は失心したままなので、襲われそうになったから殺った、反省はしていない　と彼らに伝えた。白衣の男が研究員に運ばれて行くとき、彼に対する視線がやや痛かったのは仕方ないだろう。反省してこい、ロリコン。

ともかく今の状況がわからないので、着替えを持ってきた女性研究員に話を聞いてみた。

まずここは学園都市にあるラボの一つだそうだ。

学園都市というのは超能力を科学的に研究、開発を行う都市のことらしい。超能力というのは、物理法則を捻じ曲げて超常現象を起こす力なんだそうだ。先程の電気のようなものや、他にも火や風を操ったり、瞬間移動なんて能力もあるらしい。

この超能力は学園都市で脳の開発を行うことで後天的に身につけられるのだという。

しかし能力は個々によって異なる上、必ずしも能力が身につくとい

うわけではない。

学園都市では、超能力を強度で格付けしている。

レベルは0から5の六段階で分けられている。

無能力者、あるいは能力が弱すぎる者はレベル0に分類されるのだが、これは能力開発を行ったものの6割が該当するそうだ。

そして、レベルが上がれば上がる程、相対的に数が少なくなる。

ちなみに超能力者（レベル5）は、学園都市でも7人しかいないが、1人で軍隊と対等に戦える程の力を有しているらしい。

そのため、強い能力者や能力の種類に関しては運の要素が強い。

そこである計画が立案された。量産能力者計画である。レディオノイズ

超能力者（レベル5）の遺伝子配列のパターンを解明し、超能力者を生み出す計画だそうだ。

つまり超能力者のクローンを作成し、超能力者を誕生させるという計画である。量産されたクローンは軍用として利用されるのが決定済み。

人道？なにそれ美味しいの？のような非人道的計画なのだ。

そして、その非人道な計画こそこのラボの研究であり、クローンの  
第一号である検体番号0号      ミサカ000000号フルチューニングこと俺なのだ。

……俺、終わったかもしれない。



### 第三話

衝撃的な話を聞いたあと、しばらく呆然としていたが、研究員たちはそれに構わず、頭や体に妙な機械を付け始めた。どうやら実験体である俺のなにかのデータを取るようだ。

正直実験体になるのはごめんだし、いつそのこと全部話すべきだろうか？実は俺は男なんだと。

……駄目だ！どうやっても廃棄処分やら解剖フラグな気がする！  
！仮にそれから逃れられたとしても、普通は信じてもらえないだろう。俺だって信じられないし。

そうこう考えながらなされるがままに数時間ほど検査をされ、その日は終了となった。

寝泊まりする部屋に連れていってもらい、夕飯？として渡されたブロッコ食をかじりながら、一人になって改めて今の状況を考えてみる。

学園都市は東京にあるらしいのだが、そんな場所は聞いたことが無く、超能力とか超常現象が一般的に存在するなんてのは、二十数年

間培った俺の常識にはない。

つまり、ここはアニメの世界のような異世界であるということ。

となると親や友達と連絡をとるのは無理だろう。急に不安になってきた。

仮に外の世界に逃げたとしても頼れる相手がいなし、戸籍自体もないから生活のしようがない。

ただ異世界にきたただけならともかく、まさか実験体に憑依するなんて。どこぞの出来の悪いSFみたいな話である。

前に見た二次小説なんかだったら、最強な能力を持って俺TUEE E出来ちゃったりするんだろうが……。

………待てよ。そういう意味では、この世界の七人しかいない超能力者（レベル5）のクローンなんだから、もしかして俺ってとんでもなく強いのか？

改めて電撃を放った手を見る。流石にもう光っていない。

どうやってたら、電気を出せばいいのか たしか女の研究者が超能力は自分だけの現実が重要であると言ってたっけ。  
パシナルリアリテイ

専門用語も混じってたからよくわからなかったが、ようは本来有り得ないことを有り得ることとして認識する 例えば俺の右手から電気が出て当たり前って考える事なんだろうか？

……妄想乙だな。意外と厨二には優しい世界なのかもしれない。でも、さっきは特に何も考えずに出来っけ。もしかすると感情は能力に影響を及ぼすのかもしれないな。

取り合えず右手に電気が集まるようにイメージしてみた。するとすぐに光りはじめ、電気を帯びはじめた。

「おおおお！なんかすげえ！！」

思わず独り言をしてしまうほど興奮してしまう。超能力が使えるなんて男のロマンだよな！

少し希望が出てきたな。しばらくは実験体として生活して、まずはこの能力に慣れていこう。あくまで能力者の量産計画なわけだし、量産されるまではすぐに戦場やらに送られることはないはずだ、多分。最悪、レベル5の力があればなんとかなるかもしれない。

じゃあ寝るか。

洗面所で初めてまともに自分が憑依した少女の顔を見る。

……これはヤバいな。顔が整っていて可愛いんじゃないか？幼さは感じるものの、それが相まって可愛らしさが増している。多分もう少し成長したら幼さが抑えられ、綺麗に感じるんだろう。くそ！出来れば男としてお友達になりたかった！！

………こういうのもナルシストと言えるんだろうか？複雑である。しかしながらロリコンや肉食系男子には気をつけよう。これは本気で貞操がヤバイ。

………女の体になったが、いつかは男に惚れてしまっただろうか？少し鬱になった。

洗面所から戻り、パジャマなんてものはないから、仕方ないので服を脱ぐ。にしても、どこかの制服なんだろうがなんで制服なんだ？

下着姿になり、寝に入ろうかとしたところで急に扉が開いた。

「00000号！私に刃向かうとはどういうことだ！！お前はこれから再調整して……！！！」

……ああ、なるほど。一日のメはお前か白衣の男。裸を見た罪をあれで許そうとしたが、足りないというわけだ。負けたよ。お前は悪い意味でのロリコンの中のロリコンだ。

だからもっとすごい電撃を浴びせてあげよう。これが……俺の全力全開……ッ……！！！！

騒ぎを聞き付けた研究員がまた駆け付けてきたが

「夜ばいされそうになった。恐怖で能力が暴走した。これは正当防衛である（キリッ）」

当然運ばれていく白衣の男への視線は皆冷たかった。

## 第四話

翌日

今日も検査を行うらしい。ただ今日は定『システムスキャン身体検査』つまり能力の測定を行うようだ。たしかに自分の能力がどれくらいなのか知っておくに越したことはない。今は知ることが大事だ。

ついでにオリジナルになった超能力者の能力とかも見ることは出来ないか。と言うと能力測定後に資料を渡してくれることになった。

なんでもオリジナルの少女は幼い頃から様々な検査を行っているため、資料ならば膨大にあるらしい。だからこそ、その少女がオリジナルとして選ばれたという訳である。よりオリジナルに近いクローンを作るために。

測定後はある程度の自由は与えてくれるようだ。能力を自由に使っているように訓練室も開放してくれるらしい。もっとも自由に行き来できるのは、自室とそこだけで他の部屋の立ち入りは禁止されたが。嗚呼外出してえ。

身体検査はまず電気の出力の測定から始めることになった。レベル5の全力を発揮すると、機器が故障するので徐々に出力を上げていくように指示される。白衣の男がいたが 何か言い足そうに苦

虫を潰したような顔でこちらを見ていたが無視した。

集中して出力を徐々に上げていく。研究員たちも、初めてクローンから能力を使っているのを見て感嘆の声が上がる。まあ実際見たのは白衣の男だけだしな。

「00000号、もっと出力をあげる」

白衣の男に言われ、また徐々に上げていく。このやり取りを何度か行った。しかしそろそろこちらは限界な気がする。能力使うのつて意外に体力つかうのな。ちなみに白衣の男は天井と呼ばれていた。どうやらこのラボではかなり偉いヤツらしく、ヤツを中心し測定結果が出ているであろうモニターを覗き、研究員に指示を出している。

しかし体力はまだなんとかなるが、そろそろ出力の限界が近い。

「出力が限界みたいだ。これ以上出力を上げられない」

「何……………?」

天井は訝しい目でモニターを覗む。

「バカな……………。超電磁砲レールガンの1%ほどだぞ。どういう事だ?」

周りの研究員も騒然としはじめる。どうやら問題が発生したようだ。俺なにか間違ったことでもやったんだろうか?

「00000号、身体検査を終了する。先の資料を受け取ったら自由にしていいぞ」

そのあと色々なことをやらされたが、天井や他の研究員の顔が陰しくなるばかりだった。なにがなんだかわからないまま俺は部屋をあとにした。

超電磁砲の1%                    天井の言葉が気になる。これがキーワードだ。

渡された資料に目を通す。そこには俺の顔そっくりの活発そうな少女の写真があった。

彼女の名前は御坂美琴。能力名は『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』。元々は電撃使い（エレクトロマスター）なのだが、彼女が編み出した技を元に自らその異名を名乗っているらしい。クローンである俺のオリジナルに当たる少女である。まさかオリジナルが厨二病を患っているとは。クローンの身としては嘆かわしい。

つまりレールガンとは兵器ではなく、彼女のことだろう。

ということは、今の俺の力はオリジナルの力の1%ぐらいということか？！おいおい俺THEEフラグがポツキリ折れたぞ！そのかわりに廃棄処分という名の死亡フラグが！！



待て、まだ慌てるような時間じゃない。素養はあるんだ。能力を上げればいいんじゃないか？

資料にはオリジナルは元々レベル1の能力だったが、様々なカリキユラムを経てレベル5になったと記載されている。となると訓練次第では能力は上がるはずだ。

レベル5ではおよそ10億ボルトもの電撃を放てるようだ。これの1%となると俺が使える電撃は1000万ボルトか？ピカチ○ウ越えたな。

てか、オリジナルは化け物か？某海賊漫画の悪役雷人間より凄くないじゃないか？

オリジナルのデータだと、だいたい俺の能力はレベル3に相当する。となるとオリジナルよりは早く上げられるかもしれない。

よし、早速特訓だ！存在価値を高めて廃棄処分は免れるんだ！！

## 第五話

訓練室はかなり広い空間だった。

まずオリジナルの能力がいくつか資料に載っていたので、レベル3でそれができるのか試してみよう。ちなみにいくつかは身体検査のときにやったしな。

まずは電撃の槍。高圧電流を槍のように飛ばす遠距離系の技だ。これはなんなくできた。射程に関しては、20〜25m程でそれ以上になると消えてしまう。威力も距離が遠ければ遠いほど下がるようだ。オリジナルは視界内すべてが射程範囲らしい。

落雷を誘発できるようだがこれは外でないとできないからパス。使うときになったら絶対ラ○デインって唱えてやる。

次に磁力の操作だ。電磁力を利用した技で、オリジナルは砂鉄で剣を作ったり、砂嵐を巻き起こした攻撃的な使い方や、一時加速、浮遊の移動手段としての使い方、レーダーのような空間認識など幅広い扱いが出来るらしい。

訓練室はそうした訓練も想定してか、幸い砂鉄やら鉄板も置いてあった。

磁力を利用した引力と斥力をやってみよう。まずは引力、鉄板が宙に浮き手に収まった。なんかスターウォー○でジ○ダイがライトセ

○バーをフースで引き寄せるのを思い出すな。斥力も問題なくできた。

しかし砂鉄の剣は難易度が高いようだ。オリジナルは磁力線を目視できるらしいが俺はできないので、剣の形にするのも難しかった。

なんとかそれらしい形にしていざ鉄板を斬ろうとしても砂鉄の剣と鉄板が磁石のようにくっついただけである。表面を振動させることで切れるらしいのだが。そこまでの制御はどうやら無理そうだ。磁力線が見えればなんとかなるかもしれないが。一度、天井たちに相談してみるか。

砂嵐は簡単だった。ただ想像していたよりシヨボい。人が2〜3人だけ入れるぐらいのつむじ風だった。視界を遮るのには役に立つのか？

次は加速を試してみる。磁石みたいに引力や斥力を利用することで実現できた。ただ一時的なのがあ。緊急回避には便利だろうが常時使えないもんだらうか？こう身体強化的な。

あ、そういえばあつたぞ、漫画の技だけど。たしか某狩人×狩人で暗殺一家の三男が使ってた技だ。末梢神経を電気で操作して速度や反射速度あげたりしてたっけ。やってみるか。

………複雑な神経を操作するためかなり制御が難しかったができた。今なら小足みて昇竜余裕な超反応をリアルでできるだろう。ただ課題としては制御が複雑なため攻撃を同時に行ったり、磁力利用の移動の併用は無理みたいだ。しかしこれは使える。ありがとう暗殺一

家の少年よ。これで俺はまたひとつ強くなれた。漫画・アニメの技は参考になるかもしれない。くっ、燃えてきたぜ俺の妄想力が！いつか全部実現してみせる！

浮遊は広い空間のこの場では試せなかったので磁力を利用した壁登りをやってみた。気分は蜘蛛男である。しかし、スカートが短いせいでパンツまる見えだな。スパッツなんか買ってもらおう。俺は痴女じゃないし。

他のオリジナルが使用する能力については、今日はやめることにした。例えば誘導加熱による加熱　いわゆるレンジでチンするアレだが鉄板とかやったら危ないだろうし、レーザーやパソコンのハッキングなんかは対象や機器がないとできないので天井たちに許可を得ないと必要があるからだ。

最後にオリジナルの異名ともなった超電磁砲を試してみる。これはレベル5ではじめて使える技のようだから、できない可能性が高いが。

超電磁砲はコインを弾丸として用い、指で弾く形で撃ち出し音速の3倍以上で放つ。軌道上にある物を全て薙ぎ払うという恐ろしい技だ。空気との摩擦熱でコインが溶けてしまうため射程距離は50mとそれほど長くないが、弾丸の質量を変えれば威力や射程を伸ばすことができるらしい。実際の硬貨を使ったら、貨幣損傷等取締法に引っ掛かる技だな。人にむけて使う技では絶対じゃない。

で試してみたのだが。コインを飛ばすことは出来た。普通に飛ばすよりは強いだろう。辺り所が悪ければ、気絶ぐらいはできそうである。しかしコインは溶けないし、速さも音速を越えた気はしない。これなら電撃の槍か銃のほうが強いだろう。

一通り技を試し、復習しようとしたところ電撃が出なくなった。焦ったがどうやら電池切れという現象のようだ。ゲームによくあるMPがきれた状態なのだろう。休憩すれば時間とともに回復するらしい。

仕方がないので、普通に身体を鍛えることにした。オリジナルは能力も凄いが、身体能力や知力も凄いというパーフェクトな存在なんだとか。それらの要素も能力向上に関係しているようだし、軍に回されるかもしれないから体も鍛えないと。勉強に関しては天井たちと相談だな。どういった知識が必要なのかわからないしな。

やることは多いが生き残る為に頑張るぞ……………。

## 第六話

一週間過ぎた。

目が覚めても、元の世界に戻るなんてことはなく、慣れない日々を過ごしている。両親は元気にしているようだろうか？あなたがたの息子は少女になって今料理してます。

きっかけはこちらの世界にきて三日目のことだった。それまで出てきた食事が全てブロック食である。なんだよ、プレーン チョコ チーズ フルーツって！ループに気付いた時、流石にキレて天井（ちなみに名前は亜雄）に電撃かましてやった。

で交渉した結果、調理場（なんでラボにこんなのがあるんだ？）を借りて料理することになったのだ。料理ができるなら、今後自由に調理場を使用できる許可と買い物限定の外出許可付きで。天井は料理できるように調整していないからできるわけがないと高をくくっているようである。

だがしかし、元の世界では学生時代から一人暮らしをしていたこともあって多少なりに料理はできるのだ。完成した料理を見て呆然とした天井に思わずドヤ顔したのも悪くはないだろう。

出来も悪くは無かったので、食べるか？と天井に聞いたところ、天井は人形が作ったものを食べるか！と捨て台詞を吐いて去っていった。あの野郎。いつかあいつのパソコンに I love lolli ta って壁紙に変えてやる。

実のところ、俺が人形扱いされるのはなにも天井だけではない。ここにいるほぼ全ての研究者は似たり寄ったりな認識のようである。前の夜ばいの件も少女に手を出した天井は変態であるというよりは、人形にまで手を出す天井は異常性癖者であるという認識なのだ。まあ、どちらにしても天井は変態なわけだが。

まあそんな訳で、あまり深く関わることがない。必要最低限しか話さないし、名前を覚える機会がない。

……正直に言うとかかなり凹んだ。人間扱いされないことに。友達も出来ない。ひどく孤独なのだ。量産型能力者計画が進めば、同じクローンの子が増えるのかな？ そうなると俺から見れば妹みたいな存在になるんだろうか。そいつらにはこんな孤独な気持ちは味あわせたくはない。なるべく優しくしてあげよう。姉として。

なお、天井は違う意味でぼっちである。研究者としては一目を置かれていたものの、あまり好かれてはいないようだ。この間も研究員たちが互いに誘い誘われ食事に向かう最中、一人だけ誘われてなかったし。少しだけ俺の憐憫を誘った。

かなり話しがずれたが、まあそんなわけでひょんなことから外出許可と料理する権利を得たのである。

それから、身体検査は順調だ。徐々にはあるが、電撃の出力は上がっている。天井も何故クローンがレベル5にならないのかは疑問

に思っているようだが、能力向上の結果は喜んでいられるらしい。能力が強いと脳の演算処理が早い、つまり頭がいいということを知ることが出来た。憑依した俺の知能の問題かとも思ったが、どうやら別問題のようだ。

訓練や勉強に関しても順調である。訓練は漫画の電気や雷を使う技を思い出しながら試してみたり、前回試せなかった能力についてもやることができた。

勉強に関しては、実は洗脳装置テストメントと呼ばれる装置で、既にオリジナルと同程度の知識を有しているらしい。軍事利用も考えているため、銃の使い方なんてのも学習済みなんだとか。んなバカなと思って英語の本を見ても普通に読めるし、訓練室で射撃も出来た。洗脳装置すげえ。元々の00000号の人格も洗脳装置で天井が調整していたものだそうだが。ただ今の00000号の人格にはならないはずだと、首を傾げていたが。……まあ、普通憑依するなんてのは気付かないよな。

そんなこんなしていると瞬く間に一週間過ぎたのである。

朝食を済ませたあと、検査が始まる。これは日常のスケジュールと変わらない。ただ今日は一つだけ違うことがあった。見知らぬ女性がいる。誰だろうか。

ウェーブのかかった黒髪のギョロっとした目が特徴の若い女性だ。こういつてはなんだが暗がりで見かけたら、心臓に悪いかもしれない。視線があつたので軽く会釈した。

「probably、あなたが00000号かしら？」



「ああ、そつだがあんたは？」

「布束砥信よ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

ここに来て、初めて挨拶らしい挨拶を交わしたので、ニッコリと笑いかける。一瞬、いきなり英単語が出たのでお前はルー〇柴かとツッコミたかったのは内緒だ。キャラ作りに悩んでいるのかもしれない。安心しろ、外見は立派にキャラが立ってるから。でも気にしてるかもしれないから黙っておこう。

布束砥信は、あらためてこちらに笑顔を向ける彼女  
0000  
0号のことを考える。

(本当に感情が豊か。But、これはどういう事?)

本来天井亜雄が施した人格調整では、従順で大人しく感情が表に出ない人形のような性格になるはずだ。元々、彼女は洗脳装置の監修をしていた実績を買われ、この計画に参加した外部スタッフだ。その彼女から見ても、天井の調整に問題はなかった。だが000000号は全く違う結果を見せている。

（本当に作り物なの？これではまるで　　）

布束は頭に過ぎった言葉を掻き消した。それを認めてしまえば、  
究の根幹を問うことになる。

そんな事を考えながら、ただ彼女を見つめ続けた。

## 第六話（後書き）

布束砥信さんの口調は難しいですね。

## 第七話

ギョロ目ちゃん事、砥信さん　外見では自分が年下だからそう呼んでいる、とはよく話すようになった。外見だと年が割と近かったし（高校生らしい）、礼儀には煩い人だけど意外と話しやすかったりする。砥信さんはその歳で洗脳装置の開発に関わったスペシャリスト。その関係で、量産型能力者計画の妹達（シスターズクローンの総称）の人格調整を担当しているらしいんだけど、元々の計画のメンバーではないため、天井からはいい顔はされていない。

「砥信さん、砥信さん、お昼一緒に食べない？」

「ええ、いいわ」

今では昼食も食べる仲だ。

「Well、明日他の妹達が完成するのは聞いている？」

「え？いやまだ聞いてないよ」

そうか、とうとう他のクローンが生まれるんだ。どんな子なんだろうな。

「Incidentally、この研究所で5体、他の研究所でも10体以上造られる予定よ」

「え、他の研究所でもこの研究やってるの?!」

「ええ、様々なデータの収集は必要。besides、計画終了後のことも考えての事よ」

つまり軍事利用のための量産体制の下地も整えておくって事か。

「誕生する瞬間とか立ち会ってみたいなあ」

「それは天井に聞かないとダメね」

あとで天井にダメ元で話したら、すんなりと許可を得た。なんか機嫌がよかったみたいで、こぼれる笑みを隠しきれていなかったし。なんでだ？

培養液と思われる液体が詰まったポッドが沢山並んでいる。そこには同じ顔した少女たちがいた。中にはまだ俺より幼く見える子や赤ん坊みみたいな子もいる。

「よし起動しろ」

天井の号令とともに液体が排水され、ポッドが開く。すると全裸の少女が重力に負けてかペタンと座り込んだ。しばらくは呆然としていたが意識がはっきりしだすと、状況を理解出来ないのか、キョロ

キヨ口と辺りを伺う。

か、かわいい……………！！！！なんだこの生き物！！！！！！パネえ、妹達パネえ！これを軍事利用とかありえないだろ、常識的に考えて！！

そう興奮していると、少女はワンワンと泣き始めた。仕草だけみれば完全に赤ちゃんである。

少女は研究員たちとともに別室に連れて行かれる。恐らく、洗脳装置による学習や人格調整を行うんだらう。作業は翌日までかかるようだ。1日かかるとはいえ調整って意外と早く終わるんだな。

翌朝目が覚めると、なにかがおかしい。誰かに見られているような何か繋がつているようなそんな不思議な感覚だ。流石に異常かもしれないと思ったので天井に相談した。

「ああ、それはミサカネットワークのことだらう」

「ミサカネットワーク？」

「脳波リンクのことだ。妹達は全員同一の脳波であり、能力も電気操作能力だ。これを利用して、脳波を電気信号として発信し、意識や思考、経験などの情報を共有できる。ただし許可した情報であればな。理論上では、記憶のバックアップや演算の並列処理なども可能はずだ」

なるほど、ようは妹達内限定のインターネットってことか。というか、こんなに見える天井を見るのは初めてだな。

「ネットワークを利用した会話もできるはずだ。すでに検体番号5号までは稼働している。試しておいてはどうだ？」

なるほど、んじゃ早速。

あー、テスト。こちら00000号。聞こえていますかー？

(こちらは検体番号1号です、とミサカは応答します)

(こちらは検体番号2号です、とミサカは応答します)

(こちらは検体番号3号です、とミサカと応えます)

(こちらは検体番号4号です、とミサカは返事します)

(こちらは検体番号5号です、とミサカは返事します)

……………この口調は妹達内で流行りなんだろうか？調整の影響かな？

ミサカネットワークのテストで会話してみただけなんだからな。まあ何かあったら連絡しようぜ。あとで直接会えるやつもいるだろうけど、今後ともよろしくな。

(『よろしくお願ひします、とミサカはお願ひします』)

ネットワークに問題はなさそうだ。

「問題なく会話できたよ。そういえば他の妹達は？」

「これから身体検査中を行う。お前もついてこい」ようやく、妹達と直接対面できるのか。やったね00000号、家族が増えるよ！

外見も服も同じ。びっくりなほど見分けがつかない五つ子が検査室にいた。ミサカネットワークのおかげで各人の検体番号がわかるので識別できるが、無ければ見分けられる自信がないな。それにしてもみんなして無表情だな。

「よお、俺がさっき話した00000号だ。改めてみんなよろしくな」

『よろしく願いますとミサカは答えます』

ぺこりと無表情で頭をさげる妹達。かわいいけど、あまり感情を表に出さないんだな。はじめての顔あわせで緊張してるのかな。ちょうど傍にいた砥信さんに耳うちしてみた。

「砥信さん、あの子たち緊張してるのかな？さっきから無表情だけ」

「緊張？有り得ないわ」

え？有り得ない？



「そもそも喜怒哀楽などの感情は全て妹達にはないわ。元々感情は洗脳装置の調整に含まれていないもの」

え？じゃあそれって？

「妹達は感情がない。……………人とは違うのよ」

その一言はずきりと胸に響いた。

## 第八話

あれから砥信さんとは余り話していない。話していると気まずくな  
ってしまい、どちらかが会話を終わらせるからだ。

聞いた当初は、砥信さんも他のやつらと同じように俺を含めたク  
ロームを人間のように思っていないのかと絶望した。知り合って一ヶ月  
も経ってないけど、友人だと思ってた人の一言はそれだけ重かつた  
のだ。

しかし今は落ち着いたので、冷静に考えることができる。今までの  
砥信さんと話しをしてきた感じは、少なくとも他の研究者たちとは  
違うものだったはずだ。だからあの言葉はむしろ……。

けれどそれを肯定できるだけの確証がない。聞けばいいんだろうが、  
正直いうと怖かったりするのだ。否定されるのが。俺や妹達は人じ  
やないと言われるのは。だから悶々とした日々が続いている。

そんな悶々とした気持ちは関係ないとはかりに、ミサカネットワー  
クは徐々に賑やかになってきている。

この研究所では見かけないが、他の研究所でどんどん妹達が誕生し  
ているようだ。今確認しているだけでも50人を越えている。確認  
される度に挨拶をネットワーク経由で送った。他の妹達も挨拶した  
り頻繁にネットワークを利用していろいろだ。

うちの研究所にいる妹達を見る。このところよく一緒になるようになった。

相変わらず無表情で、笑ったりすることはない。一緒に訓練してみたり、料理を手伝わせてみたり、食べさせてみたりするがあまり反応はない。何かを食べたとしても美味しい、まずいといった感想は出るのが、あくまで淡々としている。

砥信さんのいうように感情という概念は本当にないんだろうか？妹達にも聞いてみたが結果は砥信さんと一緒だった。だが自分にはどうしても信じられない。

どちらかというと、感情がないのではなく育っていないだけなんじゃないかと思うのだ。赤ん坊の頃は泣くか笑う　それだけじゃないけど　といった、単純だがはつきりとした感情を表に出しやすい。だが、人は成長すれば色んな経験を経て感情はより複雑になり、抑えられるようになる。

妹達にはそう言った経験がない状態で成長させた。だから感情は抑える部分だけがいびつに成長してしまい、それが弊害になって感情が育っていないのかもしれない。まあ、これは全て憶測に過ぎないが。

幸い妹達は好奇心が旺盛だ。昨日も料理の仕方を学習してたっけ。うまくいわずに焦げた物体を食べたりしたけど。

知識はあるが経験はない。それはそうだ、中には昨日生まれたばかりの子もいるのだから。だから、きつと時間が経てば感情が芽生えるはずだ。

計画が終了する前には感情が芽生えて欲しいな。そして砥信さんや他の奴らに俺を妹達の事を認めてもらうんだ。妹達は人として生きているんだって。

人して認められたら、研究者たちも今の計画について思い直してくれないだろうか。そんな飛躍した考えが頭を過ぎる。量産型能力者計画の計画を軍用じゃなくて平和的な利用に変えてもらいたいのだ。例えば、学園都市内の警察みたいなものに協力するとかいいんじゃないか？学園都市は超能力者ばかりだし、悪用するやつだっているだろう。だからきつと学園都市には警察のような組織が存在するはずだ。そこに妹達全員雇ってもらおうのである。

電撃なら相手を傷付けずに取り押さえられるし、ミサカネットワーク使えば犯人追いかけるのに役に立ちそうだしな。

まあその考えは飛躍しすぎか。実現は難しいかもしれない。けれど、研究者があるいは軍関係者が、妹達を人として見てくれたら、人形として扱われるよりも、危険で粗雑な扱いをされにくくなるだろう。

そんな日がくれればいいな。そう切に願った。

けれど、俺達を取り巻く状況は嘲笑うかのように急変するのである。

## 第九話

00000号ですが、研究所の空気が悪いです。

何故空気が悪いのか。それは研究が芳しくない　　というか問題が発生したからである。問題とはなにか？それは妹達の能力のことである。

妹達の能力は身体検査の結果が、レベルは3または2であったからだ。(ばらつきに関しては個体差があるらしい)

元々俺に関しては完全な試作品、つまりクローンを生産するに当たり不備や不具合がないかどうかを確認することが意味合いが強い実験動物だったそうだ。

そのため、レベル5として生まれてこないという問題は発生したものの、クローンを生み出す理論は確立したので、あとは問題を分析し解明すればいいだけの話である。オリジナルや俺の検査結果を比較し、不具合の原因と思わしきデータを調整し直す。そんなフィードバックを繰り返せば、妹達はレベル5として生まれるはずだった。だが結論はレベル5にならなかつた。想定される不具合を全て修正した上、50体以上もの素体で試したものの、当初の想定とは違う結果を見せたのである。計画の進行が停滞してしまったのだ。

そのため研究員たちは険しい顔をしているし、天井も上司への経過報告などで忙しいらしい。

ここでもしクローンがレベル5になれないと言うことが確定したら、

量産型能力者計画は凍結し、俺達の廃棄処分は覆せないだろう。

残る可能性は能力の成長だ。オリジナルがそうであったようにクロ  
ーンもまたそうでは同じなのではないか。

この間俺はようやく身体検査でレベル4と診断された。そもそもオ  
リジナルが成長できたから、成長できるのではと軽く考えていたが、  
レベル3からレベル4にシフトするのも成功例は少ないそうだ。た  
だその結果、オリジナルのようにカリキュラムをこなせばレベル5  
になれるのではないかという可能性が強まったのである。

後天的な学習で成長が可能ならば、軍事利用で考えれば即戦力にな  
らないのは問題になるかもしれないが、レベル5は7人までしかい  
ない希少価値も考えると十分に検討に値する。

まあ問題がないわけではない。

それはレベル5に到達するまでに要する時間だ。ちなみにオリジナ  
ルでもレベル4からレベル5になるのに年単位で時間を要してい  
るのだ。それ以上かかる可能性がある。

それに妹達が個体によってレベル5に到達できない可能性もある。  
量産型能力者計画は偶発の産物であるレベル5を確実に生み出し量  
産する事が前提だ。これが偶発となると話が変わる。

そもそも理論が崩れた以上、本当にレベル5になれるのかどうかも不明なのだ。

できるかできないかわからない事のために何年も費やす事は難しい。研究にも資金が必要だ。できない可能性の高い研究は凍結されるだろう。

だが、なにか確証となるものがあれば別である。

学園都市にはそれを可能にするものがあつた。それが樹系図ツリーダイアグラムの設計者だ。

これは正しいデータさえ入力してやれば、完全な未来予測シミュレーションができるという超高性能コンピュータなのだ。樹系図の設計者が弾き出した結果は学園都市内で確定事項となるため、クローンがレベル5になれるとなれば、研究の継続は確定する。

樹系図の設計者はすぐに使えるわけではない。使用権限は学園都市の上層部の許可が必要になる。そのため天井は上司を通じて随分前から申請していたようで、すでに研究データを渡しており、あとは結果待ちである。



「というわけです、とミサカは簡潔に説明します」

「ふむ成る程な」

ちなみに今までの説明はミサカ1号たちと俺が情報を補完しあつてまとめてくれたものである。

今までわからないことは砥信さん経由で聞いていたが、砥信さんとはまだ仲直りできてないし。あ、なんだか悲しくなってきた。

「何と言つかまじでやばい状況なんだな」

「計画が凍結しても、他の計画に召集される可能性もあるのですぐ様廃棄処分はせず、培養器で保管されるだけではないでしょうか。もつともそのまま処分される可能性もありますが、とミサカは推察します」

寝てたら処分か。うわ、まじで怖いわ。想像して身震いするくらい。みんなは自分が廃棄処分されることについてどう思ってるんだろう。

「怖いこというなよ、3号。お前達は廃棄処分が怖くないのか？」

「00000号、前にも言いましたが、妹達に感情という概念は存在しません。だから怖いと言う意味は知っていても理解はできません、とミサカは物覚えの悪い00000号に呆れながら答えます」

……たまにこいつら意地悪だ。砥信さん洗脳装置で悪口をインストールさせたんだろうか。

「00000号は何が怖いのですか、とミサカは首を傾げながら尋ねます。そもそも計画が凍結した場合、私達の存在意義も失われるのですから処分は最善であります、とミサカは述べます」

存在意義か。

「そりゃ死ぬんだから怖いに決まってる。死ねばやりたいこともできないだろ」

「やりたいことですか？とミサカは疑問を投げ掛けます」

「おう、自由に外出できないから、自由に外にも出てみたいしな。買い物のみしか出られないから、学園都市の一部しか知らないし」

学園都市は他の都市と比べて数十年先を進んでいる最先端の都市なんだとか。きつと珍しいものがありそうだ。

「それに計画だけが全てじゃないんじゃないか。だいたい存在意義が無くなったら死ぬ殺すなんてのもおかしいだろ。その理屈でいけば天井たち研究者だって研究できなくなったら、処分になるぞ」

「ですが彼らは人です、とミサカは反論します」

彼女たちも、人と妹達は違う生き物と考えているようだ。だが違ってなんだ？

「じゃあ聞くが4号、俺達と天井たちとの違いはなんなんだ？感情の有無か？クローンだから違うのか？感情や生まれだつて人それぞれ違うだろ。だったら大差ないんじゃないか、俺達は」

「やはり00000号は変わっています、とミサカは正直に伝えます」

妹達はそう答えながら、少し何かを考えているようだった。

本当はもっと時間が欲しい。彼女たちが考える時間を。けど、それには時間が足りない。このまま停滞して時間が稼げればいいんだが。そんな願いも虚しく、樹系図の設計者の結果が出たのは数日後のことだった。

その日、量産型能力者計画の凍結が決定した。

## 第九話（後書き）

次話辺りから徐々に独自設定やら乖離が多くなっていくと思います。

## 第十話

1・妹達の能力は『欠陥電気<sup>レディオノイズ</sup>』である。レベルは3または2（個体差による）であり、それ以上進化できない。

2・00000号のみレベル5に進化できる。レベル5に進化するには、超電磁砲がレベル5に進化したカリキュラムで15年を要する。

3・00000号及び妹達の耐用年数は10年であり、レベル5に進化することは不可能である。

上記の結果から、量産型能力者計画は実現不可であり、計画を凍結する。

これが樹系図の設計者から導き出された予測演算を元に上層部が下した結果だった。

「理論に問題は無かったはずだ！だが、何故ダメなんだ！」

研究を主導していた科学者

天井が叫ぶ。

妹達がレベル5になれないと、計画の凍結が決定した日、研究者たちは多いに荒れた。

学園都市が誇る最高の超能力者。それを量産できる偉業。都市内でも一流の科学者たちを集めた計画。成功するはずだった。科学者として後世に遺る偉業をなしとげ輝く未来になるはずだった。

だが結果は欠陥だらけの能力者を生み出しただけ。こんなガラクタならば学園都市には吐いて棄てるほどいる。

唯一の成功例も進化する想定していた耐用年数を越えた年数が必要になる。これでは成功例とは言いつらい。しかも元々試験体で造られた素体が成功例だなんて、飛んだお笑い草だ。

故に心は荒む。そしてそれを晴らす矛先を探す。欠陥の烙印を押された少女たちが選ばれるのに時間はかからない。研究対象であるため直接手を上げるものはいなかった。しかし、出来損ないや欠陥品と口汚く罵る言葉は全て少女たちに向けられる。

そんな悪意に包まれた中、その言葉すら届かない少女がいた  
00000号のことである。

計画凍結したと同時に余命を宣告された00000号です。あはは

ははははは、なんだこれ、もう笑うしかねえ。

絶望した！この世界の厳しさに絶望した！

非人道な計画、軍事利用、廃棄処分、最後は寿命短いとか死亡フラグ乱立しすぎだろ！この世界はどんだけSなんだよ、バフリンだって半分は優しさで出来てんぞ！！胃腸に優しい成分だがな！！もっと命大事にして下さい！！！！あまりの酷さに錯乱したじゃねえですか！！！！！！

あー逃げ出そうか、こんな所。廃棄処分も考えられるしな。

よし、こんな時はミサカ会議だ！ 説明しよう！ミサカ会議とは、ぶつちやけミサカネットワークを使った妹達との会議である。

議題はみんなで研究所から脱走するか否かだ。

投票結果

賛成 1

反対 50

圧倒的……………ッ！圧倒的否決ッ！！

以下、主だった妹達の反応。

「ミサカネットワークに存在する限り、居場所はずぐ見つかります、とミサカは無知な000000号に忠告します」

「00000号は能力が強いので成功する確率が高いですが、他の研究所は警備員に捕まる可能性が高いです、とミサカは妹達を見捨

てる00000号の非情さに感心します」

「そもそも逃走後の計画が不明瞭です。戸籍も無しに生活は出来ません、とミサカは計画の無謀さを指摘します」

フルボッコである。妹達は手加減を知りませんね。お姉ちゃん悲しいです。

その日、俺は枕を涙で濡らした。

計画凍結になると、研究所は機密保持のため閉鎖される。しかし研究に使われた器材の片付けや資料の整理があるので、すぐには閉鎖されなかった。片付け作業には俺や妹達も狩り出された。

だがそれも長続きはしない。次の研究が決まり研究所をあとにする者も増え、次第に研究所は閑散となっていた。

ミサカネットワークで所在のわかる妹達も徐々に確認が取れなくなっていた。閉鎖中は次の研究が決まるまで全ての妹達は培養器に保管されるせいだ。もう今は二桁をきっている。うち五人はこの研究所の妹達だから、もう他の研究所もほとんど閉鎖したのだろう。

今日は砥信さんが研究所を去る。……………もう会えなくなるかもしれないから、最後まで仲直りして別れよう。



「砥信さん」

声をかけると、彼女が振り返る。ちゃんと顔を見るのはいつ以来だろうか。

「お疲れ様でした。色々お世話になりました」

ぺこりとお辞儀する。最後まで礼儀正しくいこう。始めの頃は目上だから敬語にしろと言われたが、天井ですら敬語じゃなかったのが彼女が折れたのもいい思い出だ。

「……………」

彼女はなにも答えない。

「じゃあ、さようなら」

その場をあとにしようとした時、

「待ちなさい」

砥信さんが呼び止めた。

「私は今でも妹達は感情がないと思っているわ」

息がつまる。

「however」

砥信さんは少し微笑んで

「いつか感情が芽生えると思うわ」

そう言ってくれた。

「どんな研究になるかわからない、nevertheless、必ずまた会いましょう」

もちろん俺の返事は笑顔で

ああ、またな。

培養器に入る。保存液に浸かるまで妹達と話した。今度起きる時までにやりたい事見つけるとか、本当に取り留めのない話だ。保存液が満たされていく。徐々に意識が保てなくなる。

今度起きる時は砥信さんが妹達を人として……見てくれる。妹達も……きっと感情が芽生えて……人として……生きるだろう……。次起きる時は……きっと……幸せに……。

## 第十話（後書き）

とある科学の完全調整・完

次回の00000号先生の活躍にご期待下さい！

いやもうちょっとだけ続くんですけどね。

## 第十一話

研究所の一室。一人の男が黙々とキーボードを叩く。

部屋の主が神経質な性格の為か、膨大な書類があるにも関わらず、机上は整然としている。その書類に目を通しながら、ただひたすらにキーボードを叩いていた。無機質だがやけに規則正しい音が部屋に響く。入力を終えたのか音が止み、男　天井亜雄はモニターに視線を移す。

そこには「超能力進化（レベル5シフト）実験計画書」と表示されていた。

量産型能力者計画が凍結して早一ヶ月が過ぎた。

非公式な実験ではあったが、学園都市の一部の科学者では非常に注目された研究内容だった。結果は失敗だったが、クローン技術の確立、そして妹達と成果物もある。

そのため計画を再利用できないか様々な検討がなされた。そして二つのプランを実施することが決定した。

その中のプランの一つ。それが「超能力進化実験」である。

内容は決して公表できるような代物ではない。しかしこれらのプラ

ンが成功すれば、量産型能力者計画など及びもしない名声を得られるだろう。

だが、今回は前回ののような失敗を重ねる訳にはいかない。そうなれば学園都市での研究者としての地位は失われる可能性が高い。

計画に穴がないかどうか確認するため、何度も何度もモニターに目を通す。

前回の計画は、妹達が欠陥品であると特定されるまでに、時間がかってしまった。計画の事前に樹系図の設計者が使えば早期に計画の失敗がわかったかもしれない。しかし妹達の実測した能力データが無ければ、そもそも樹系図の設計者が演算できなかったのである。

だが、今回は違う。前回の結果を元にして、事前に樹系図の設計者の予測演算も行っているプランだ。実験が失敗するはずがない。

勿論、だからと言って対策を取らないわけではないが……。天井は前回の計画から非常に慎重になっていた。もう後がないのだからこそ、万全を期す。

夢を見ていた。憑依する前の子供の頃の夢。

当時小学生だった俺は、この頃は余り人と話すのが得意じゃなかった。それが特別親しい友達なんていなかった。それが災いしたのだ

ろう。つかず離れずいた距離が次第に離れていく級友。いじめに発展するのはその距離が無視できないほど広がっている。そう自覚した時だった。

最初はいわゆるからかいの対象だった。次第にエスカレートし、所謂いじめのテンプレートな展開で物が無くなる、暴力は振るわれる、距離を置かれる、陰口を聞こえよがしに叩かれるだ。そして最終段階はいなかったことにされる。存在を否定された。級友や担任からすら。

早い時点で親に相談していたらよかったのかもしれない。だが、それより先に心が折れてしまったら、反抗する意志すら無くなってしまったらあとはされるがままで。まずいじめる側は、反抗する意志を潰しにかかる。

子供が考えつく、できる対応なんてたかが知れている。親に話すか先生に相談するかだ。親に話そうとすれば暴力で脅され、担任はいじめが存在すれば責任を負わされるため、見て見ぬフリをする。休み続けるには、転校するには親に理由を言わなければならぬ。どんどん追い詰められていく。周りから無視され、自分は無価値で生きるべきではなんじゃないかと思っただけだった。

幸い俺は他の教師がいじめに気づき、親が助けてくれ、そのまま転校となった。

さらに幸運なことに次の学校で友達ができ、親と友達に支えられたから立ち直ることができた。

あの頃の自分と妹達はある意味似ている。周りから人扱いされないところ、計画が凍結し、実験体の立場がなくなったことで処分されても構わないと自身の価値を蔑ろにしているところとか。だから彼女達をなんとか変えたいのかもしれない。あの頃助けてくれた人達のように。

だから変えるんだ。

少し光を感じる。次第に眩しく感じて意識が覚める。どうやら培養器の中だ。……………処分はされなかったらしい。

培養器の扉が開き、表にでる。ニヤニヤと笑う白衣の男。培養器は保護液で満たされていたので当然俺は裸。

ああ、なんか凄い既視感。取り合えず一回殺つとく？

「また私に電撃を放つとは！相変わらずお前は変わらないな！！」

「いやさ、少女が裸でいてさ、目の前にニヤニヤしてる男がいてみ？どうみても変質者だって」

想像したのか天井は顔が引き攣った。まあ気絶するほどやらないように手加減したから勘弁してくれ。

「で、俺を起こしたってことは新しい実験が決まったってことだよな。妹達も実験に参加するのか？」

手加減した理由はこいつに事情を聞きたためだ。引き攣ってた顔が綻ぶ。よくぞ聞いてくれたって表情だな。わかりやすいぞ。

「ああ。超能力者進化実験という実験だ。妹達も使ってたな」

「聞く限りでは、能力をレベル5に進化させる実験みたいだが……、俺達は進化できないんじゃないかなかったのか？もしかして、寝ている間に進化できる技術でも出来たのか？」

そう、進化できないからこそ以前の計画は失敗したんだ。もし進化できるなら、その前提が崩れることになる。

「流石に計画が凍結してまだ一ヶ月しか経っていない。新技術はまだ確立されていないさ」

じゃあどうということだ？進化する方法が思いつかない。理解できていない顔に天井は心底満足そうだ。いるよな、こういう奴。

「進化させるのはお前だ。樹系図の設計者はお前のみレベル5に進化可能と演算しただろう」



「いや、たしかにそうだが寿命が10年しかないんだろ？仮に寿命を延ばしても、実験に15年もかけられるのか？」

「そこで妹達を使う」

妹達？なんでここで出てくる？

「まだわからないか？ミサカネットワークだよ。ミサカネットワークを使って、レベル5が受けたカリキュラムを妹達にも受けさせる。そしてその経験をお前に共有させたらどうなる？」

……！なるほど！ネットワークで経験値を積むのか。たしかに時間を大幅に短縮できるかもしれない。だが……。

「それでも、50人じゃ時間はかかるんじゃないか？寿命までには届きそうだけど。単純にカリキュラムを分割しても50人じゃ……

……」

「20000だ」

は？

「20000の妹達を使って、お前を進化させる。それが超能力進化実験の実体だ」

な、なんだってー!!?!?!?!?

## 第十二話

な、なんだって　！！！！？？？

20000人の妹達に経験を積んでもらい、ミサカネットワークからその経験を共有、経験を蓄積し、00000号をレベル5に進化させる　超能力進化実験というトンデモ計画に思わず叫び声をあげた。

なにその「時間が無ければ人を増やせばいいじゃない」な発想は！  
いいのか？そんな強引なパワーレベリングは！

一瞬、某忍者漫画の影分身での修業風景とか、とある馬車の武器商人が馬車の中にいるだけでレベルがカンストした風景が頭を過ぎった。

ああそついえば忍者漫画で某上忍は雷技使ってたな。あれ今度真似しよう。……………じゃなくて。

「キバヤ……………天井、しかしそんな無茶苦茶な実験は本当にできるのか？それに20000人は予算的に大丈夫なのか？」

とかく研究にはお金がかかるのだ。妹達一人を生み出すのに18万円かかり、さらに衣食住にもお金はかかる。20000人ともなると1日だけでも相当な額になるだろう。さらに研究所の維持、科学者や警備などの人件費など雑費も考えると想像もつかない。

「ああ。今回は樹系図の設計者で事前に演算したからな、間違いないはずだ。統括理事会の承認を得て、予算も十分にあるさ」

成る程、樹系図の設計者で演算された結果は確定事項のようなものだ。だから上層部も一度は失敗した計画の再利用を決定できたのか。天井の顔も自信に満ち溢れているな。

もし、この実験がまた非人道的な実験だったら、流石に抵抗するつもりだった。しかし聞く限りでは命を失ったり、軍事利用される内容ではない。流石に19950人も妹達を実験の為に新たに生み出すのは気にかかるが。

だが生活するとなると、実験を受けるしかない。新たに生を受ける彼女達と一緒に。前の実験ではできなかった妹達の感情を芽生えさせ、周りから人して扱ってもらって目標もやりたいいな。

憑依する前だったら、クローンに漠然とした忌避感があったが、今は違う。どうやって生まれたかは選べようがないものだ。むしろこれからどう生きるかが問題なのだ。

だから実験を受けることにした。

「そう言えば、砥信さん………布束さんはこの実験に参加しているのか？」

砥信さんの約束。できれば叶うといいのだが。

「残念だが、彼女はこの研究には参加していない。そのかわり優秀なスタッフはたくさんいるがね」

そう……か。まあいつか会えるだろう。約束したもんな。

「ああそれから、00000号、これを渡しておこう」

ややゴツイゴーグルを渡される。なんだこれ？視力はやたらいいほうで視力矯正は必要ないんだが。

「これは電磁波を視覚化できるゴーグルだ。以前、お前がオリジナルの能力との差異について指摘しただろう。進化するまではそれでスペックを補う」

研究のための新装備！そういうのもあるのか！電磁波見れるようになったら、また能力が増えるかな？うーん、一度考えんとなあ。

「それからお前は、こちらが指示したカリキュラムを行ってもらおう。ミサカネットを使ってはあげられない肉体的な刺激、薬物投与などのカリキュラムを優先するがな。その間に二万の検体を造りだす」

そして実験は始まった。

まず手始めに行ったことは、既に覚醒済みの妹達のカリキュラムを受けさせ、俺自身がどのくらい成長できるのかの確認だった。

樹系図の設計者が演算したとはいえ、経験を共有し、成長できるかは実際に目にしないと安心できないしな。

隣にいる3号と他の研究所にいる36号がカリキュラムを受けるみたいだ。

カリキュラムは薬品の投与や電極による刺激を与えるようなもの、それからひたすら反復作業を行うものもある。例えば透視能力のカリキュラムなんかは目隠ししてポーカーに10連続勝利するというふざけたものもあるくらいだ。

今回やるのは後者の反復作業にあたるカリキュラムで、ひたすら計測器に一定の電撃を流し続けるというものだ。一定量の電撃を流すことで電撃の制御能力の向上、持久力の向上を目的としたもので電撃使いには基本的なカリキュラムである。しかし地味だが、電撃使いは電池切れという制限があるので長時間できないという問題もある。だが二万の妹達が交代でやれば24時間できるかもしれないな。

(じゃよろしくな、3号、36号)

(わかりました、00000号とミサカは返答します)

どうやらネットワーク上で経験の共有が始まったようだ。視覚的な情報　所謂3号や36号が見ているものも見る事ができるが、今回は見ずにあくまで制御に関する情報のみ共有する。基本的にこのカリキュラムは見ることに意味はないしな。

結果はカリキュラム前と後で身体検査してみると成長している数値が出た。しかし同じカリキュラムを受けた成長率を考えると本当に微々たるものだが。まあそれを数で埋めるようにするんだろうけど。

今の状況だと某有名RPGでいえば、スライムから得る経験値だけでギ　デイン覚えようとしてるようなもんだからなあ。

…………… 本当にこの計画うまくいくんだろうか？

## 第十三話

いつもの自分の部屋。一ヶ月放置された部屋だが清掃用のロボットが掃除をしたらしく、塵ひとつない。1号たち妹達を呼んで今回の実験に関して聞いてみた。

「本来カリキュラムを受ける場合、被験者の能力に合わせて行われます。例えば今回の場合、00000号はレベル4相当の電撃を制御しますが、3号や36号はレベル3相当の電撃の制御しかできません。仮に00000号がレベル3相当でカリキュラムを行った場合、樹形図の設計者が導き出した演算結果より大幅な期間の増加が想定されます、とミサカは説明します」

「だから被験者である00000号がカリキュラムをこなすのと、妹達がカリキュラムをこなすのでは大幅に成長率に差が出るのです、とミサカは断言します」

例えば腕立て伏せを200回以上こなせる人が日々200回やるのと、20回やるのでは筋肉の付き方に差が出るようなものか。

「そっか、じゃあ樹形図の設計者の計算だと1年で進化するってのは、その成長効率を踏まえた上での結果というわけか」

「そうなります」

成長率が低いので、カリキュラムだけじゃとても足りないのではと思ったが、そうでもないんだな。

「じゃあ実験自体は一年で終了するのか。一年後はやっぱり他の実



験に参加させられるのかね？」

やっぱり他の実験や研究に参加するんだらうか？

「……………」

「あれ、なんでみんな黙り込むわけ？」

「なんでもありません。それよりいつもの食事はまだですかとミサカは要求します」

「いや流石に食材きれてるから明日な」

さすがに食材がないとお手上げである。今回も外出許可は取れるのかね？

「そうですね、とミサカは嘆息します」

「ん？どうした？」

「他の妹達と情報の共有を行った際、食事について確認してみたのですが、錠剤や点滴で済ませているようです、とミサカは驚愕の情報に愕然としました」

「錠剤がどんな味か味覚を共有したのですが、余りのまずさに000号の手料理が如何に美味しいかと理解しました、とミサカは食事の重要度を上方修正しました」

そっか。1号達は最初から俺が食事だしていたけど、他の妹達はそ

うなのか。俺が最初に貰ったブロック食はまだまともなほうなんだな。

「それで他の妹達が000000号の手料理に興味を示して何度か実験の共有を行っています、とミサカは現状を報告します」

「今では新たな食事が出た際、即時情報公開を要求される状況です、とミサカは現状の補足説明をします」

……もしかすると錠剤飲みながら、手料理の情報を共有して味をごまかしてたりするんだろうか？ 侘しい食事風景を想像して哀しくなった。これはひどい。……妹達の食糧事情はなかなか深刻な問題のようだ。

「食事に関しては、000000号グッズジョブです、とミサカは惜しめない称賛を贈ります」

……珍しく褒められた。仕方がないなあ、明日はご馳走作ろうかな！

(これだから000000号はチョロいです、とミサカはさりげなく呟きます)

実験が始まって十日が過ぎた。外出の許可は降りた。今回の実験は研修として妹達も外出することがあるらしい。

ちなみに外出時の服装は常盤台中学校の制服である。常盤台中学とは学園都市でも有数のお嬢様学校で、優秀な能力者が多数在籍して

いる。オリジナルもそこに通っているらしい。

何故この制服なのかというと、万が一オリジナルの知り合いに遭遇した際にごまかすためだ。（オリジナルにより近付けるという意味もあるらしいが）最初聞いた時は、返って知り合いに会うとごまかすきれないような気がするんだが。どうやら常盤台はお嬢様学校なだけあって、校則が厳しいらしく外出時は制服でなければならぬのである。だから私服で見つかれば、返って大事になりオリジナルに連絡が入りやすくなる。

まあなんだかんだで知り合いに遭遇することはなかった。二、三度同じ制服の如何にもお嬢様な娘と遭遇したが、知り合いではないようで話し掛けては来なかった。……まさか文武両道な完璧超人であるオリジナルがぼっちだから話し掛けられないことはないだろうが。

学園都市は広いのだ。そう知り合いやましてやオリジナルなんて会うわけがない。

話が代わるが、学園都市は治安が悪いようだ。治安維持のために学生で構成されている風紀委員と教員で構成されている警備員という組織がある。

最も風紀委員は学生のためか危険度の低いどちらかと言うと交番お

巡りさんのような役回りで、警備員は危険度が高く、直接超能力者を取り押さえる役のようだ。

この間見たのは、風紀委員の子だろう。まだ小学生ぐらいの子供だったが郵便局で強盗があり、その強盗と交戦したらしい。能力者の戦いは凄まじかったのか、その子は足をやられ、シャッターごとにかで貫かれたような跡まであった。

やはり超能力を悪用するやつらはいららしい。専任の治安維持機構が必要ではないか？是非妹達による治安維持を検討して欲しいところだ。1年後の就職先には調度いい。2万人の数は伊達じゃない！

そんなことを考えながらスーパーに向かっていた。ああ、早く行かなきゃ。しかしやっぱり外はいい。研究所は広いが外の景色が見られないからな。

！あれなんか今妙な感覚が体を突き抜けた。あれはなんだ？

「待ちなさい！」

不意に背後から声をかけられる。

「あなた…、何者？」

振り返れば、今学園都市で一番会ってはいけない人がそこにいた。

## 第十四話

振り返ればそこには今一番会ってはいけない人  
ここにいた。 御坂美琴がそ

御坂美琴 常盤台中学1年ながら7人しかいないレベル5の第  
三位で、超電磁砲の異名を持つ最強の電撃使い。そして俺や妹達の  
素となったオ리지ナル。

……いやあ世間は狭いですね。……ってどうすんのオ！ヤバい  
ヤバいやバい！！相手めっちゃ睨んでるし！！！！

「……………えーつとですね、あなたのお母さんのお姉さんの旦那さん  
の従姉妹の娘なんですけど、カエツテイイデスカ？」

「そんなこと信じられるわけないでしょ。それとも答えられない？  
なら痛い目にあってもいい？力づくで聞いてもいいのよ」

こちらを威嚇するようにバチバチと彼女の身体から放電による火花  
が散った。オ리지ナルはめっちゃ好戦的である。お嬢様ではない。  
お嬢様（笑）だ、これ。

逃げるのは無理そうだ。ここは覚悟を決めよう。

「わかった。とりあえず場所を変えよう。ただ先に用事を済ませて  
もいいか？」

「ええ、いいわよ」

「わかった。ついて来てくれ」

御坂美琴は憂鬱だった。とある悩みを抱えていた。事は1ヶ月以上前に遡る。それはとある噂が流れたからだ。

超電磁砲のDNAを素にしたクローンが製造されている　　という噂だ。軍事利用を目的としており実用化されてそうだというのだ。最初は根も葉も無い噂だと思っていた。だがしかし完全に否定することできない。何故なら否定できないだけの理由もあったから。

筋ジストロフィー症　　筋萎縮と筋力低下が進行していく遺伝性筋疾患　　現代医学では治療法が無い。

脳の命令は電気信号で送られる。もし生体電気を操れば、通常の神経ルートを使わずに筋肉を動かせるのではないか　　つまり電撃使いのDNAマップを解析し、生体電気を操る術を植え付けることで筋ジストロフィー症を克服することができるのではないか。

そう考えた科学者は電撃使いである当時幼かった御坂美琴にDNAマップの提供を求めた。筋ジストロフィー症を目の当たりにした美琴はもちろん快く提供に応じた。　　それが最善であると信じて。

その提供したDNAマップがクローンの製造に関わっているのではないかと懸念しているのである。

そしてその信憑性を高めるかのように、普段と異なった超電磁砲の目撃情報がちらほら流れて来るようになった。

曰く、大量のレジ袋を抱えて歩く超電磁砲を見かけたとか。

曰く、スーパーで特番していた卵を見て「二人じゃないと安くならないのか……」と値札を睨んでいた超電磁砲を見かけたとか。

曰く、特売品を抱えて小躍りする超電磁砲を見かけたとか。

曰く、子供ばい服を手に悩んでいる超電磁砲を見たとか。

最初それを聞いた時は思わずどこの主婦かっ?!と思った。  
最も最後の噂は当人なのだが。

ネットでは多額の研究費もらっている割にケチ臭いとか、意外と苦学生なんじゃないかという本人説と、普段の本人から掛け離れた姿に以前から噂されているクローンじゃないかという説が流れていた。

直接真偽を確かめにくる者はいなかったが、周囲の噂やネットの情報をまとめるとあまりに具体的な目撃情報と自身に身に覚えが無い事なので、クローンの噂は信憑性が高いのではと思ったのだ。

それで目撃情報のあった地域を散策していたのである。すると自分と同じような力の放射を感じた。気になり追いかけてみると、そこには自分とური二つの少女がいた。

クローンは実在したのだ！衝撃が全身を突き抜けた。襲い掛かってくるのは、クローンに対する生理的な嫌悪。造りだした科学者達への憎悪。そして罪悪感。

複雑な感情が入り混じったがすぐに切り替えた。もし軍事利用でクローンを造りだしているというなら、計画を頓挫させてやる。そう考えクローンの少女を問い詰めた。

少女は抵抗する気は無いのか、諦めたのか用事を済ませたら事情を話すようだ。

用事 それはスーパーでの買い物だった。ああ、噂はここまで本当だったんだ。先程までの緊張が一気に霧散した。

卵お一人様100円が2パック買えた！着いてきたオリジナルのおかげだ。当の本人は、なんかさつきと違って凄い脱力してるけど。今は近くの公園のベンチにいる。

「んじゃまあ、どこから話そうか、オリジナル」

「……………オリジナルってことはやっぱりあんた、私のクローンなの？」



「ああ、検体番号0号、一番最初に生まれたクローンで、ミサカ0000号と呼ばれている。ま、00000号って呼んでくれ」

「最初？ちよ…ちよっと、まさかアンタみたいなのが五人も十人もいるんじゃないでしょうね？」

「ああ、今は俺を含めて五十一人だ。今後の計画で二万人に増える予定だ。みんなまとめて妹達って呼ばれている」

超能力者進化実験で新たに生み出された妹達はまだいない。生み出すには培養器で十四日かかるし、洗脳装置による強制入力もある。最も洗脳装置にかかる時間は今までのように都度調整する必要がないので数時間で済むそうだが。

やっぱり、気味が悪いんだろうな。オリジナルの顔が青ざめている。憑依前なら自分でもそうなるかもしれない。

「……………何のために造られたわけ？」

「元は量産能力者計画というクローンを軍事利用するために生み出された」

「……………！どこのどいつが計画を主導してるのー！！」

「現場を仕切ってるのは天井だと思うけど、どうだろうなあ？学園

都市の上層部も関わってるみたいだし。それにその計画自体は失敗で凍結しちゃったし」

「な……………！？え……………？」

「生み出さた妹達や俺はレベル5に進化できないってことがわかって、量産型能力者計画は取りやめたんだ」

「じゃあアンタはなんでここにいるの？それにさっきの話と矛盾するじゃない」

超能力者進化実験のことを話す。妹達二万人の経験の蓄積とネットワークで経験の共有によって、寿命のせいでレベル5になれない俺をレベル5に進化させる方法を。

「まあそんなわけで二万人を生み出すことになったんだ」

「……………」

「……………オリジナルからすれば、俺達の存在は受け入れられないのかもしれない。こんなバカげた計画を止めたいかもしれない」

「生まれてきた俺達は実験がないと廃棄処分になるかもしれない。けど少なくとも俺がレベル5になるまではこの実験内容なら処分されることはないだろう」

だから。

「その間に妹達に感情を芽生えさせて、実験してる奴らに妹達を人

間として認識してもらおう。そうすれば簡単に殺そうとは思わなくなるはずだ」

オリジナルの目を見る。

「だから俺達に生きるチャンスをくれないか？頼む」

そう言って俺は深く頭を下げた。

## 第十四話（後書き）

00000号が量産型能力者計画で買い出ししている姿を見られたために、クローンの噂がかなり早い時点で出回っています。

## 第十五話

顔を上げられない。オリジナルはどう思ったか不安だ。勢いで言ったけど、失敗したか？心臓がバクバクいつてる。

「……………とりあえず頭あげなさい」

顔を上げ、オリジナルを見る。腕を組んで険しい顔をしているな。

「アンタの言い分はわかったわ。けど具体的にはなにをするつもり？」

「うつ……………」

感情が芽生える方法か。基本的には見守ることしかしなかった。色々な経験を経て成長するのだから、いつかは時間が解決してくれるかもしれない。だが、限られた時間がある以上何らかのきっかけは考えなければならぬだろう。少なくともオリジナルは納得しまい。

実の所全く考えがないわけではない。一つは自身の感情をミサカネツトワークで共有できないかというものだった。しかし感情データがどういうものなのか、わからない限り共有することが不可能だ。

もう一つは洗脳装置を使った感情の入力である。一人にでも感情が入力できれば、あとはネットワークで共有できるかもしれない。し

かしこれは感情はどういったデータかわからない問題に加え、洗脳装置を使うには専門家が必要だ。

洗脳装置の専門家　一人だけ心当たりがあるが。

「本来、感情は自発的に芽生えないといけないと思う。けどきつかけになるものなら、一つだけ思い当たる方法がある」

「その方法は？」

「妹達は肉体や人格を速成させるために色々な技術を使ってる。その中で知識や人格なんかは洗脳装置って呼ばれる機械で脳情報を入力して調整しているんだ。だから、それを使って擬似的な感情を入力すれば、本来の感情の芽生えを誘発できるかもしれない。……最も感情を入力できるのでどうかはわからないけど。けれど洗脳装置を監修した人なら可能かもしれない」

それでも、それでも砥信さんならやってくれる………！

「布束砥信。彼女を見つけ出す」

しかし砥信さんを探すととなると大変だな。どうしよう。

「そう、わかったわ。じゃあ私はその人は探すわ」

「外出してる時間に限りがあるし、それは助かるが、いいのか？」

「ええ、元はと言えば私のDNAが原因だしね。勝手に使われているのはしゃくだし、自分で撒いた種だもの。自分の手で片を付けるわ」

まさか協力してくれるとは。

「オリジナル……………お前結構いい奴なんだな……………」

「なっ、ちっ違うわよ！ただでさえ、勝手にクローン造られたから研究を止めたいだけよ！！……………っ、アンタその温かい目はやめなさい！！！」

照れだろうか、電撃を放出するオリジナル。オリジナルの優しさはビリビリだ。

「なんかアンタといると、たまに疲れるわ……………。というか、アンタ本当にクローンなの？話を聞く限りだとクローンは感情ないんですよ」

「とある人格が憑依して感情が宿ったんだ」

「……………笑えない冗談ね。どこの漫画の設定よ」

「ですよー。まあ普通は信じられないよな。」

「まあ原因はよくわからないんだわ。他の妹達と違ってレベル5に

進化できるみたいだし、まあ気にするなオリジナル」

「他の妹達がアンタと同じでなくてよかったわ。あとオリジナルって呼ぶのはやめなさい、御坂美琴って名前があるんだから」

んー気になるか。じゃあ。

「じゃあお姉様で」

憑依前からすればずっと年下の子だけど。

「はあ？」

「いや他の妹達はお姉様って、呼んでるんだ。見た目みて姉妹に見えるしいんじゃないか、お姉様」

「……………はあ、まあいいわ」

納得はいつてないようだが、諦めたようだな。

「時間も危ないし、そろそろ帰るわ。定期的にこの辺に買い物にくるから、もし布束さんを見つけたら教えてくれ、じゃまたなーお姉様！」

そういつて遠ざかっていくクローンの少女を美琴は見送った。



クローンとは思えないような表情豊かな少女。

彼女は、ただクローンとして造り出された自分達の生を欲した。純粋な生の渴望。普通の人より、より人間らしいと感じた。

クローン製造の計画は止めたい。だが彼女の生きるチャンスは潰したくない。

少女の言っていることに嘘は感じなかった。しかし、研究自体には疑問があった。

量産に失敗したクローンをレベル5に進化させて何に利用するのか？

たしかにレベル5は貴重だ。しかし、自分のクローンが同じ能力なら、自分は様々な研究に協力しているので、十分なデータがあるはずである。新たな研究を興すような話は聞いていない。軍事利用は凍結したから違うだろう。

本来研究は何らかの目的があって行われるはずだ。それが不明瞭なのである。

それが何かはわからない。理解するには情報が少な過ぎる。

彼女から聞いた情報　　量産型能力者計画、科学者・天井、妹達、超能力者進化実験、そして布束砥信。これらがキーワードだ。

幸い発電能力者である自分はネットワークから様々な情報をハッキングして入手できる。まずは情報収集が必要だ。

絶対に妹達を命を奪わせない。

超電磁砲が今学園都市の闇に立ち向かう

。

## 第十六話

なんか主人公が途中で変わったような気がする000000号です。

現在、正座中です。周りには妹達があります。

「買い物でお姉様に遭遇するとは迂闊です、とミサカは000000号を叱責します」

えーと、なんでバレてるんでしょうか？

「ミサカネットワークからお姉様と遭遇したことはリアルタイムで情報を得ています、とミサカはネタバレします」

……………まさかストーキングされてます？

「しかしお姉様に知られた所で実験の障害にはならないのではないのでしょうか、とミサカは疑問を提起します」

話を逸らされた気もするけど、確かに協力してくれる話になったかな。本来ならなじられても、実験を止められても文句は言えない。初対面でしかもクローンが一方的にお願いしたけど、文句一つ言わなかったし。お姉様はいい人だよな。

「確かに実験を止めるとなると一個人でできる事は高が知れていません。妨害されたとしても、前の計画のように計画の前提が破綻でもしない限り、実験は継続するため障害にはならないでしょう、とミサカは判断します」

破綻ねえ。この実験だと俺がいなくなっちゃえば止まりそうだけど、その時点で妹達に死亡フラグが立ちそうだからな。それは一番出来ない。むしろ時間稼ぎはしたいんだが。

「所で00000号。お姉様との会話の中で、私達に感情を芽生えさせる話をしていましたが本気ですか、とミサカは問います」

会話もバツチリ盗聴されているんですね。

「本気だぞ。前も言ったけど、俺達は人と大差無いはずだ。だからきつと感情だつてある。クローンだからって自分を卑下しなくてもいいんだ。人扱いされないで廃棄処分されていいなんてことはない」

「妹達は計画の為に造られた模造品です。作り物の体に借り物の心。人扱いされないのも計画が無ければ廃棄されるのも当然です」

「体はそうかもしれないが心はそうなんかじゃないさ、お前達は」

俺は今まで過ごして知っている。皆同じ姿だが、表に感情を出せないがそれぞれ違う個があることを。

「外の事が気になって仕方ない1号、甘いもの好き2号、一番手伝つてくれる3号、綺麗好き4号、みんなに虐められると助けてくれる5号……他の妹達はあってないからわからないけれど、けど全く同じ妹達はいないはずだ。だからお前達がいなくなったら、お前達の代わりはいない。いなくなったら俺が悲しいぞ」

「悲しい　ですか」

「どうして00000号はそこまで私達を気にするのですか」

昔の自分を見てるようで助けたいってのもあるけど、これは言いづらいな。

「まあ、俺はお前達のお姉ちゃんだからな。妹達を気にして当然だ」

「……………」

あれー返事ないんですけど。ひよっとして外したかな？

ミサカ1号は考える。00000号の事を。思えば初めて会ったときから、何処か変わった個体だった。

妹達は感情がない。その筈なのに、他の人間と遜色ないイレギュラーな00000号。ネットワークや洗脳装置で知っていなければ、人間だと認識したはずだ。

感情の入力や調整をされたわけでもなく、持って生まれた感情で動く00000号は妹達の間でも興味が尽きない。布束という科学者は特に興味を持ち影響を受けたのではないか。

彼女は00000号と比べると、余り表情を変えないからむしろ妹達に近い印象だ。だが00000号と一時期距離を置いていた時は、やや落ち込んでいるように見えた。

そして自分達も少しずつではあるが00000号に影響を受け始め

ている。

一番は食だろうか。食への興味はあったが、さほど重要なことではなかった。00000号の料理は決して知識にある一流の調理法で作られたものではない。だが美味しい。妹達の間で料理の情報のやり取りが行われるくらいだ。もしかすると他の妹達は羨んでいるのかもしれない。そういった点では自分達は恵まれているだろう。

00000号は自分達を、そして周りの環境を変えようとしている。クローンと人間の違いはないと訴え、感情を芽生えさせて人とは違わないと証明させたがっている。人として生きる為に。

だが自分達はクローンだ。感情があったところでそれは変わるとは思えないし、いつかは処分されるだろう。例え処分されようと代わりのきくものだ。

しかし。

00000号が処分されたら。彼女と同じ個体は生まれるだろうか？

どうして感情を持った妹達ができたのかわからない以上、それは不可能だ。そう考えると理解不能なノイズが走る。それがどうしてもなのかよくわからない。

「……………あのそろそろ勘弁してもらってもいいでしょうか？足が痺れて痛いんですけど」

未だに正座をしている自称姉は若干涙目だ。

「……………出来ない姉を持つと妹は大変です、とミサカは嘆息します」

00000号

本当に不思議な个体だ。

## 第十七話

お姉様と会った事はどうやら黙っていてくれるらしい。聞かれたら答えるが聞かれなかつたら答えないというスタンスだ。まあ口頭で注意された訳でもないしな。怒られ損な気もするが確かに結果オライとは言え注意不足だ。深く反省せねば。

そんなこんなで一ヶ月過ぎた。もうすぐクリスマスと年越しらしい。お姉様には残念ながら会えないでいる。実験のスケジュールが優先だから外出時間がどうしてもバラつくからかもしれない。砥信さんとは会えたんだろうか？

妹達は順調に数を増やしている。この研究所でも既に1000人を越えた。全体でみると月に約2000人くらいのペースだ。人口受精卵から促成したとしても二週間かかるので、妹達の増員にも限界はある。しかしこのペースだと二万人揃えるだけで、十ヶ月はかかるはずだが間に合うのか？実験は一年だったはず。だが天井が言うにはスケジュール通りらしい。

妙な違和感を感じつつも、日々は過ぎていく。そして何の予兆も無く事件が起きた。

サイバーテロによる複数の研究所の破壊工作。それは妹達や実験に関わる研究所のみ起きた。



突然機器が壊れたり、火災が発生し炎上したものの、不幸中の幸いか研究員や妹達に被害は無い。しかし機器やデータは全壊、二十ある施設が十六基も壊れてしまったため、全壊してしまった機器の代わりを揃えること、他の研究所への移送作業で実験が若干遅延するようだ。

関連施設からの襲撃から見て犯人は明らかにこの実験を狙っている。その為残りの研究所は電気的な外部の通信を一切遮断した。

犯人は今のところ捕まるどころかわかってもいない。ただ学園都市には様々な研究グループが存在し、似たような研究を行っているとか妨害工作してくることもあるそうだ。なのでその一部の犯行かもしれない。正々堂々と研究で勝負すればいいのには思うが、限られた予算や期限によっては強行手段を取ってもおかしくはないそうだ。にしてもクローンを使った似たような実験は他にもあるのかと辟易した。

こちらとしてはスケジュールの遅延は内心ありがたい限りではあるが、スケジュールの唐突な変更は研究者達を困らせている。他の研究所では妹達の手も借りてるぐらいだ。

残る研究所は四基。サイバートロは出来ないから、もしかすると直接襲撃されるかもしれない。なんてな。なんだかんだでここはセキュリティが高い。訓練でここのセキュリティのハッキングをやるうとしたけど複雑過ぎて電子ロックの扉を開けるので精一杯だった。レベル4でこれなら、例えば能力者でもそう簡単に内部には侵入されないだろう。それに研究の遅延目的なら充分成功してるしな。襲撃なんて起こらないだろう。

そう思ってた自分が馬鹿でした！この世界が俺に優しくない世界だって、死亡フラグ満載の世界だって忘れてた！

モクモクと充満する煙、時折爆発音が聞こえて来る。どうやら襲撃されたようです、本当にありがとうございます。

サイバーテロではたまたま被害がなかったが、いつこちらに被害が来るかわからない。百人を超える妹達とともに消火作業にあたる。施設自体にも消火装置があるはずなのだが、電子機器が異常を起こして動作してないからだ。

こういう時、ミサカネットワークは便利だ。ネットワークを駆使して研究所内の見取り図を共有、被害が出ている場所に妹達を迅速かつ効率よく割り振る。増員が必要ならばすぐに連絡が来るし、作業が終われば次の仕事の割り振りも即時行われる。レスキューミサカでもやっていけるかもしれないな。

消火作業に当たっていると、もの凄い音が響いてきた。あれは何処かで聞き覚えがある……あれは雷撃の槍の音だ！もしかすると侵入者かもしれない。となると侵入者は発電能力者か！サイバーテロも能力者の犯行が疑われていた。同一犯の可能性が高い。

息を殺して音のするほうを見遣る。一室から出てきた奴は深々と帽子を被っていて誰かはわからないが、体格からして俺達に近いから少女だろう。

俺達のような少女の発電能力者

?まさか、そんな。

不意に以前とある時に感じた違和感が襲った。間違いない。あの人は彼女だ。

少女は事を終えたようで直ぐさまその場を跡にした。しかし俺はその場を動くことは出来なかった。

一体どういってもりなんだ…………お姉様!?

## 第十八話

襲撃を受けたのはここだけでは無かつたらしい。他の施設も同様に襲撃を受けた。残る研究所は二基。

俺といつもの五人を含む二十名の妹達はそのひとつの研究所にいます。襲撃を受ける可能性があり、緊急に移送しなければならなくなつたのでその手伝いのためである。他の妹達も二十名ほど残りの研究所から実験を引き継ぐ新たな外部研究所への移送作業を行っている。

犯行手口はほぼ同じ。施設に直接侵入して機材及びデータの破壊活動を行った。死傷者はなし。セキュリティは悉く反応せず、警備員や研究者は警報を誤作動させて遠ざけていたので目撃者なし、監視カメラも襲撃者を捕らえる事ができなかった。このままでは実験の中止も有り得る状況だ。

唯一の目撃者である俺はその事を黙っている。やはり何故という疑問が尽きないからだ。

あの時お姉様は間違いなく実験は潰さないと約束してくれた。しかし今の状況はどちらかと言えば、実験を潰しにかかっている。これはどうということだ？

あの場では演技だったのだろうか？ いやそれならば妨害自体もっと早く行われてもおかしくはない。一ヶ月も待つ必要性はない筈だ。それ以上に演技のような気がしない。

となると、一ヶ月の間に心変わりするような事があったのか？

お姉様は砥信さんの探索を引き受けてくれた。もしかして砥信さんと会って何かを知ったのか？知ったから実験を妨害しにきた？やや飛躍しているし根拠もないが、それが一番しつくり来る。

だがその場合なにを知ったんだ？実験を潰すとなるとよほどの事だ。だがレベル5に進化させるだけの実験じゃ、潰す程の理由にならない。もしかして俺の知らない何かがあるのか？

くそ、わからん。妹達と相談したいけど、実験を妨害しそうな理由に関しては対立グループが研究の妨害をしているんじゃないかという話でまとまってたし、あまり詳しく話すとお姉様が襲撃犯とバレる可能性が高い。

あの時お姉様に聞ければよかったが、さすがに呼び止められなかったし。ああ、こんな時砥信さんがいればなあ。

研究所は慌ただしい状況だ。一晩で施設内の全研究データの移送をするのだから妹達の手も借りたいというわけだ。にしても膨大な資料の山だな。ジエ　ンニが欲しいね。

妹達を4人のグループに分け、それぞれが研究員の指示を受けながら膨大な研究データを搬送していく。一体何往復するんだらうか、これ？段ボールの箱の山を見ると妹達全員連れて来たくなるわ。

しばらく段ボール達に悪戦苦闘し、一段落した所で新たな指示を貰うため、研究員を捜す。みんな忙しそうで声かけづらいな。

研究室を一望できる階上のガラス張りの所にいる中年の研究員と若い女性が視界に入った。！？あれは砥信さん！？なんでこんな所に？実験には参加していなかったはずだ。もしかして参加することになったんだろうか？

とにかく聞きたいことが沢山ある。会いに行かなきゃ！作業を放置して砥信さんのところへ向かう。

砥信さんはちょうど部屋から出てきた所だった。

「砥信さん！」

誰かに咎められたようにビクリと体を震わせ振り返る彼女  
間違い、砥信さんだ。 間

「あなたは00000号？どうして此処に？」

「移送の手伝いでここに来ただけど、砥信さんを見かけたから、つい作業すっぱかしてきたんだ。久しぶり砥信さん」

「そう……… however、これは好都合かもしれない」  
好都合？どういう事だ。

「いい、ここから逃げ出さない。出来れば妹達を何人が連れて」

「逃げろって……もしかしてお姉様が研究所を襲撃してることと関係があるのか？」

「そう、そこまで知っているのね」

やはりお姉様と砥信さんは会っているようだ。襲撃も知っていると  
なると共犯なのか？一体どうして？

「あなたは何も知らされていないようだけど、あなたが受けている  
実験はとある実験の副産物に過ぎないわ」

レベル5に進化する実験が副産物？どういう事だ？レベル5は能力  
者で最高位のはずだ。それが副産物だなんて。

「その計画は絶対能力進化（レベル6シフト）実験。学園都  
市最強のレベル5である一方通行<sup>アクセラレーター</sup>を絶対能力者（レベル6）に進化  
させる計画よ」

え？最高はレベル5じゃなかったのか？疑問を口にする前に、砥信  
さんは続きを言った。

「その計画は進化させるために 一方通行に20000通りの  
環境で妹達を20000人殺害させるわ」

は、い ？

「あなたが関わっている実験はその計画が前提になっている。 n a

m e l y、20000人の妹達を犠牲にして、レベル6とレベル5の能力者を生み出すつもりよ」

……なんだよ、それ。



## 第十九話（前書き）

一部修正しました。展開に変更はありません。

## 第十九話

世界はいつだって、こんな筈じゃない事ばかりだ　とあるア  
ニメの台詞だ。現実には理不尽だ。誰しもがその現実の中で生きな  
ければならない。思い通りにいくなんて殆どない。なるほど確かにそ  
の通りだ。

軍事利用で生み出されて、失敗したと分かれば欠陥品と蔑まれ、今  
度は実験動物として拾われたら、たった二人のための生け贄だと  
。

ふざけるな！そんなふざけた理由で妹達は二万人も虐殺され  
るのか！計画した奴らは気が狂ってる！

「詳しい説明がしたいけど時間が無いわ。 anyway、妹達と逃  
げなさい。その分計画が遅延するはずよ」

「わかった。砥信さんはどうするんだ？」

砥信さんがこんな狂気の実験をするとは思えない。なんなら一緒に  
逃げるべきだ。

「……………私は残るわ」

「どっしって…？」

「私にはやる事がある。私にしかできない事が。だからあなたはあなたのすべき事をやりなさい」

彼女は覚悟を決めた顔だ。止める術はない。

「……………わかった。砥信さん……………必ずまた会おう！」

「ええ、また必ず」

振り返らずに妹達の元へ急ぐ。なんとか一緒に逃げるように説得しないと……………。

最後に00000号に会えてよかった

布束砥信は思う。

彼女がこの研究所にいるのは、とある研究グループから絶対能力進化実験に参加要請を請けたからだ。

急に呼ばれた理由の予想はつく。先方は妹達の調整実績から大掛かりな移送作業で不備が起きないか確認してほしいということで打診したそうだが、大方研究所を襲撃された時に責任をなすりつける気だろう。

これは御坂美琴と連携して行ったわけではないが、結果的にこの施設に潜り込むための布石となってくれた。しかも移送作業を優先し、外部への警戒が強くなっているため内部のセキュリティが甘くなっ

ている。

計画の内容を知り、計画を内部から妨害する為に準備をしてきた彼女に取っては、絶好の機会である。

御坂美琴は直接施設を襲撃し、計画を頓挫させようと動いている。だがそれでは例え完遂したとしても計画が中止する可能性は低い。

それだけ絶対能力者という存在は大きいのだ。誰もが到達したことがないレベル6は。

過去に幾人の研究者がレベル6への到達を目指したが、悉く失敗に終わった。なかには実験するまでもなく樹形図の設計者の予測演算によって絶望的だと導き出されたものもある。

だが今回は樹形図の設計者の予測演算が成功をはじきだしたのだ。今まで誰もなし得なかった栄光。研究者ならば誰もが夢見るだろう。そのため何としても計画を存続させようとするはずだ。利権さえ考えなければ外部の研究機関に研究の引き継ぎを行うだけだ。事実、彼女の予想通りに研究の移送を今行っている。

となるとそれ以外の方法で計画を妨害するしかない。利で計画を覆す事はできないのだから。調整中の妹達がいる部屋へ向かう。妹達の移送は最後のはずだ。洗脳装置に妹達がいる。まだ調整中の状態だ。慣れた手つきでコンソールを操作する。そして白衣のポケットから取り出した記憶媒体を端末に差し込んだ。

これは量産型能力者計画の頃から妹達の為に集めていた感情データを改修したものだ。本来これを使うつもりはなかった。これはあくまでプログラムに過ぎないし、いつか自然な形で妹達の真の感情が芽生えて欲しいと考えていたからである。それでも集めていたのは最後の手段として、妹達の感情の発露に役立つのではと考えたからだ。

しかし今はそうもいつてられない。とある感情に特化したデータを調整中の妹達に強制入力する。その感情とは『恐怖』。

研究者達は妹達を実験動物としてしか見ていない。だからこそ二人殺すことになっても、何の感慨もないのだ。

だが、もし妹達に恐怖のプログラムを入力したら。

死を当然のこととして受容する妹達の中からその運命を嘆く者が現れるかもしれない。その姿に実験動物以上のものを感じ取る研究者が現れるかもしれない。そんな彼女達の声が誰かの心を動かし、計画を中止させるかもしれない。

利ではなく情。研究の関係者の良心に訴え計画を中止させるのが彼女の妨害方法。

もちろんすぐに効果があるかと言われればNOだ。可能性も高くはない。妹達も何人か犠牲になるかもしれない。だがその可能性に賭けた。自分と00000号のような関係が誰かしら築けると信じて。

ガンッ  
！

いきなり後頭部を押さえ付けられ、コンソールに叩きつけられる。

「関係者である可能性を考慮して上に確認をとりましたが」

顔はコンソールに押さえ付けられたまま、腕をねじられ即座に拘束された。

「データ類の移送が完了するまではここへの立ち入りは超禁止のことでした」

「ぐ……………あ……………」

拘束した少女はねじる力が増した。布束砥信は思わず声を上げる。

「襲撃者は単独犯であると推測されているが一方の襲撃が超陽動である可能性を捨てるべきではない　　どうやら麦野の読みは超当たっていたようですね」

布束を拘束する少女の名は絹旗最愛。今回の襲撃事件で施設防衛の依頼を請けた学園都市の暗部「アイテム」の構成員である。

「このまま依頼人に引き渡します。抵抗しても超無駄です」

背後にいる柄の悪い二人の男が近づく。

（無駄な抵抗？確かにそうかもしれない　　）

布束は思う。問題は計画だけではない。仮に計画が頓挫しても、クローンが普通に生活できるだろうか？さらに過酷な運命になるだけではないか？迷いが無いわけではない。

だがしかし、計画の全貌を知り一人で立ち向かうと覚悟し、全てを背負い込んだ少女がいた。こんな自分を信じて動いた少女がいた。

だから止まるつもりはない　　！あの子達に運命を切り拓くチャンスを！

「……………！」

絹旗は異変に気付き布束を投げ飛ばして、コンソールを叩き壊す。だが一足遅かった。

端末の画面には、「インストールが完了しました。ミサカネットワークに接続しています」と表示されていた。布束は絹旗に見えないように片手でコンソールを操作し、入力を完了していたのである。

ニヤリと笑う布束。これで入力した感情プログラムは全ての妹達に共有される。誰にも止められない！

はずだった。

端末から警告音が流れ、接続がネットワーク側から中止された旨のメッセージと「上位個体20001号のものでないコード」という

警告メッセージが表示されたのである。どうやら上位個体を介さないでネットワークを使うことができないらしい。だがしかし、上位個体など存在しなかったはずだ。

（何だこれは！？いつの間にこんなセキュリティが………！！）

「よく分かりませんが、あなたの目論見は超失敗したようですね」

絹旗の言葉に布束の顔は絶望に染まった。



## 第十九話（後書き）

この時点でアイテムいたの？といわれると疑問ですが参戦させました。

上位個体に関しても悩みましたが、個体が存在しなくてもセキユリティ自体は設定できると思ったので、そのままです。

## 第二十話

急いで妹達のいる場所に戻ってきた。まだみんな慌ただしく作業している。幸い研究者達は気付いていないようだ。

「どこに行っていたのですか00000号、とミサカは問い質します」

「いなくなっていた間のフォローは大変でした、とミサカは愚痴ります」

と一緒に作業してた妹達。それはどうもごめんなさい　　じゃなくで。

騒ぎを聞き付けられると困るから、ミサカネットワーク越しに話しかける。

（大変なんだよ、このままここにいるとお前達が死んじゃうんだ！絶対能力者進化実験とかいうやつで）

殺されてしまうんだ。だから早く逃げないと　　と続ける前に妹達の一人が答えた。

（どこでそれを知ったのですか？00000号は関係者ではないから通達されていなかったはずです、とミサカは問います）

それはつまり。

（お前達知っていたのか?!）

なんで黙っていたんだ、このままだと間違いなく死ぬんだぞ!?

(関係者以外には機密事項だったからです。00000号はこの計画の関係者ではありません、とミサカは答えます)

そういうことか。俺はあくまで超能力者進化の関係者ではあるが、絶対能力者進化実験に関わっているわけじゃない。例え後者の実験を行わないと成功しない密接な関係を持つ実験だとしても、あくまで別の実験という認識なのか。

(でもお前達を犠牲にしないとレベル5になれない計画なんだろう? だったら関係あるじゃないか! 俺は妹を犠牲にしてまで進化なんかしたくない!)

能力を使うことは楽しいから、カリキュラムを受ける分は構わない。能力が進化するのも人並みに欲してるかもしれない。けど、二万人を犠牲にした進化なんて絶対に耐えられない!

(ミサカは計画の為に造られた模造品です。実験動物に過ぎません。実験が無くなれば、ミサカは存在理由がありません、とミサカは答えます)

だから死を受け入れるのか? 前から思っていたが、自身の命を粗末にしすぎだろう。こんな命を弄ぶような運命なんて受け入れちゃダメだ!

存在理由がそんな下らないことしかないなら、それだけじゃないってことにしてやる!

(だったら俺の為に生きてくれ！)

ありったけの気持ちを込めていった。

(…………それはどういふ事でしょうか、とミサカは問い掛けます)

(前にも言ったが、お前達がいなくなるのは辛い。この計画でお前達の命が奪われるって考えたら胸が張り裂けそうだ。そんな気持ちになんてなりたくないんだよ！)

眼が潤む。耐え切れそうにない。

(だからずっと傍にいてくれよ！頼むから！)

眼から涙が零れた。

なんて我が儘な言葉だろう。これはまるで駄々をこねる子供だ。と妹達は思った。

自分達は代わりがきく、命の価値は無いものだ。そう信じている。今まで00000号は自分が処分されることを怖がり、自分達が処分されたら悲しいと言った。事実今彼女は泣いている。疑ったわけではないが、泣くという行為を初めて目の当たりにしたため衝撃が走った。

彼女は何故泣いているのか。自分達が殺されることを知ったからだ。

何の価値も無い自分達を失ってしまう　　それだけで哀しむ人がいるのだ。

そう考えると、死ぬことができなくなった。こんな自分達を失って哀しむ人を助けることができる。それはとても素晴らしい事ではないかと思えた。

それにこのシチュエーションに該当する状況は、洗脳装置の情報によればまるで　　愛の告白ではないか？ずっと自分の傍にいてほしいなんて、告白の常套句である。

そう思うと不思議と胸が暖かくなる。初めての感覚に少し戸惑いを覚えたが、身体に不具合はない。

（これがなんなのかわかりかねますが　　、何故だが、その言葉はとても響きました、とミサカは率直な感想を述べます）

シリアスな状況なのに何故だか大きな誤解が生まれた。

「分かりました。どうすればいいですか、とミサカはお姉様に問います」

お姉様　　？まあ姉と自称しているからそうだけど。まあいい。それよりも理解してくれたようだ！

「ともかくみんなで逃げようー！」

一斉にいなくなるとバレるかもしれない。さっきの作業グループごととに段ボールを運ぶ振りをして脱出するようにした。

総勢二十名の大脱走だ。どうしても時間がかかる。殿は俺のグループだ。他の妹達より能力の高い俺ならば、なにかあった時、多少強引気味にでも切り抜けられやすい。

幸いなことに先行している妹達の情報によると、外への通路までは誰も気づかなかったようだ。手際が恐ろしい程いい。よく考えると自分達は軍事利用されようとしていたから、潜入工作なんてのも洗脳装置で知識を得ているんだ。脱出時の隠密行動も一般人のそれより能力が高い。

電子ロックは能力で解除していく。他の高度なセキュリティはお手上げだが（警備ロボットなど。操ることは難しいので壊すぐらいしかできない。その時点でバレる）移送で内部のセキュリティが甘くなっている。ならばこの程度ならなんとかなる。よしこのまま脱出できる！

そう気が抜けた瞬間だった。

「おい、そこでなにをしている！」

しまった、見つかったか！即座に雷撃の槍で迎撃しようとする。ここまできたら強引に行くしかない！

振り返りつつ、声をかけた若いチンピラみたいな男（何故研究所にいるんだ？と思った）に向けて雷撃の槍を放つ。幸い一人だ。男の手には拳銃？！

一発の銃声が研究所内に響いた。

## 第二十一話

絶対能力者進化実験。

量産異能者<sup>レイオノイズ</sup>「妹達」の運用における超能力者「一方通行」の絶対能力への進化法。

樹形図の設計者によると、学園都市最強の超能力者である一方通行のみが絶対能力という深淵に到達できる。ただし通常のカリキュラムを250年組み込む事だけが。

250年人体を活動させる「二五 年法」も検討されたが保留とし、他の方法がないか検討された。その結果、樹形図の設計者が実戦における能力の使用が成長を促す事を導き出したのだ。であるならば、特定の戦場を用意し、シナリオ通りに戦闘を進める事で「実戦における成長」の方向性をこちらで操ることはできないだろうかと考えた。

樹形図の設計者の演算の結果、一二八種類の戦場を用意し、超電磁砲を一二八回殺害することで絶対能力者に進化できることが判明する。

しかし当然超電磁砲を一二八人も用意できない。そこで妹達に着目した。妹達を超電磁砲の代わりに使い同様の結果が得られないかと。

妹達は超電磁砲より性能が劣る。二万通りの戦場を用意し、二万人の妹達を用意する。圧倒的な数で同等の結果を得ることができた。



二万種の戦闘と戦闘シナリオも演算された。時間、使用される武装にいたるまで全て。

九八 二通りの屋内実験、一 一九八通りの屋外実験は全て演算により算出された緻密な実験なのである。

だからこそ想定外の事象が発生してしまった場合は脆い。

妹達脱走　。

それはその想定外の事象に十分該当した。

本来は絶対有り得ない状況に研究所は騒然となった。基本的に妹達は従順で計画から逃げ出すとは考えられなかったからである。しかも二十人も。

最後に妹達を見かけたであろう男　アイテムの下部組織の男は妹達に発砲したあと、彼女が発した電撃で気を失ったらしい。馬鹿が　殺してしまったらまた造り直さねばならなくなるじゃないか！研究者たちは暗部はやはり暗部でしかないと溜息をついた。

しかし研究所に残った妹達のミサカネットワークから脱走した者の居場所は特定できる。

ならば早急に居場所を特定し探索部隊で取り押さえなくてはならな

い。実験の開始日が差し迫っているのだから。

だがしかし。逃げ出した妹達は足跡を追うことはできなかった。

ミサカネットワークから彼女の存在が確認できなくなったからである。

では彼女達はどうなったのか。研究所からの逃走時に話は遡る。

男の拳銃に気がつくのが遅かった！銃口は明らかに俺に向いている。間に合わない！

銃声が鳴り響く。

「……………っ！」

思わず目をつむる。

痛みがこない。まさか外したのか？

そうではなかった。目を開けば原因は歴然だった。男と俺の間の空間は遮られた。傍にいた3号が身を呈して。俺を護ってくれたのだ。

「3号！」

「だ、大丈夫です、とミサカは答えます」

意識は大丈夫のようだ。どうやら腕をやられたらしい。腕から血が

溢れている。男は電撃を食らい気絶したようだ。

ブレザーを脱ぎ、シャツの袖を破いて腕を縛る。今はこの程度の応急処置しかできない。とにかく安全な場所まで逃げないと！

研究所を抜け出して一時間半。今は地下の下水道を歩いている。逃走時追っ手が懸念された。居場所がバレればすぐに捕まるだろう。妹達の居場所がわかるミサカネットワークと人工衛星による監視、これらの追跡をかわさなくてはならない。

ミサカネットワークは電波だ。だから電波の脆弱性も当然引き継いでいる。妹達の中継があったり、比較的浅い階層の地下なら問題ないが、入り組んだ深い階層の地下であれば電波が届かない。

当然人工衛星も地下深くまでは監視できないだろう。

以前お姉様との会話をネットワーク越しに盗聴された時に、盗聴されないようにするにはどうしたらいいかなんて考えてた事がこんな所で役に立つなんて不思議なものだ。

けれど、3号の体調がまずい。こんな不衛生なところにいたら怪我が悪化してしまう。出血が多いのだろう、顔色が悪い。

限界だな。

これ以上ここにいるのは得策ではない。とにかく治療を優先すべき

だ。となると、ドラッグストアか病院あたりに忍び込むか。

「3号、大丈夫か？今から治療しに外に行くからな」

こくりと3号が頷き、意識を失って倒れた。やはりかなり我慢していたらしい。少し頭を撫でた後、彼女を背負い、他の妹達と共に地上に出た。

近場にあったかなり広い病院に忍び込む。できればドラッグストアのほうがよかったが、周辺にはなさそうだ。セキュリティは研究所ほど厳しくない。

侵入するのに抵抗がないわけではない。申し訳ない気持ちになりながらも一室のベッドの上に3号を寝かせ、包帯や薬を探しに行こうとしたけど、他の妹達が代わりに探しに行ってくれた。

二人きりになって少し落ち着くと、色々考えてしまう。これからどうすればいいのか。

このまま逃げ続けるにしても、二十人も隠れる場所はそうそう見つからないだろう。しかも現金も身分証もないので、日々の生活もままならない。なんとかしないといけないが方法が思い付かない。妹達とも相談するべきか。

それに砥信さんやお姉様、他の妹達も気になる。特に研究所を襲撃しているお姉様や残った砥信さんはどうしているのだろう。無事な

らばよいが。

計画を頓挫させるとなると二人の協力してもらったほうがいいかもしれない。俺が知らない計画の詳細も知っているだろうし。砥信さんの住所はわからないが、お姉様なら学校経由でわかるかもしれない。まずはお姉様を探そう。

考えがまとまった時に、人の気配がした。妹達か？

「おや、泥棒かと思つたが怪我人かい？」

白衣の男！？見回りか！

「近づくな！」

「でもね、僕は医者だから。彼女を診ないとね？かなり傷が深そうだしね」

どうする？しばし睨みつける。応急処置しかできないから、診てもらえるなら助かる。3号に無理はさせられない。何か事が起これば、最悪他の妹達は逃がそうか。

「……………わかった。……………妹を助けてくれ、頼む」

頭を下げる。

「患者の命を救うのが僕の仕事だからね。なんとかしてみるさ」

それがカエル顔の白衣の男  
冥土帰し（ヘブンキャンセラー）  
との出会いだった。

## 第二十一話（後書き）

携帯でゼロがうまく変換できず図形の丸で代用しています。

## 第二十二話

Q、銃弾を受けた腕の怪我及び多量の出血を伴った体の治療にどの位の期限を要しますか？

A、全治二日です。

はい？

いやいやいや。冗談はいいから！憑依前でもそんな大怪我したことないけど、流石にそんな短期間に無理だって！！てめえ、俺の妹を冥土に送り帰す気ですか！？

そう思っていた時期がありました。学園都市の医療技術をナメていた。冥土帰しは、正しくヘブンキャンセラーだったのだと知ったのは、30分ほどで処置を終え3号の顔に血の気が戻っていく様を間近で見てたからである。

あとで聞いたが冥土帰しは学園都市でも有数の技術を持つ医者であり、どんな病気や怪我でも治すと呼ばれる名医なのである。

3号に施された治療は、オートリパース肉体再生という能力 自身の肉体の損傷を回復する能力の原理を医術に組み込んだ治療法なんだそうだ。

学園都市ではこのように能力のメカニズムを解明し、様々な分野に



応用している。…………俺達もこういう利用のされ方なら納得できた  
んだろうが。

「さて、君達が何者なのか教えてくれるかい？流石に二十つ子って  
話ではないと思うんだがね？」

治療を終えた冥土帰しが問う。3号が無事治療されたので他の妹達  
も傍にいる。そりゃ同じ顔が二十人もいればおかしいか。

だがどうしたものか。全部話してもいいか悩む。内容は問題ありま  
くりの超秘密事項だ。いい人そうだけに関わらせるべきかどうか。

「だいたいの事は予想はつくけどね。君達が困っているなら力にな  
りたいんだ」

…………仕方ない。俺は知っていることを全て話した。

事情を話すと冥土帰しは眉をひそめた。そして俺達を匿うと提案ま  
でしてくれたのだ。自分達は発信機のようなものがあるので難しい  
のではと問うと、電波を防ぐような部屋があるらしい。

あまりの都合の良さに多少疑問が残るが、といって他にあてもない。  
素直に甘えることにした。

御坂美琴は双眼鏡を手に、とある研究所を覗いていた。研究所はSプロセッサ社脳神経応用分析所という場所であり、表向きでは筋ジストロフィーの病理研究を行っていることになっているが、実態は絶対能力者進化という悍ましい計画を行っている。

その計画を知った彼女は計画を破綻させようと関連施設の襲撃を行ってきた。手始めにネットワークを介したサイバーテロから始まり、直接襲撃まで及んだ。

この研究所は関連施設の最後の一基で昨晚襲撃しそこねた施設である。昨日は残る関連施設を二基まで追い詰めたものの、襲撃した施設で警備していた暗部との交戦で消耗が激しかったため、昨日うちにまとめて襲撃できなかつたからである。

昨晚の襲撃を考えると能力は完全に知られていると考えていい。そのためより強固な警備を行っているはずだ。だがそれでも止まるわけにはいかない。確実に潰すために偵察を行っているのだが……。

おかしい。人の出入りが無い。さらに電気機器すら稼動していない。畏か？しかし、畏だとしても侵入して確認せざるを得ない。

意を決して施設に侵入してみる。しかし予想に反して全く抵抗はなかった。というより人が全くいない。機材も全てのデータが消去されていた。

もしかしてこれは撤退したのか？慌てて携帯端末で確認してみる。第七学区に本社を構えるSプロセッサ社が経営破綻し、筋ジストロフィーの病理研究をしていた施設が撤退したというニュースが流れ

ていた。

(やった……………？やった?!)

昨日の攻防戦で継続を諦めたのか、一基だけでは計画を維持できないのかは分からない。分からないけど撤退まで追い込んだんだ。

ここまで来るのに彼女はかなり無理をしてきた。通常の授業に加え、夜は寮の管理人に見つからずに抜け出し、施設の襲撃を行ってきたのだ。妹達が殺される夢を見てうなされては、睡眠もロクに取れていない。そして昨日の攻防戦。肉体の消耗は激しかった。それがやっと報われたのだ。

やらなければならぬことはまだ沢山ある。計画が終わったあとの妹達の身柄をどうにかしなければいけない。けれど。

(妹達はもう……………死ななくても……………これで)

確定していた死は遠退いたはずだ。ようやく訪れた平穩。

安堵して寮に戻る。足取りは軽い。

「お姉様」

唐突の声。まさか            そんな            どうして            。            どうして妹  
達がここにいる!?

混乱する美琴を前に声の主である00000号はこう言った。

「計画はまだ終わっていないんだ。だから力を貸してほしい」

## 第二十二話（後書き）

感想を見てカエル医者の人気に驚きました。

今回は計画破綻作戦会議です。破綻させるにはどうすればいいでしょうか。

あとPV25万、お気に入り1000件越えたようです。この場を借りてあつく御礼申し上げます。

物語は佳境です。今しばらくのお付き合いをお願いします。

## 第二十三話

「第一回！。妹達を助けるためにはどうすればいいの？会議を始めますー」

「わーぱちぱち、とミサカは義理で拍手します」

義理言っな、義理とか。

「あんた達、こんな状況なのになんか脳天気ね」

はいそこ脱力しない、姉よ。

「僕も参加するのかい？」

今は一人でも力が必要なんです、先生 冥土帰しのことだ。

先生が用意してくれた部屋に俺、妹達19人、お姉様、先生がいる。妹達をどうやったら救出できるのか、今後の行動方針を決めなければならぬ。まずは現状の認識からだ。

絶対能力者進化。最強の超能力者「一方通行」をまだ見ぬレベル6に進化させる計画。一方通行に経験を積ませることで進化する計画で、百二十八回もお姉様を戦闘及び殺害することで進化できるらしい。当然一人しかいないお姉様を殺害することは無理だ。その代用品として用意されたのが妹達である。二万人殺害すれば同様の結果を得られるそうだ。

経験による成長を調整するために戦闘はシナリオそって行われる。

そのシナリオは時間、対象、場所、そして殺され方まで決められている。もつとも時間は多少ずれても影響はない。実際、昨日が開始日だったそうだ。その上実験は検体番号順に行われるため、1号から始まる予定だったらしい。襲撃によって延期されたのだから、まさに間一髪だ。

「今後も施設襲撃は行ったほうがいいのかな？」

「施設を襲撃しても引き継ぎが行われるだけでしょう、たしか今度引き継いだ研究所は183施設に及ぶはずです。オリジナルのお姉様なら襲撃は可能ですが、根本的な解決にはなりません、とミサカは推測します」

たしかに襲撃している間に他の研究所で行われたら、どうしようもないか。183も同時に襲う戦力はない。ネットワークテロも対策を取られているだろう。

となると計画自体できなくする方法をとらざるを得ない。例えば一方通行の殺害。まあ殺害は行き過ぎかもしれないが、実験に協力しないように説得できないだろうか。しかし、一方通行のことはなにも知らない。

「誰か一方通行のことについて何か知ってるか？」

「一方通行に関しては能力すら不明です、とミサカは申し訳なさそうに答えます。実験は情報が制限されており、実験のスケジュールと自身の実験内容、過去の実験結果しか知る権利がありません、とミサカは報告します」

「これは一方通行の能力の正体を思考し様々なアプローチを行うことで、一方通行が得る経験を増大させる目的があります、とミサカは補足説明します」

「そのため、1号の代わりに他の妹達がすぐさま代わって実験を行うことはないでしょう、とミサカは断言します。例えばアサルトライフルで攻撃する実験を行う個体とアサルトライフルで牽制しつつ地雷へ誘導する実験を行う個体を交代させた場合、後者は事前にアサルトライフルが効かない可能性を知っているため、別の攻撃方法を模索します。そうなるとこの実験はアサルトライフルで牽制しつつ別アプローチを行う実験に変異します。これは演算した実験内容と異なる上、この経験が蓄積されるため、進化にどのような影響を及ぼすのか不明になるからです、とミサカは長々しい説明を行います」

「そのためしばらくはこちらの搜索を優先するでしょう、とミサカは考察します。ただ樹形図の設計者でスケジュールを再演算したり、新たに妹達を作られる可能性もありますが、使用申請や製造には時間がかかるため数日の余裕はありません、とミサカは推測します」

「うーむ話しがそれだが、すぐに実験が開始されないのがわかったのはいいことだ。それにしても、全て樹形図の設計者によって予測演算された計画だからか、イレギュラーに弱いんだな。話を戻そう。」

「お姉様や先生はなにか知ってないかな」

「僕は知らないなあ」

「<sup>バンク</sup>書庫で調べて能力はわかるけど聞いて呆れるわよ」



書庫はいわば能力者の情報などが載った総合データベースである。とはいえ、セキュリティがあつて一般人は閲覧できず最低でも教師か風紀委員の権限が必要だ。つまりハッキングしたんですね、お姉様。しかし、能力がわかるなら弱点とか攻めて勝てないだろうか。妹達が負ける前提が崩れるし、頓挫するんじゃないか。

「一方通行の能力はベクトルの操作よ。運動量、熱量、電気量のあらゆる力の向きを触れた瞬間、任意に操作する能力なの。普段は重力や酸素とか必要最低限なものを除く全てのベクトルを反射するようになってるらしいわ」

ベクトル操作　　反射となると、一方通行に向かって石を投げるとそのまま投げた力で返ってくるのか？！

「ということば」

「電気量や磁力を使う私達的能力では確実にやられるわ。樹形図の設計者も私と一方通行が戦闘した場合、185手で私が負ける結果を弾き出してらわ」

勝って研究を頓挫させるのは無理そうだな。というかなんてチートだろうか。能力発動は基本意識的に使われるか、身の危険を感じた時だ。意識せずに使えるとなると不意な奇襲や狙撃も使えないというわけか。攻撃しても反射されて無傷。なるほど最強だわ。

「仮に勝てたとしても樹形図の設計者で再演算し、計画は修正され継続されるでしょう、とミサカは予測します」

樹形図の設計者を利用して分、計画に不具合が起これば再演算するため遅延はするが、継続してしまう問題もあるのか。

一方通行をなんとかするのは保留。ただ戦闘は無理ゲー。

別アプローチをしてみよう。妹達側はどうだろう。憑依前の世界はクローン製造は違法だったはずだ。クローン技術規制法だったか法律でも製造は禁止していたような。この世界ではどうだろうか。筋ジストロフィーの研究でクローン製造をごまかしてたんだそうだから、後ろめたいのは確実だろう。

「クローン製造の違法性について計画を頓挫できないかな？」

「たしかに違法だね」

「クローン製造は国際法に抵触するわ。けれど、実験は人間としては間違ってるけど、学者としては正しいのよ。例えば法を破り重いリスクを背負って人の道から外れてでも、成し遂げるべき学术だってね。それに学園都市の法は統括理事会が握っている。そこが黙認しているんだもの。揉み消されて、捕まるわ」

ああそうだった。量産型能力者計画のときも統括理事会が凍結したりしてたな。そもそも樹形図の設計者の使用は理事会の承認が必要なわけだから使用する理由も知ってるわな。

「じゃあ学園都市外に逃げて真相をばらすのはどうかな？外から圧力をかけて計画を中止できないかな」

幸いこちらにはお姉様が見つけた研究のレポートとクローンの実物がある。これらがあれば、学園都市自体に圧力をかけてもらい、計画を中止させられないだろうか。

「無理ではないだろうね。学園都市を疎ましく思う者も少なくはない」

「ただ時間がかかるわね。それに学園都市は軍事的にも経済的にも他国を圧倒しているから、政治的な介入は難しいの。世論を動かすにも時間がかかるし、時間をかけすぎると証拠隠滅で妹達が犠牲になる可能性もあるわ」

案としては悪くはないが、時間がかかるのは厳しいな。

ならば統括理事会をなんとかできないだろうか。研究の予算を握ってるもの統括理事会だし、樹形図の設計者も統括理事会が関わっている。

「統括理事会をどうにかできないかな？例えば、計画の反対派を煽ってみたり」

「僕は仕事柄理事会の人間は知っているけどね。確かに反対しそうな人はいるよ。理事会の中では少数派だね。だからできることにも限界があるよ」

そっちなも無理かあ。

あれ、軽く詰んでね？

## 第二十三話（後書き）

多分批判が多いと思いますが、アサルトライフルのくだりは強引な説明です。

## 第二十四話

「ん？でも待てよ。さつき実験内容を知ったら再演算するって言ったよな。ということは樹形図の設計者を破壊した後、ネットワークで他の妹達に実験内容を知らせたら、再演算できなくなって、計画は中止にできるんじゃないか？」

樹形図の設計者はたしか安全のため人工衛星に載せられ、今は宇宙にある。だから衛星を操作し衛星を落としたりして壊せないか。

「確かに演算し直せなくなれば、できるかもしれないわね」

お、これはいけそうか。

「計画はまだ始まってないんだよね？もしそうだったら一度新しく妹達を造り出して、計画をやり直すんじゃないのかい？」

……もし造り直すとしたら、今までの妹達は処分するだろう。まだ全体の1割ほどしかない妹達だから、十分に有り得る。この作戦も却下。

「計画がなくなったら、僕の介入の余地もあるんだけどね。計画を潰す方法は他にはないかい？」

先生がいうには、計画さえなければ妹達の利用価値がなくなり身柄の確保がしやすい。ようは先生の研究に妹達を加えるということだ。だがしかし計画を潰すと言ってもなあ。

直接の襲撃はダメ　　一基襲うのは簡単だが、研究は他の研究所

に引き継がれる。また二百近い研究所を襲うだけの戦力がない。

一方通行との戦闘はダメ チートスキルで勝てない。説得は居場所不明。

学園都市の外に出て圧力をかけるのは不可能ではないが時間がかかるため保留。証拠はあるので一番可能性があるし、お姉様の襲撃を揉み消したことから見ても公表は憚れるらしい。逆にいえば少なくとも学園都市内の報道統制は完璧だったことだけだ。

統括理事会の反対派はいるみたいだが、協力は得られなさそう。なにか今までで見落としがないか？

会議では結局決まらず、各自で案を考えてまた会議する予定だ。今は別室で一人考えている。しかしここまで状況が悪いとは。それに比べてこちらの手持ちのカードが少ない。

手持ちのカードは20人の妹達、計画のレポート、レベル5のお姉様、先生の存在だけだ。なにか他にカードがあれば状況は変わってくると思うんだけど。

「あんだ、こんなところにいたの」

ぼんやり考えているとお姉様が話しかけてきた。気付かない間入室したようだ。

「ああ、うん。なかなか考えがまとまらなくてね、お姉様はなにかに思い付いた？」

「残念ながらね」

学園都市屈指の頭脳を持つお姉様でもダメか。

「ねえ」

「うん？どうしたの？」

「あんたは私の事を恨んでないの？」

「ん？どうして？」

「だって私がDNAマップを安易に渡さなければ、こんなことにはならなかったはずよ。こんな命を弄ぶような実験……ッ！」

「元々お姉様は騙されただけなんだから。筋ジストロフィーとかいう病気を治すために提供したんだよな。だったら騙した研究者が悪いんじゃないね」

「でも……」

「まあなんつーか理不尽な現実には愚痴は言いたくなるけど、お姉様をどうこう思う気はないかな。どっちかってーと、クローンだから気味悪がられるんじゃないかって思ってた」

本来この件はお姉様は介入しなくてもおかしくない。自分のクローンが殺されるのは気味悪いかもしれないが、お姉様自身に影響は全

くないはずだ。

それでも彼女は介入し、妹達を助けようとした。若さによる青臭い正義感なのかもしれない、罪悪感や責任感なのかもしれない。しかし彼女の行動はほんの少しでも確実に妹達の命を守ったのである。

「だから、助けようとしてくれて嬉しかった。力を貸してくれてありがとう」

「ッ！」

………ちよつと臭かったかね。なんだか陳腐なドラマみたいだな。恥ずかしくて顔が熱くなる。

「………姉を泣かせるんじゃないわよ、バカ」

………俯きながらお姉様がデレた。もしかすると所謂ツンデレ系な姉なのかもしれない。

覚悟を決めた。

少し目元が赤くなりつつ美琴は思う。

00000号と出会い、まだ計画が終わってないことを知って、心は折れかけた。しかし、まだ懸命に生きようと足掻く彼女を見て、そして頼られてその責の重さを感じはしたが、その分救われた気が



した。

妹達は自分を責めようとはしない。生み出してしまった責任は間違いない。自分にある。その罪悪感から、むしろ責められたかった。だから頼られたときはその罪を少しでも購えらると思っただ。

しかしそう簡単に解決できる問題ではない。結局会議は中断し、各自考え直すことになった。頼られた結果がこれでは会わず顔がない。しかしなにも思い付かない。少しいたたまれない気持ちになりながら一人になろうとして入った部屋に彼女はいた。

妹達の中でも感情を持つ例外な彼女。彼女自身は自分のことをどう思っているのだろうか？こんな時になにを考えているのか。と冷静な部分では自分を叱責したくなるが気になって考えがまとまらない。結局意を決して聞いてみることにした。

結果は想定外だった。恨まれるどころかありがとうとまで言われたのだ。計画を知ったあとは何度も悪夢を見てその度に妹達に責められた。だが現実とは全く違う。自分は赦されたのか。心が軽くなる。思わず涙が頬を伝う。だが彼女には見せたくない。何故なら彼女は

彼女たちは自分の妹なのだから。俯いて意地でも涙を見せないように平静を装った……つもりだ。

彼女達をなんとかしてでも助ける。でもどうすればいいのか。計画の首謀者を見つけ出して締め上げる？いや学園都市の上層部が支持している以上、計画は継続するだろう。誰だ？こんなイカれた計画を考えたのは？

樹形図の設計者か！学園都市が誇る世界一の演算能力を持つ超高度並列演算処理器。あれを破壊すれば学園都市もあとには退け

なくなる。しかしただ破壊するだけではダメだ。どうすればいい？ さつき実験に調整された妹達が実験内容を知ることによって再演算されると聞いた。しかし妹達がそれをしたところで、代わりがいるため、計画は続行するだろう。        ならば代わりのきかないものだとしたら？

一方通行。こいつしかレベル6になれないのだからこいつをどうにかすればいい。例えば交戦。計画はあくまで妹達と現状の一方通行だけで想定されたものだ。だからレベル5である自分が一方通行と戦えば？コントローラされた戦闘とは違い、大幅な歪みが発生するのではないか。

一方通行と超電磁砲が交戦し致命的なエラーが発生したため、計画の修復は不可能であり一方通行のレベル6への進化は不可能である        という内容の予言を吐かせればいい。勿論こんな都合のいい予言は普通でない。ハッキングして嘘の予言を吐かせ、破壊する。そうすれば分析を樹形図の設計者に頼っている研究者は、計画を継続できなくなる。

勿論自分もただでは済まないだろう。樹形図の設計者を破壊すれば間違いなく捕まるはずだ。だが覚悟は決まった。

まずは一方通行と交戦した事実をつくらなくてはならない。もしかすると説得で済むかもしれないが。となると居場所を知らなくてはならない。書庫に再アクセスするか、研究所を襲撃すればわかるはずだ。

再び考え始めた00000号を残し、美琴は部屋をあとにした。

## 第二十四話（後書き）

私事で恐縮ですが

医者「僕の研究の為に、採血して魔法し……………遺伝子提供してよ！」  
そういう話があった時、なんかタイムリーなネタだなと思いました。

## 第二十五話

とある研究所の一室。一人の外国人の男が椅子に座り、爪を切っていた。足音が聞こえ扉に視線が動く。荒々しくドアが開けられる。

「ハロー。どうしました？そんなに血相を変えて、ドクター天井」  
入ってきた男は天井亜雄。片言の男の指摘通り血相を変えて、急いできたのか肩で息をしていた。

「ハローじゃない！何だこの引き継ぎ施設の数は！？」

正体不明の襲撃者によって研究所が閉鎖に陥り、絶対能力者進化実験が一時中断した。そのため、研究を他の研究所に引き継がせざるを得ない。天井は研究で発生する利権が分散するデメリットに目をつむり、研究の引き継ぎに渋々同意した。

その際、外部との折衝を行ったのは、この研究の責任者であるこの片言の男だ。天井自身あまり交渉事に向いていないことを自覚していた。そのため彼に引き継ぎに関する折衝を一任したのである。

引き継ぎ施設その数一八三基。いくら何でも有り得ない。これでは利権の全てを外部の連中に貪り食われるだけではないか！

「確かに引き継ぎ自体は承認したがな！こんなに利権を分散したら利権が殆ど得られないではないか！という前に片言の男が言葉を遮る。

「まアまア落ち着いて。これくらい分散したところで利益は十分出

ます三」

む………と言葉を飲み込み考える。確かにレベル6を生み出すことができれば莫大な利権が生まれるだろう。多少分散しても十分な利益は得られるがやはり二百近い分散は多過ぎる。

「今一番重要なのは樹形図の設計者が保証した実験を完遂する事です」

まだ襲撃犯は捕まっていない。だから実験がまた妨害される可能性がある。しかしこれだけの数に研究を引き継がせれば、妨害されても実験を進行することができるはずだ。

「それに彼等と交わした契約書には裏がありませんね。利権を得られるの八、計画終了時点で実験を行えるだけの機能を維持している研究所だけです」

契約書には様々な取り決めがされていた。研究の機材の準備、費用は引き継ぎ先で持つこと。また、研究所を襲撃されようところからは一切責任を持たないということなどだ。つまりは研究所が襲われれば襲われるだけ、利権の分散を防ぐことができる。

「これで謎の襲撃者の心が折れるならそれでよし。足掻けば足掻くだけ我々の懐が潤う計算です」

成る程、一理ある………のか？天井は首を捻りながら考える。最も片言の男が言外に込めた意味には気付いていない。

この契約は計画終了時点で実験を行えるだけの機能を維持している

研究所のみ利権が与えられる。ならば機能を失えば、利用するだけ利用しただけで損失はゼロだ。例えば何らかの事故で機材が焼失したり、研究データが消されたり、正体不明の襲撃者が襲撃に成功すれば利権は得られなくなる。

天井の気付いていない表情で悟り、呆れる。

（ヤレヤレ、ドクター天井も研究者としては優秀なんですがねエ）

研究者にも色々なタイプがいる。天井は研究以外では知識が疎く、上手く立ち回れないタイプだ。

（まあその方が私としては与しやすいですが）

片言の男は内心でニヤリと笑った。

「それより、計画の進行が遅れていることが問題です」

「ああ、それはスケジュールを調整し直した。残りの妹達の製造を早めるように指示を出している。問題ない」

襲撃と引き継ぎの関係で実験の開始が遅れている。実験を短縮するため、実験の間を詰めスケジュールを調整し直したのだ。結果、妹達の製造を早めることになった。

以前は研究所の妹達の生産ラインや収容数の関係で本来一ヶ月に2000〜3000体程度が限界であったが、研究所の引き継ぎに伴い、残った全ての妹達を製造し管理できるようになった。事実すでに各施設では一万八千もの妹達の培養をはじめている。

「逃亡した妹達も問題だ。造り直して計画を始めるにしろ、捕獲にしろ処分しないとイケない。できれば貴重なサンプルである0000号だけは捕獲したいが」

ネットワークから消失した妹達の追跡は難航している。地下に逃走したようだがまだ見つからない。

「確か、探索に割ける人員が不足してるんでスよね？」

「そうらしいな」

探索は人海戦術だ。人がいなければ当然効率が悪くなる。壁で覆われた学園都市から逃げられないとはいえ、学園都市自体も広大だ。

「なら話しは簡単です。探索班に妹達を加えればいい」

「！？しかし、逃亡する可能性が！？」

「勿論妹達の監視を付けてです。今までの人員を監視役に回せばいい」

妹達の不始末は妹達につけさせればいいのだ。

「お姉様、そろそろ時間ですが、とミサカは注意を促します」

ああー結局なにも思い付かなかったな………どうしたもんだか。

「そう言えばオリジナルのお姉様がどこにもいないようなのですが、なにか知りませんか、とミサカは問い掛けます」

「あれ？んなバカな。門限の時間………ではないよなあ。用事があるなら言うだろうし」

んーどうしたんだ？さっきの感じだと、黙って帰るなんて有り得な………！？まさか何か思い付いたのか！？黙って出たってことは、自分一人で危険なことをやるつもりかもしれない！！杞憂で済めばいいけど、嫌な予感がする！

「まずいな、お姉様を探しに行ってくる！お前達は待機してくれ！」

まだ時間はそんなに経っていない。お姉様、無茶はしないでくれよ！



## 第二十六話

まだ夕方だから人通りもそれなりにある。お姉様がいなくなつて時間があまり経っていないからすぐに見つかるかと思つたけど、この中からお姉様を見つけるのは非常に困難だ。ネットワークの存在があるから、追つ手がきても対処できるように俺のみ出てきたけど早まったか？ああもうネットワークで妨害できればいいのに！

……あ、そうか！自分の能力で電磁波の膜みたいなものを造りネットワークの電波を遮断すればいいのか！なんで単純なことに気付かなかつたんだらう。発電能力応用力高すぎだよな。

………できるにはできた。思ったより消耗が激しい。使い続けるとなると妹達じゃすぐに電池切れを引き起こすかもしれない。やはり俺一人でいくしかないか。早く見つかるといいんだが。

携帯端末を操作し、書庫にハッキングする。セキュリティは高いがレベル5である美琴にしてみれば無いも同然だ。調べるのは一方通行の情報。あつた。住所もわかる。あとは本人に会うだけだ。

調べたマンションに一方通行はいなかった。まさかもう実験は始まつているんじゃないか？と一瞬不安に過ぎつたが、妹達の話が正しければそれは有り得ないだろうと考え直し、ただ出掛けているだけだと判断する。待つていてもよかつたのだが元々気が短い美琴は周辺を探すことにした。

河原。高架下の陰に一人の少年がいた。短髪で白髪、肌は白く、線が細いので一見少女のようにも見えるが、やはり少年である。爛々と輝くような赤い瞳はただ気だるげに地面にはいつくばる男達に向けられていた。

「オイオイ、もう降参ですかア。これだけ弱い雑魚のクセになンでこの俺に喧嘩売ってきてるンですかア」

男達は誰ひとりとして無事ではない。大半が虫の息で意識を保っている者は少数だ。頭や手足を怪我して血を流している者ばかりであり、中には武器として持ってきたであろうバットはひしゃげ、その持った腕ですらあらぬ方向に曲がった者、地面に使われていた筈のコンクリートが破片になって突き刺さっている者もいる。

「ひいッ……………！」

他の者に比べ幾分か軽傷　　といっても頭から血を流し、左腕は脱臼しているようだが、の男は完全に怯えきって少年から逃れようと必死だ。しかしその思いも虚しく腰が抜けているせいかが力が入らず不様に足をばたばたとさせることしかできない。

「あん？自分だけ逃げるつもりかよオ。というか喧嘩売っておいて逃げられると本気で思ってるならおめでてエな」

そういつて近寄ってくる恐怖の象徴に男は意識を保つことはできな

った。

「チツ……………」

少年は男を一瞥したあと舌打ちし、傍に置いていたコンビニのビニール袋を拾い上げる。袋には一杯の缶コーヒーが入っていた。

元々少年は近所のコンビニで缶コーヒーを買うつもりで出掛けたのだったが目新しいものが無かった。そのため他のコンビニまで遠出したのだった。袋の中身の缶コーヒーはどれと同じ製品はない。学園都市は実験都市だ。それは飲料や他の日用品にも当て嵌まり、外では見かけないような新製品も多くある。そのため自販機やコンビニで全く違う商品が並んでいることも珍しくはない。

で遠出した結果がこの惨状である。もっともこの光景はいつものことだ。大概は今回と同じように徒党を組んで襲ってくる。そしてその全てを返り討ちにするのだ。何一つ例外はない。変わらない現状に少年はウンザリしていた。

彼の名は一方通行。学園都市のたった七人しかいないレベル5の第一位。レベル5には序列があり、能力の強さだけではなく能力の希少性や研究としての価値も含めて決められている。だが彼は希少性や価値もさることながら、純粋な能力の強さで他のレベル5を圧倒していた。まさしく学園都市の『最強』の能力者なのである。

しかし最強という称号は争乱を引き起こす呪いに過ぎなかった。

超能力者に憧れ学園都市を訪れる者は少なくない。脳の調整を行えば簡単に奇跡のような技が身につくのだ。自分ならひょっとしたらすごい能力が眠っているのではないか？そう可能性を信じて疑わな

い、いや夢見て訪れる。

そして現実を知るのだ。

能力者の大半はレベル1かレベル0である。当然訪れた者もレベル1や0になるものが大半になる。しかし学園都市ではレベル3からがエリート扱いであり、事実上位の学校では入校の条件にレベル3以上であることが必須条件に含まれる位だ。つまり、学園都市ではその者達は無価値　　落ちこぼれと分類されるのである。

そんな彼等はどうなるのか。大半はカリキュラムに勤しみ能力が上げようと努力するだろう。しかし努力が実らないと感じたときどうなるだろうか？結果、夢を諦め、能力があるものを妬む。

これは彼等だけではない。レベル5と分類されなかった能力者も同様だ。研究の利用価値がないと判断されたものや進化できないと感じたとき同じ状態に陥る。

それがきっかけになり、スキルアウトと呼ばれる無能力者の不良集団になったり、学園都市内で犯罪を起こすのだ。

そうした彼等は能力ある者を憎む。学園都市最強の超能力者その肩書は憎しみの矛先が向けられるのに十分な理由だった。単純に最強を倒すことで名声を得ようとする者、研究者や能力者を見返そうとする者、最強に成り代わろうとする者、様々な理由を抱えた暴力が一方通行に向けられるのだ。

その度に相手の心が折れるまで叩き潰す。それが彼のやり方だ。元々幼い頃から非人道的な実験を繰り返し返してきたし、今更自分が善人ぶる必要はない。だがこんなことが繰り返し返されるとウンザリするのだ。最強になれば解放されると思っていて。しかし環境は何一つ変わっていない。『最強』止まりではダメだ。もっと超越した何かになら

なければ　挑むことさえ馬鹿らしくなるような無敵の存在にならなければ変えられない。

そう考えていると缶コーヒーが落ちた。ビニール袋が破れていることに気付く。どうやら先の争い中に誤って破片か何かが当たったらしい。こんなことならば、持っておいて反射するように設定すればよかったと思い、一方通行は舌打ちする。そして拾おうとし転がったほうに目を向ける。すると先に拾い上げる手が見えた。拾い上げたのは一人の少女だった。

お姉様見つからなーてかここどこよ？土地勘もなしに出かけるもんじゃないね。お姉様を見つけないと病院まで無事戻れるんだろうか……。まさかの迷子フラグに途方に暮れる。お姉様！早く来てくれー！あれ、なんか趣旨が変わったような。

橋の傍の階段を降りる。カランと何か落ちたような音。転がってきたのは缶コーヒー？空き缶はゴミ箱へ！てこんなことしてる場合じゃないな。思ったけど空き缶じゃないやこれ。てか漢の浪漫コーヒーって。どんな味するんだ？

「おい」

声をかけられたほうに顔を向ける。そこには白髪の男がいた。なんというかあれだな。風体がチンピラモヤシだな。うん。

周りが血だらけな男や有り得ない方向に曲がった腕やら橋の柱に向かって犬神家してる奴がいるようなバイオレンスな世界を視界にお

さめながら、そう失礼なことを考えていた。

絶対コレ面倒事フラグだ！

## 第二十七話

右手に缶を左胸は早鐘を。回る世界はバイオレンス。

いやはや周りにたくさんいる重傷者は多分あのチンピラモヤシにやられたんだろうけど。放置するとヤバくね。

「おい」

なんですかチンピラモヤシさん。そんなモヤシさんの手には破れたコンビニ袋。それと辺りには沢山の缶コーヒーが散らばっていた。どうやらこの缶コーヒーは彼のものらしい。

「えっと……………コレ」

男の浪漫コーヒーを手渡す。微妙な空気になりながらも男は黙って受け取った。ついでに他のも拾い上げるのを手伝う。どれもこれも微妙な商品名だ。スーパーでも変な商品を見かけたけど売上の大丈夫なんだろうか。とにかく空気が重いので適当に片付けたら逃げよう。

全て二人で拾い上げる。よし逃げよう。あと重傷者のために人呼ばないと。携帯も無いし、警備員や風紀委員にバレると面倒だけどほって置けない。

「おい、お前超電磁砲か？」

……………どうやらお姉様のことを知っているらしい。女子校のお姉様がこの男と知り合いは考えにくいけど、お姉様は有名人だからなあ。

ファンとかなにかかな？友達だったらお姉様の交遊関係はある意味すごい。

「いや違う。…………妹だ」

迷ったけど下手にごまかしても意味なさそうだしな。

「妹？…………ひょっとして実験の関係者か？」

実験の関係者……………思い付くのはあの計画。実験を知っているってことは関係者か？！一気に警戒レベルを上げる。いつでも逃げられるように身構えた。

「……………あんだ誰だ？」

「聞いてねエのかア。これから二万回も面倒臭エ実験につき合う仲なのによオ」

実験につき合う　　てことはこいつ、一方通行か！？

「で、実験は延期してるはずなのに、なんで妹達が屋外にいるんだア？」

この口ぶりから察するに一方通行は実験を知っている。あんな非道な実験に協力するつもりらしい。

「……………どっして」

「あん？」



「どうしてあんな実験に協力しようとするんだよ！あんた学園都市どころか世界でも最強の能力なんだから！？だったら無理にあんな実験に参加しなくたっていいじゃないか！」

これだけ沢山の男に囲まれても勝てる実力。実際軍や国を相手にしても勝つような実力なんだ。だったらレベル5のままでも十分じゃないか。

「そりゃあ、絶対的なチカラを手にするため。レベル5だとか学園都市で一位だとか、そんなつまんねエもんじゃねエ」

一方通行が男達を一瞥する。

「コイツら見てみる。学園都市最強の座を狙って突っ掛かってくるバカどもだ。つまり最強程度じゃこんなバカどもが遊び半分で挑んでこようと考える。それじゃダメだよなア」

右手を突き出し虚空に掲げ拳を握る。まるで届かない目標を掴むような仕草だ。

「俺に挑もうと思う事すら許さねえ程の絶対的なチカラ。『無敵（レベル6）』が欲しーんだよ」

………そんなことの為に妹達は犠牲になるのか！沸々と怒りが沸き上がってくる。けどそれと同時に何故かこいつは戦いたくないんじゃないかと思った。実験に参加することや周りの惨状を見れば何言っているんだと思うけど。なんか単純に受け取れば戦いたくないから強くなるうとしてるように聞こえた。そう思うと怒りが収まってくる。

「なあ……ほんとに絶対的なチカラを手に入れたら、誰も挑まなくなるのか？」

「あア？」

「結局手に入れたって今と変わらないんじゃないか？最強になった時だって変わったのか？」

「……………」

「だって今やろうとすることは研究者が用意した実験に過ぎないんだぞ。そんな他人が用意したモンで周りは変わるのか？自分だけが変わっても意味がないだろ？周りと一緒に変わらなきゃ、変えていかなきゃ何も変わらないんじゃないか？」

なかなか変えられなくて困ってるのが現状だしな。妹達が人扱いされない事、実験の事。

「例え変わる可能性があつたとしても、二万人もの妹達を殺していったことじゃないだろ！俺達はお前に殺される為に生まれたんじゃない！」

思わず叫んでしまった。怒りを抑えきれなかったらしい。

「なに……………」

黙っていた一方通行が急にほんの少しだが表情を変えた。……………？この反応もしかして……………知っていなかった？かい摘まんて俺が知っていることを話す。

全部を聞いたあと一方通行は笑いはじめた。

「ククク、ハーツハツハツハ！！！！」

口を歪ませるほど楽しくて仕方ない。そんな表情をしながら、ただひたすらわらう。

自分は善人ではない。むしろ対極にいるにいる悪党だと一方通行は自覚している。だからこそ、悪党に相応しいこんなクソツタレな計画の内容を知ってわらいが止まらなかった。

一方通行が計画の参加を持ち掛けられたのは一ヶ月ほど前だ。その時もまた今の状況に似ていた。いつものように最強の座を狙うバカどもと一戦終えたところに声をかけられた。大概自分に近付いてくるのは前述のバカか、自分を研究して甘い汁を吸おうとするくだらないヤツらばかりだ。そんな話に興味など沸かない。だから今回も断るつもりだった。

だが今回は違った。

「『最強』どまりでは君を取り巻く環境はずっとそのままだろうね」  
声をかけてきたサングラスの男はこう言ってきたのだ。そして『最強』の先『絶対能力』が環境の変化を齎すかもしれないとも。更なる高みに興味が沸けば連絡してほしいと言いつつ残し男は去った。

一方通行が連絡を入れるのに時間はかからなかった。

連れてこられた研究所で見たもの。それは沢山の培養器で製造されている少女たち　超電磁砲のクローンである妹達だった。

国際法で禁止されているクローンを大量生産するなどハナからまともな実験ではないだろう。類は友を呼ぶというのが悪党は悪党を呼んだということか。

だが内容としては拍子抜けするようなものだった。二万通りの戦場を用意して二万のクローンと戦闘するだけという内容。一方通行はただひたすら戦うだけだ。

だが始めようとした時に事故があったらしく、実験は延期。再開する際に連絡がくるはずだった。

クソツタレな外道が関わる実験だ。ただの実験じゃない。心の中ではそう思っていたが、二万体を殺害すると聞いてわらわずにはいられなかった。

やはり悪党は悪党でしかないのだ。

なんで笑ってるんだ、こいつ？どうしていいかわからなくて苛々としてくる。

「イイねエイイねエ！ハハハ！！！」

最高にハイな状態になってる一方通行。できれば関わりたくない。が関わらないわけにもいかないか。

実験の詳細までは知らされていなかったらしい。もしかすると説得可能かも。

「なにがおかしいのかわからんが、実験の事、知らなかったのか？ だったらこんな実験に協力しないでくれないか。頼むから妹達の命を助けてほしい。お願いだ」

一方通行が実験に参加しなければ計画は成立しない。そうなればこの時点でこの話は終わるんだ。頼む！叶ってくれ！

笑いをやめ、一方通行がこちらに視線を送る。

答えは　　。

## 第二十七話（後書き）

携帯でわらうの難しいほうの漢字が出ないので平仮名です。

なんか一方通行さんは口調さえ気をつければ一番書いてて楽しいキヤラですね。原作でも好きなキヤラですが。

## 第二十八話

答えは　　。

待っている間の静寂が重苦しい。これ次第で大きく運命が変わるから当然か。

しかしその静寂はほんの僅かの間だけだった。

はあはあはあ。ここまで逃げれば大丈夫だろうか。キョロキョロと辺りを見回す。今のところ人の気配はない。一息つき壁にもたれ掛かる。

一方通行と話している時ふと人の気配に気付いて見てみるとスーツ姿の男達を取り囲んでいた。一方通行目当てではなく、どうやら俺が目当てのようで一斉に取り押えにきた。どうやら追っ手のようだ。なんとかかわし、手の平の電撃をまばゆく発光させ、男達の目を眩ませたあと逃げ出してきたのだ。

しかしなんて間が悪いんだろう。こんなタイミングで来なくてもいいのに。　　答え聞けなかったな。一方通行が実験に参加しなければ、妹達を助けられるかもしれないのに。

けど可能性が無いわけじゃない。もう一度接触しないと。しかし今回の件でこの周辺は警戒されただろう。悔しいがほとぼりが冷める

までは大人しくしたほうが良さそうだ。……………それにしてもお姉様はどこに行っただらろう？

スーツ姿の男達が少女を追い掛けていき一人残された一方通行は帰路につく傍ら、電話をかける。長い呼び出し音のあとに電話に出たのは女性の声だった。

「あら、あなたから電話をかけてくるなんて珍しいわね。実験再開の日程は事故のせいでもまだ未定よ？」

「ああ？オマエラの不手際が原因だろうが。だいたい妹達が逃げ出したなんて、管理もロクに出来てなくて大丈夫ですかア？」

「!?!……………どこでそれを」

「さつき見かけたからな。それより実験でクローンを殺害する事をなんで黙ってた？」

息を飲む音。しばらく沈黙が流れた。

「そう知ってしまったのね……………」

「しかもレベル5のクローンと戦えるからテンション上げてたのに、レベル3の雑魚に過ぎないんだろ？二万回もお人形さん遊びするような歳じゃないんだぜ？」



「オリジナルとの性能差は否めないわ。その代わり銃器で武装させるし、彼女達はネットワークで記憶を共有できるから実験を行う度に学習し進化していくわ。経験を積んで強くなるはずよ」

「どちらにしても俺に黙ってたつてのが気に入らねエ。なんなら計画を潰したつていいんだぞ？」

静かな威圧。それは電話越しでも伝わっただろう。

「……………そう。たしかにあなたの協力が無くなれば、実験はできなくなるわ。……………まあどちらにしても彼女達は助からないけれど」

「あア？」

「元々彼女達はレベル5を量産する計画が失敗して、この計画に組み込まれた存在よ。だから実験が無くなった場合、処分されるでしょうね」

日も暮れ、最早人通りも無くなってきた公園のベンチに座りコーヒーを飲む。さつきクローンが拾い上げた缶コーヒーの一つだ。それは今の心境を表すかのように後味の悪い。

例えば自分が実験を辞めようと何も変わらないのだ。すでに2000のクローンが存在し、今18000もの個体を製造しているらしい。ただこの実験のためだけに生み出された存在。ただ一方通行に

殺されるためだけに生み出された存在なのだ。もし実験を今辞めれば、存在意義を無くし処分されるのだから、寧ろ彼女達の生存時間を縮める結果にしかならない。

どちらにしても既に二万の命の重みを背負っていたのだった。

（今やろうとすることは研究者が用意した実験に過ぎないんだぞ。そんな他人が用意したモンで周りは変わるのか？）

あのクローンの言葉が響く。この実験も今までの実験と何ら変わらない。研究者が敷いたレールを進んでいるに過ぎないのだ。そのレールから抜け出すことが出来ずにいる。だからあのクローンの言うようにどんなに犠牲を払っても今までと同じで何も変わらないのではないのだろうか。

だがしかし。どうすればいいと言うのだろうか。クローン達を救うのか？悪党である自分が？今更ヒーローにでも成り代わるつもりか？

それはない。自分はヒーローにはなれない。悪事に手を染め続けた自分ではヒーローにはなりえない。何も変えることのできないヒーローなんて必要はない。　　そう自嘲した。

ならば突き進む。例えそれが手を汚す結果になろうとも、その罪を背負う。悪党は悪党で居続けなくてはならない。

「アンタ、一方通行よね？」

今日はつくづく来客が多い。しかも先程の少女と全く同じ顔だ。違  
うところと言えばゴーグルがあるかないかぐらいだろうか。

「お前クローンか？オリジナルか？」

それを聞いた少女は元々剣呑な顔をより厳しいものに変えた。

「オリジナルよ！アンタやっぱり実験のことを知っているのね！」

「ああ、オマエのクローンには世話になるンだけ。俺の無敵化を手  
伝ってくれてンだ。感謝しなきゃな」

「フザケンじゃないわよ！あの子達はアンタに殺される為に生まれ  
てきたんじゃないわ！」

（俺達はお前に殺される為に生まれたんじゃない！）

クローンとの言葉が重なる。容姿だけじゃなく考えも瓜二つだと感  
じていた。

「オイオイ、人聞きの悪いな。人殺し見てエな事言っなよ。俺が相  
手にするのはボタン一つで造れるオマエの模造品だけ。人形に何ム  
キになってンだ？」

そういつて一方通行はニヤリとわらった。少女の怒りに呼応するか  
のように、全身から電撃が瞬き始める。

「それ以上あの子達を侮辱するなあああああ！！！！！！！！」

その言葉と同時に少女の体から発せられた幾筋もの雷撃が一方通行を襲う。しかし一方通行に接触するか否かの時点で、不自然に雷撃が曲がった。まるで一方通行を避けるように。

それが彼の能力。ベクトル操作。学園都市最強の力。

「なんだ、同じレベル5というから期待してたんだが、大したことねエな。ほんとにオマエ常盤台の超電磁砲かア？」

否と答えるかのように、少女　　美琴は攻撃の手を休めない。事前に相手の能力は調べてある。自身の能力が通用しないことは十分に想定済みだった。

美琴が地面を蹴る。すると黒い砂鉄が舞い上がった。砂鉄は渦を巻きはじめ竜巻と化し、一方通行を飲み込んだ。砂鉄の嵐に飲み込まれれば対象はズタズタに引き裂かれる。しかしそれは普通ならばだが。

「ふーん、磁力で砂鉄を操ってんのか。おもしれエ使い方だ」

相手は普通ではない一方通行だ。その嵐の中ですら平然として能力の分析まで行う余裕がある。

「ま、タネが割れたらどうって事ねエよな」

嵐の中で渦の流れを演算し、ベクトルで操作する。途端に嵐は止み只の砂鉄に戻り舞い散った。

これも通用しない　　事前に能力を知ってはいるが、全力を出し

ても悉く通用しない現実を美琴は苦々しく思った。元々の目的はこのまま続けられれば達成できるだろう。しかし妹達を嘲笑った一方通行に一撃を入れなければ。そうでないと怒りが収まらない。そう思って全力で攻撃しているのに、一撃を入れることすらできない。それ程までに第三位と第一位とでは遠いのか！

ポケットからコインを取り出し、構える。そして親指で弾いたコインが一条の光となって一方通行を貫く！これが第三位の代名詞ともなった超電磁砲

！

一方通行を貫くはずだったコインが美琴の頬を掠めた。それは一方通行の反射。何物も通さない絶対防御。それは超電磁砲も例外ではなかった。

「さて」

自分の絶対的に信頼していた技をいともたやすく反射され、一瞬呆ける美琴に一方通行が声をかける。

「次はこっちの番だ。そのザマじゃあんま期待できねエが、ちったあ楽しませてくれよな三下ア」

## 第二十九話

一方通行が地面を蹴ると美琴の間合いを一瞬で詰め、腕を掴む。

「!?しまっ……………」

「捕まえたア」

ニイと笑つと美琴をぶん投げ地面に叩きつけた。

「くはッ……………!!」

受け身も取れず背中から地面に叩きつけられたため、一時的に呼吸ができなくなる美琴。しかし、相手は最強だ。追撃に備えて素早く身を起こす。

「さっきの砂嵐は面白かったなア。たしかこんな技だったか？」

また地面を一蹴りすると今度は竜巻が起こる。最も先程美琴が起こした倍ほどの大きさがあり、砂鉄だけではなく砂利や砂も含まれたものだ。それが美琴に牙を向けた。

かわすのは不可能だ。ならば相殺して少しでも威力を弱める。美琴は素早く演算し、大地を蹴る。先程と同程度の竜巻ができ、一方通行の竜巻の進路を遮った。

互いの竜巻が接触し押し負けつつも美琴の竜巻は一方通行の竜巻の進行を遅らせることに成功した。とはいえ一時的なもので想定通り美琴が創った竜巻は押し負け飲み込まれて散る。想定外なことに殆

ど勢いが衰えてはいない。しかし時間を稼げたお陰で街灯を目掛けて磁力による移動を使い竜巻の進路から離脱できた。そのまま竜巻は樹木をへし折り巻き上げながら進んで自然消滅した。

間違いないあれを喰らえば無事では済まなかつただろう。ぞつとする。攻撃の手を休めればそれ以上の苛烈な攻撃が襲って来るだろう。街灯やベンチなど近場にあつたものを磁力で操作し一方通行に向けて投げつける。とにかく隙を作らせない。だが一方通行に当たりそうになると街灯は折れ曲がり、ベンチは砕けた。

「もうネタ切れかア？大したことなさすぎンだろ」

息切れを起こし始めている美琴と比べて一方通行は全く消耗した気配がない。先程までの興奮や楽しいといった感情が抜け落ち、顔に残ったのは落胆。

「もういい。飽きた。とつとと止め刺してヤンよ」

そこからは一方的な蹂躪だった。美琴も反撃はするが、どの攻撃も一方通行には届かない。逆に攻撃を反射され、それが牙を向けてきたり、近辺の街灯などを投げつけてきたり、先程のように掴まれ投げ飛ばされたり、蹴り殴られたり。

美琴はそれでも諦めずに何度も立ち上がり攻撃するが次第に反撃できなくなっていく、立っている時間も短くなっていた。

「ッ　　！！！」

美琴は声にならない悲鳴をあげる。一方通行は地に伏した美琴の髪を掴み上げたからだ。もう傷が無い所はない。服はボロボロ、手足は切り傷や打撲ができ、鼻や口からも血が流れまともに呼吸すらできていないだろう。

最早彼女に反撃するだけの力はない。能力はすでに限界を終えていて使えない。最も演算を必須とする超能力では今の意識が朦朧とした状況で使えないだろうが。

重力を操作し美琴を掴み上げたまま跳ぶ。自重に髪の一部がぶちぶちとちぎれるがまだ美琴を支えていた。そして一方通行はある程度跳び上がるとパツと手を離れた。

ドサリ　　地に落ちた美琴はピクリとも動かない。ゆっくりと一方通行は降り立ち、それを確認したあとその場を後にした。

無事に男達を巻き、なんとか病院に辿り着いた時にはもう夜だった。結局お姉様には会えず仕舞い。すれ違いで病院に戻っていればいいが、どうしたものだろうか。

「お姉様、戻られたのですかとミサカは確認します」

「オリジナルのお姉様とは会えましたかとミサカは問います」



妹達が出迎えてくれた。どうやらお姉様は戻っていないようだ。

「ただいま、結局お姉様は見つからなかったよ。その口ぶりだとこ  
つちには戻ってきていないようだな。一息ついたらまた探しに行く  
よ。あと追っ手がいたから、みんななるべく外に出ないようにな」  
追っ手がいる以上あまりみんなを外には出したくない。お姉様を探  
すのを手伝って欲しいがリスクが大きすぎる。仕方ないもう一度一  
人で探しに行こう。

外に出る。やや騒がしい。どうやら急患が運び込まれてきたようだ。  
ストレッチャーで運ばれていく急患の姿が目に残る。

(えっ ?)

見るからに痛々しく血まみれの姿でボロボロだった。

(なんで ?)

だけど見覚えのある姿。

(お姉様が ?)

カエル先生の話によると 一時は本当に危なかったらしい。心  
停止も起きていたようだ。傷や全身打撲はいうに及ばず、鼻やあば

らが折れ、一番酷いのは左腕を複雑骨折したらしい。今も意識は戻っておらず絶対安静が告げられた。

見つかった場所は昨日の橋の近くの公園。能力同士の私闘があると報告を受けた風紀委員が見つけたらしい。現場を見るからに苛烈な戦闘だったらしく、一帯は更地の上、ところどころ大地がえぐれ、街灯などの破片が転がっていたそうだ。

倒れていたのが第三位のレベル5ということもあり一時騒然としたそう。本来逆に倒すことがあっても倒されることがないのが当たり前の実力を持つレベル5が倒れていたのだから当然だろう。

お姉様を倒したのは誰か。状況証拠でしかないが、ある確信があった。レベル5で第三位であるお姉様をここまで一方的に倒せる相手。見つかった場所。これは………一方通行の仕業だろう。

おそらく俺と会った後にお姉様が一方通行と遭遇、恐らく実験のことで戦ったのだろう。結果は悔しいが樹形図の設計者が予言した通りということか。でなければレベル5であるお姉様が負けるなんてことは考えにくい。他のレベル5の可能性がないことはないが場所が場所だけに一方通行の可能性が高い。

これはつまり一方通行が敵に回ったということか。

くそっ、なんであの時もっとよく探さなかったんだ！そうすればお姉様があんな目にあわなくて済んだかもしれないのに！ああ、畜生！

## 第三十話

容態は安定したとはいえ、未だ意識が覚めないお姉様。絶対安静面会謝絶なため傍にいて看病することもできない。何もできないという無力感に苛まれながらネガティブなことばかり考えていた。

お姉様のこと、一方通行のこと、妹達のこと、砥信さんのこと、実験のこと。

どうすればいい？なにができるんだ？不安や焦燥で考えがまとまらない。実験開始のリミットが迫ってくる。だが解決策は見つからず只時間を浪費するだけだった。

ああくそ！苛立ちの余りに壁を殴りつける。

「大丈夫ですかお姉様、とミサカは心配します」

「大丈夫だ！」

思わず声を荒げてしまう。……………。

「……………すまん」

「いえ気にしないでください」

「ほんとにどうしていいかわからないんだ。お姉様は倒れてしまったし、一方通行は敵に回った」

状況は悪化している。打つ手は殆どない。

「ならば学園都市の外に逃亡しますか、とミサカは提案します」

外に逃げる。学園都市は壁で覆われており外部からの出入りを制限している。警備も厳重で通常であれば逃げるのは難しいだろう。元々はお姉様がいれば突破できる可能性が高かったが今は武装でもしなければ難しい。

それにこの案を保留した訳は時間がかかるということ。それはつまり他の妹達を見捨てるということになる。例えば外部から助けを得られたとしても、実験で犠牲になる妹達が出ていることだろう。

正直な所、今の状況はかなり酷い。その中で妹達のことを助けるのは困難極まりない。だから諦めるか？

お姉様の姿が脳裏に過ぎる。傷だらけで生きているのが不思議なくらいポロポロの姿。一方通行はお姉様にしたように残虐に殺すだろう。そんな目に妹達を逢わせたくない。

「絶対にそれはダメだ」

しつかりしろ！お姉様が倒れた今、自分達以外助ける人はいないんだから。頬を叩き気合いを入れ直す。お姉様は最初一人で戦ったんだ。自分はまだ妹達がいる。だからやらないでどうする！

………？そっぴやお姉様は昨日何をやるうとしてたんだ？たまたま一方通行と遭遇して戦闘になったとは考えにくい。あの状況だと実験を止めるために動いていたはずだ。一方通行と遭遇しただけならば逃げるべきである。一方通行から攻撃してきたんだらうか？いや考えにくい。一方通行が戦うことで得るメリットがない。あの時の

不良達も一方通行を襲ったから、反撃されたに過ぎない。

となるとお姉様が意図的に会い、お姉様から戦ったことになる。目的は一方通行の排除か？いや樹形図の設計者や能力を知っているとすると、負ける可能性が高いとわかっていた筈だ。では何のためだろう？

「なあ、お姉様はどうして一方通行と戦ったんだと思う？昨日恐らくお姉様は何かを思い付いて、実験を止めるために一方通行と戦ったんだと思うんだけど」

「確かに一方通行を倒すなら能力から考えてこちらに勝ち目はないでしょう、とミサカは推測します。となると、寧ろ戦うこと自体が目的なのではないのでしょうかとミサカは結論付けます」

戦うこと自体に意味があった？お姉様と一方通行が戦うことでどうなるんだ？

実験は妹達を二万人殺害し、その戦闘経験を得ることで成立する。元々一二人のお姉様を殺害する予定だったが用意できなかっためにこのようになったのである。だから二万人の妹達の代わりにレベル5のお姉様一人が戦ったところで完了するわけじゃない。しかも殺害されていないのだから実験自体も完了したわけじゃないし。

あれ……………待て待てよ。

確かに殺害されることが実験のプロセスに含まれている。しかしゲームとは違い相手を倒さないと戦闘経験が得られないわけじゃない。殺される前までも確実に蓄積されるものだ。

「一方通行とお姉様が戦うのは計画外の戦闘だよな。となるともし

かして今までスケジュールされた実験通りに進められないんじゃないか  
いか」

スケジュールは緻密なものだったはずだ。ならばレベル5一人が戦えばどうなるだろう？単純に数百人の妹達を実験に相当する経験を  
得、それが実験の短縮に繋がるのか？

「そうですね。恐らく計画外の戦闘は樹形図の設計者の予測演算に  
誤差が生じ、修正できない程の歪みである場合、実験は停止するで  
しょう、とミサカは予測します」

これかお姉様の狙った事は！レベル5が全力を尽くした戦闘だ。と  
なると演算の誤差は大きいはず。

「ですが樹形図の設計者が有る限り再演算され実験は継続されるは  
ずです、とミサカは断言します」

「それに実験の修正が必要かどうかは樹形図の設計者でないと判断  
できないのではないだろうか、とミサカは疑問を投げ掛けます」

そうか樹形図の設計者が有る限り、この実験は修正できる。研究者  
は機械の言いなりに動いているのだ。それに都合良く修正が必要だ  
と演算されるかはわからない。

「だったら、樹形図の設計者に嘘の演算を出させて壊せばいい」  
そこまでがお姉様の計画だったのかもしれない。本来一方通行との  
戦闘は余力を残した上で切り上げる筈だったんだろう。しかし、一  
方通行が予想以上に強すぎて余力を残せなかったのかもしれない。

お姉様は一人で終わらせようとしてたのか……………もしそうなら意識

が戻った時お仕置き決定だな。全くもう少し頼ってほしい。

けど道は切り開いてくれた。ありがとうお姉様。絶対にその行為は無駄にはしない。

となると、俺達が次に行わなきゃならないことは決まった。

世界最高のスーパーコンピュータ「樹形図の設計者」と交信を行う  
情報送受信センターの襲撃及び「樹形図の設計者」の破壊。

お姉様が作ってくれたチャンス。必ずモノにしてみせる！

## 第三十一話

唐突だが、学園都市の地理について簡単に話そう。

学園都市には二三の学区が存在する。各学区はそれぞれ特徴みtainなものがある。まあなにかに特化させたエリアや特徴的な施設があると考えてもらえばいい。例えば、行政関係を集めた学区、外部からの来賓を迎えるための学区、研究所を特に集めた学区、商業施設を集めた学区などだ。ちなみにカエル先生の病院は第七学区になる。

その中でも航空や宇宙開発を専門とする施設が多く集まったエリアがある。それが第二三学区。最先端のロケット発射場がある学園都市宇宙センターや樹形図の設計者との交信を行う施設である情報送受信センターがあるエリアだ。

『樹形図の設計者』情報送受信センター　世界最高のスーパーコンピュータである樹形図の設計者の窓口となる最重要機密施設である。ここから決まった時間に樹形図の設計者と交信し、予測演算させたいデータを送信したり、その演算結果を受信する。ここ以外にデータの送受信は出来ない。唯一の窓口なのだ。

蛇足かもしれないが、樹形図の設計者についても説明しよう。樹形図の設計者は世界最高峰のスーパーコンピュータである。学園都市の天気予報はこれによって演算された予報であり、何時何分に雨が降るなど正確に演算できるほどだ。

樹形図の設計者は何故人工衛星に載せられているのか　これは樹形図の設計者の性能が他国のスーパーコンピュータを遙かに上回る性能のため、様々な組織に狙われており奪われないように宇宙に



退避させたのである。学園都市を除けば普通宇宙にロケットを飛ばせるのは特定の国家ぐらいしか存在しないし、打ち上げた時点でどの国が打ち上げたかは特定が容易だ。そのため他の組織が手が出せないのである。だが虎視眈々と隙あらば狙っているらしい。

それだけ高性能な樹形図の設計者に「一方通行と超電磁砲との戦闘によつて実験の継続は不可能」あるいは「実験の修正が必要」と嘘の予言をさせて壊せば、再演算できなくなり、実験は頓挫して妹達がお払い箱となる。実験から解放されればカエル先生が自身の研究に組み込む形で妹達の身柄を確保し一件落着となるわけだ。

壊しても学園都市の上層部が樹形図の設計者を直してしまつたら実験は再演算されることはないのかと疑問に思うだろう。しかし、それは不可能なのだ。

それは何故か。考えてもみて欲しい。他の組織は樹形図の設計者を得るために様々なアプローチを行っているはずである。なのに何故宇宙に飛んでいる現物を虎視眈々と狙うのか。例えば樹形図の設計者の設計図を盗んだり、開発者を勧誘または拉致して情報を得、独自に再現したほうが容易ではないのか。勿論外と学園都市の技術レベルから再現できないという問題もある。しかし一番の理由は樹形図の設計者の中枢部の設計図が失われており、もはや再現不可能となつているからである。そのため現物である樹形図の設計者を狙うしかないのだ。

これは逆にいうと学園都市ですら再現不可能ということにもなる。だから、樹形図の設計者の外殻は頑丈に造られているそうだ。

つまり樹形図の設計者を破壊すれば、学園都市で新たに造り出すことは出来ない。新たにスーパーコンピュータを造つても樹形図の設

計者の性能からみれば大幅に劣ることだろう。

樹形図の設計者の破壊に関しては人工衛星を操作する。元々人工衛星は遠隔にて操作できる。操作した衛星を大気圏に突入させて燃え尽きさせればいいだろう。突入時の角度を深くすればできるはずだ。

また嘘の予言に関してだが、お姉様なら可能かもしれないが樹形図の設計者を直接操作し改竄させるのは俺では無理かもしれない。だが、送受信センターにある樹形図の設計者との送受信の端末ならば遙かに改竄しやすいはずだ。樹形図の設計者にあるであろう送受信のログを見ればこんな小細工はすぐにバレるだろうが、肝心の口グは大気圏突入にて消滅する予定である。演算結果を操作したかはバレない可能性が高い。

これが今回の作戦の全貌である。

この作戦はタイミングが要求されるものだ。実験関係者から実験の再演算を申請されていなければアウト。申請されていたとしても既に演算結果が送られていてもアウトだ。再演算の申請が行われており、尚且つ演算結果は送られていない状況。この状況の時のみこの作戦が有効である。

樹形図の設計者との交信は時間が定められていて、昨夜お姉様が倒れる前にだからはまだ交信は行われてはいない。問題は再演算するかどうかの申請が行われているかどうかだ。

それを調べるために近くの研究所を襲撃する。今回は俺の他にも妹達も一緒だ。最初は一人で行くつもりだった。しかし、お姉様のこととあつて心配したのか同行してもらったことになった。研究所の警備はゼロではないし、状況によればこのまま送受信センターに向か

うため消耗を防ぐこと、最重要施設のため襲撃も容易ではないからだ。警備は厳重だし運用している人間もいるので制圧するのに一人では無理だと正論で諭されてしまおうとぐうの根も出ない。

でまあ、研究所に侵入したわけだが。なんとというか呆気なく侵入してきた。以前の研究所ならば侵入、脱出にも苦労したのだが、引き継ぎ先の研究所のセキュリティは甘く、潜入スキル持ちの妹達に無効化されていった。

これは憶測に過ぎないが、お姉様が襲撃を繰り返したことにより引き継ぎは防衛力より数を優先させたためセキュリティが甘いのもしれない。

そして研究所の端末から幾つかの情報を入手した。

まず、18000人の妹達が製造段階にあること。つまりあと12日で実験のための二万人集まることになる。

そして妹達が俺達の追跡に駆り出されているようだ。研究所内にいれば一緒に逃げようかと思っただが、ここの妹達も探しに出てしまっているらしい。

最後に申請についてだが、やはり一方通行とお姉様の戦闘は観測されていたらしく既に行われているようだ。よし、状況は想定通りだ。あとは乗り込むだけなんだが。

「あの皆さん、それはなんですか？」

妹達の手にはアサルトライフルが。てかなんでそんなものがこんな

ところにあるんですか!?

「一方通行との実験で使用する予定の銃器、F2000Rです。どうやら実験で使用する武装は各研究所で保管されているようです。送受信センターは厳重な警備が想定されるため武装による強化は必須です、とミサカは胸を張って答えます」

「お姉様もどうぞ」

そういわれ手渡される銃。本物の銃って触ることなんか憑依前ですら無かったけどプラスチックな材質の銃でなんというか玩具みたいだなあ。現実感が伴わないまま研究所を後にした。

第二三学区、樹形図の設計者送受信センター。立入禁止と書かれたフェンスの前に並ぶ俺と妹達。

さあ作戦の決行だ。

## 第三十一話（後書き）

樹形図の設計者の設定に関しては捏造です。

## 第三十二話（前書き）

一部修正しました。

名前の間違いと樹形図の設計者の一部を削除しました。

樹形図の設計者の天気予報は一ヶ月まとめてですからね。間違えて  
ました。

## 第三十二話

フェンスの前には小型の警備ロボがいる。不審者と判断した場合、取り囲んで警報を鳴らすタイプだ。最重要施設の立入禁止区域だ、当然厳重な警備が敷かれておりロボやフェンス越しにも赤外線式であるセンサーみたいなのも沢山みて取れる。

さつきまでは捕まらないように、地下を通ってなるべくバレないようにしてきたが、ここまでくればバレるのは確実だ。気にする必要なんてない。

「準備はいいか？」

その言葉にみなコクリと頷いた。

「じゃあ　　行くぞー！」

アサルトライフルで警備ロボやセンサーをぶち壊し、一気に入口まで駆け抜ける。恐らく中の警備はとくに異常に気付いているだろう。警報が鳴る前に破壊してるとは言え、次々とロボットやセンサーの反応が無くなっているのだ。一部なら故障と疑うかもしれないが、ここまで同タイミングだと襲撃以外考えられない。

それにしてもアサルトライフルは凄い性能だな。洗脳装置で銃器の扱いには慣れていたが、割と大きな銃なのにほとんど反動がないため非常に使いやすい。別称、オモチャの兵隊トインルンジャーと呼ばれるのこのアサルトライフルは名前の通りプラスチックの外見も相まって玩具にしか思えないが、威力を知ればやっぱり本物の銃なんだと実感する。こんなの実験に使うとしたのかと思うと……想像しただけだけど顔は多分引き攣ってるんだろうな。一方通行は反射するから当たらないかもしれないが、跳ね返った弾でこっちがバラバラにされそう。それにこの銃に備え付けられたグレネードは使用してないがきつとろくでもない威力なんだろうな。

迎撃に来たであろう警備員は電撃で気絶させ無力化しつつとんどん先に進んでいく。そして交信室にまで辿り着いた。緊張しながら扉を開ける。中には誰もいない。どうやら襲撃に気付いて非戦闘員は避難したようだ。

交信時間まではまだ時間がある。交信させると同時に書き換え、樹形図の設計者を載せた人工衛星「おりひめ1号」を操作するだけでも相当時間がかかるため、その間はここを制圧し続けなければならぬ。15人の妹達が入口を封鎖、死守しつつ俺と残りの妹達が端末を操作、ハッキングする体制だ。

まずは再演算依頼が届いているかの確認だ。端末のセキュリティロツクを解除し演算依頼の項目を検索する。研究所で調べた通り依頼は間違いなく届いていた。今日申請されたばかりだが上層部の申請は受理されており、交信待ちである。あとは交信時に結果を書き換えるだけだ。

次に衛星の操作を行う。衛星の落下位置や大気圏突入の角度の割り出しを行った。万が一燃え尽きなかった場合、街に落下したら大惨



事だからな。落下する場合は海になるように調整する。大気圏に向かうようにセットして準備完了だ。時間にして二時間。そこを過ぎればもう重力により軌道修正ができなくなる。二時間か、割と長く感じるな。二時間はここを死守しなくてはならない。早く時間にならないだろうか。

焦りが募る。しかし時間は想像以上に進まない。

そんな時ガリガリと物凄い音を立てながら扉がこじ開けられた。嘘だろ！？電子ロックされた鋼鉄製の扉だぞ？！

扉を手でこじ開けてるのは一人の小柄な少女。そんな小さな体なのに恐ろしい程の怪力を秘めているんだらうか。いや手じゃない。よく見ると、扉と手の間には隙間がある。どちらかと言えば手に膜みたいなものがあってそれで押しているのか？となるとこいつの能力は空気を操る能力か！？空気を操る能力者いわゆる空力使いは初めて見たがあれだけの力を持っているとなるとレベルは高いんだらう。

「ようやく見つけました。超大人しくして下さい」

どうやら追っ手らしいな。こんな子供まで動員するのか。

「研究所からの追っ手か？こんな所までわざわざご苦労さん。ってことで見逃してくれると助かるんだけど」

「私達は超仕事しているだけです。超諦めて捕まっして下さい」

「悪いけどまだ捕まるわけにはいかないんでな。精々悪あがきさせてもらおうぜー」

流石にあんな子供を撃つのは気が引けるが、電撃を当て気絶させたところだ。妹達は足元を狙い威嚇射撃を行うが少女は弾丸を避けようとする素振りも見せない。

「私のオフエンスアーマー窒素装甲に銃は効きませんよ。超無駄撃ちです」

ううむ、空力使いだから能力的に電気を通さないことはないだろうけど。ならば時間を稼ぐか。

「成る程、その能力は弾丸すら防ぐのか。だから前に出られると。てかさつきから超超言ってるけど、今また流行ってるの？大分昔は流行ってたけど」

使われなくなつたわけじゃないけど、彼女結構頻度高いよね。こっちの世界じゃ流行ってるんだろうか？あるいは超が流行った世代が親な娘さんだろうか。

「本人を目の前にして流行に乗り遅れていると指摘するのは可哀相です、とミサカは嗜めます」

「流行はまた巡るそうです。このまま続ければ時代の先駆者になれるのではないでしょうか、とミサカは希望的観測を述べます」

「流行ではなく個性の追求ではないでしょうか？布束砥信も英語混じりでしたし。多少馬鹿ぼくても個性は大切です、とミサカは自分のナイスフォローに称賛を贈ります」

いやいやお前さん達そこまで言っただけだし、それフォローでもなんでもないから。というかダメ押しだから！なにそのミサカジェット

ストリームアタック！こっちはばつぐんだ！みたいなんですけど！  
なんか相手プルプル震えているんですけど！口をキュツと閉めてな  
にかを堪えるようにプルプルしてるんですけど！ヤバいなんか小動  
物系にかわいい！嗜虐心がそそられますね。……………Sなんか俺。

「……………うん、なんかゴメン」

「……………ッ！」

なんか嫌な予感が……………つてオイ、あのその壊れかけの扉を剥がし  
てどっする気でしょうか？あーなんとなくわかるんですけどね。

「フン！」

掛け声と共に飛んで来る鉄の塊。やっぱり投擲かい！ぜ、全員退避

ッ！……！

？！ってこんな場所で避けたら！ああッ……………！

おまけ

開かない扉。その前に金髪の少女……………フレнда「セイヴェルンが  
いた。」

「どっしたの？フレнда」

ピンクのジャージ姿の少女　滝壺理后が声をかける。二人は学園都市の暗部「アイテム」の構成員である。

「実は絹旗が出てこないのよ」

絹旗最愛。彼女もアイテムの一人である。先日、とある依頼を受け研究所を防衛していた。しかしアイテムの下部組織の一人が研究所の実験動物に発砲し逃走されるハメに。責任を取らされる形で逃げ出した実験動物を探すハメになったのだが……。話を聞く限りその実験動物に口調のことでバカにされたらしい。まさかこんなことで落ち込むとは思わなかったが。

フレンドは小声で事情を説明すると滝壺は徐に扉に向かって声をかけた。

「大丈夫だよ、きぬはた。例え口調が変でも私はそんなきぬはたを応援してる」

ピシリと空気が凍り扉の奥から重い空気が漂ってきた。

「滝壺、結局それって追い打ちな訳よ……………」

## 外伝 とある虚無の完全調整（前書き）

本編がなかなか進まなくて、ちまちま書いていたネタです。クロスオーバー作品なので苦手な人は飛ばしてください。

本編終了後の話しになり、二万人の妹達生存ルートです。

続くかどうかは未定です。

## 外伝 とある虚無の完全調整

あの死亡フラグ乱立した事件から半年以上過ぎた。季節はもうすっかり夏である。半年も過ぎたから少しだけ髪も伸びた。今は束ねている。完全な自由の身というわけではないが、命の危険が無くなつてようやく手にした平穩？な日常を噛み締めている。

妹達は百人ほど学園都市に残ることになったが、その他は皆外部の研究所に行ってしまった。寂しいとは思いが仕方ないのも事実だ。薬物によって無理矢理促成された成長は確実に寿命を削っていた。時間にしてあと10年。決して永くはない時間を延ばそうとカエル先生が尽力してくれたおかげで治療の目処が立ち、そのため各地の研究所で治療を行っているのだ。治療の代わりに色々とデータを渡してギブアンドテイクの関係とは言え、カエル先生にはほんとに頭があがらないわ。

今日もそんな治療の日だった。

「うん、経過も順調だね。むしろ予想以上かもしれないね？」

「そう？なら早く治るかな？」

「そうかもしれないね。ただあと一、二年は継続して治療しないといけないよ？」

まあ直ぐさま治るなんて思っていない。けど思ってたよりは短いな。

「じゃあ今日も培養器での治療を行うよ。使い方は大丈夫かな？」

「うん、大丈夫。何度もやってるしね」

「じゃあ僕はもう行くからね。しっかり治療していくんだよ？」

「ありがとね、先生！」

カエル先生が去って、培養器の操作をする。準備ができると培養器に入るために脱ごうと服に手をかけた。

その時だった。異変が起きたのは。

「ん？」

急に目の前に白く発光したものが現れたのだ。見たこともない光景に思わず首を傾げてしまう。なにかスイッチを押し間違えたのか？あるいはなんかの能力なのか？取り合えず触ってみるか？意を決して触ってみた途端、急に中？から急に強い力で引きずり込まれた！

「なっ？！うわああああ」

目を覆うような眩しい光に包まれ思わず目をつむる。しばらく目を閉じていると何処からともなく声をかけられた。

「あんた誰？」

目を開けるとそこにはピンクブロンドの小柄な少女がいた。ブラウ

ス、スカート姿をみると学生ぽいが見覚えがないし、マントをつけているし。てかマントって。ハオーポッターじゃあるまいし。

「えーとミサカ00000号って言うんだけど」

「どこの平民？」

「ルイズ、サモンサーヴァントで平民を呼び出してどうする」

誰かが言うるとルイズと呼ばれた少女はやいのやいの言い合いを始めた。んーそれにしてもここは何処なんだ？いつの間にか外にいるし、大きな建物があるとはいえ、学園都市では滅多に見かけないようなレンガ作りだ。辺りも自然に恵まれており学園都市でお目にかかれる風景ではない。

もしかして オカルト的な現象に巻き込まれたので思い付いたのだが、まさかまた誰かに憑依したのか？思わず体を確認するがどうやら体は変わっていないらしい。この体の彼女の意識も感じられる。能力は 咄嗟に演算して確認してみるとちゃんと電撃は放てるようだ。

となると、これは転移？あの光のせいか？とにかく情報不足だ。他の妹達に連絡が取れないだろうか？ミサカネットワークは………大丈夫だ！まだ使える！

（メーデーメーデー。なんか白い光に触れたら知らないうちに外国に飛ばされたっぼいんだけど）

（お姉様大丈夫ですか主に頭が、とミサカは心配します）

（というか怪しいものには手は触れないようにしたほうがよいので



は、とミサカは忠告します)

(辛辣なお言葉ありがとう。取り合えず位置はわかるか?)

(！？地球上の何処にもお姉様の存在を確認できません、とミサカは驚愕の事実を報告します)

わお異世界転移かよ。学園都市が知ったら大変ですね。

(白い光に触れたら移動したのですね？とミサカは確認を取ります)

(ああ多分そうだと思います)

「ちょっとあんた聞いているの!？」

ルイズに会話を遮られた。

「ごめんごめん。でなにかな？」

「あんた、ほんとにゲートをくぐってきたの?!」

ゲート？さっきの光のことだろうか？

「ゲートがなにかわからないけど、白色の光に触れたら途端ここに飛ばされたんだ」

「じゃあ事故で飛ばされたのかもしれないわね。だって」

ルイズはそう言って俺の背後を指した。

「まだゲートは開いているんだもの」

さっき見かけたものと同じ光がそこにあった。

もしかしてこれに触れたら帰れるのか？と思って触れたがどうやら一方通行らしい。がっかりだ。

「お、またなにか出てくるぞ、また平民じゃないのか？」

「うっさいわね！あんたなんかよりよっぽど凄い使い魔出して見せるんだから！」

使い魔というのも聞き捨てならないが、どうやら回りはルイズのことを馬鹿にしている雰囲気だ。イジメカツコ悪い。

光の中からうごめくものがある。人型ぐらいだろうか。中から出てきたのは。。。

「お姉様無事でしたか、とミサカは役得とばかりにお姉様の胸に飛び込みます」

ミサカ2514号がそう言って飛び込んできたのだった。

でだ。光の中から出てきたのは彼女だけではない。まあ結論からいうと二万人。打ち止めを除く全妹達の前に白い光が現れたらしい。

中には作業中の妹達もいて、バンなどの乗り物に乗っていた妹達までいた。一部は俺の危機を知って武器まで持ってきているやつまでいる。広い場所ではあったが、二万人も集まればすごいことになるわな。東京ドームの動員数が五万人だから、半分近くは埋まるぐらいの人数だ。お互いに調整し移動しているとはいえ、ゲートから軽い渋滞を起こしている。どうにか落ち着いたのは一時間ぐらい経過してからだ。二万人が通ると光は役目を終えたかのように消えた。流星に回りの異世界人は啞然としていた。ただ一人その場にいた唯一の大人である中年のコルベールという男はその寂しい頭のように目を輝かせて見ている。

「ややつ！あの鉄の馬車はなんなんだ？乗っているのは君に似ているようだが、なにか知らんかね！」

「乗っているのは俺の妹で鉄の馬車は自動車と言って割と一般的な乗り物です」

あんまり興奮気味に問い掛けてくるから、律儀に答えてしまった。

「なんとあんなものが一般的に使われているのかね！？君の故郷は随分と凄いのだな」

コルベールの興奮度はMAXである。

（お姉様、気になることがあります、とミサカは報告します）

（ん、どうした？）

（ゲートと呼ばれる光、状況、ルイズ、それにコルベールと呼ばれる人物なのですが………非科学的ですが状況に酷似した物語を読ん

だことがあります、とミサカは記憶を掘り起こします)

(物語?)

(はい、ネットワークで情報を共有します)

ネットワークにその物語が共有される。……なるほど。確かに似ているな。確認してみるか。

「あのミスタ・コルベール。もしかしてここは トリスティン魔法学院?」

「ええ、その通りです」

疑惑が確信に変わった。ここは「ゼロの使い魔」の世界らしい。

二万とんで一人の使い魔候補を召喚したということで、大事になり学園長室に呼ばれることとなった。といっても俺とルイズの二人だけだが。ルイズの表情は複雑そうだ。ただ単純に怒っていたりはしていないようだが。

「で君達は一体何者なのかね?二万人も同じ顔の人間がいるのは不思議じゃからのう」

そう話かけてくる老人。この人がこの学院の学院長である。どうしたものかと考えたが、まあ正直に話すしかないか。物語の世界に来ましたってのは伏せるけど。

「つまり君達は人工的に造られたメイジのような存在なんじゃな」

「はい。学園都市では超能力　まあ魔法みたいな力を研究していて、平民でもメイジみたいなことができるようになるんですけど、その中でもトップクラスに強い人を素にして造られたクローン

えーとこつちだとスキルニルの人間版みたいなものかな。人間なので自分の意志はあるんですけどね」

スキルニルとは血を与えるとその相手の容姿・能力になる魔法の人の形のことだ。

「では君はスクウエアクラスのメイジということなのかね？」

スクウエアはメイジの能力の力量を表す。正確に言うと、この世界の魔法は火、水、土、風の四属性あって、魔法はその属性を一度にいくつ足せるかで性質、威力が変わってくるらしい。一つ使えるとドット、二つ使えるとライン、三つ使えるとトライアングル、四つ使えるとスクウエアとなる。つまりメイジの最高位はスクウエアなわけだ。

「実際スクウエアがどの程度かわからないのでなんとも。まあ、できることはこんな感じに電気　まあ雷を操る能力なんです」

バチバチと手に電撃を纏わせて実演してみる。同席していたルイズやコルベールは驚いて目を見開いているな。

「ダメ元で聞くんですけどやっぱり元の世界には帰れませんか？」  
物語に酷似しているだけであれば帰ることはできないだろうか。

「ふむ………難しいのう。サモンサーヴァントはあくまで召喚するのみじゃからな」

やっぱりダメか。多少落胆はするが、まあ無理の可能性が高かったもんなあ。

「どうして戻ろうとするのよ！ご主人様を置いて帰るつもり？！」

ルイズが叫ぶ。いつの間にか彼女の中では俺は完全に使い魔になっているらしい。とは言えこれは言いにくい。

「なによ！ハッキリ言いなさい！」

言い淀む俺に迫るルイズ。一つ溜息を吐き正直に答えた。

「人工的に造られた関係で俺達は寿命が短い。なので向こうでは延命治療を行ってたんだ。だからその治療ができないと　　10年以内に俺達は死んじゃうんだよ」

学院長室を退出する。あの後は二万人でどうやって過ごすか話し合った。一応使用人の空き部屋を使わせてもらったり、仮設の家を土メイジが建ててくれるらしい。ルイズの顔は青いままだ。まあ自分

の召喚で人の命を短くしてしまったとなると流石にキツいだろう。

「……………ゴメンなさい」

いつの間にか立ち止まっていたルイズがそう呟くように言った。

「まあ気にするなって。きっと帰る方法が見つかるさ」

原作では向こうの世界に帰る魔法があったはずだ。ルイズの真の力が目覚めればなんとかなるはずである。だからどっちかというところはさつき正直に話したことのほうが心配だった。

「あんな重い話しされたら誰だって罪悪感に駆られるわな。ゴメンなルイズ。まあ、世界には帰還する魔法があるかもしれないし、別の治療方法もあるかもしれないし。ただ俺達だけじゃこつちの世界ことわからないしルイズの力を貸してくれないかな？」

「……………私の力？でも私はメイジとしては落ちこぼれで……………魔法だって失敗するし、今日初めて成功したのよ」

「いや凄いさ。だって二万人も召喚したんだぜ？魔力か精神力かはわかんないけど、ああいうゲートを維持するのって大変なんじゃないの？なのにケロツとしてるしさ」

言われてハツとするルイズ。やっぱり維持にも魔力を使うらしい。

「きつとルイズは凄いメイジになる。だから力を貸して欲しい。俺達も以前は欠陥品だって言われて酷い目にあっただけでなんとかなったしね」

「……わかったわ。必ず元の世界に帰してあげる！」

「おう、その意気さー！」

こうして俺のハルケギニア生活が幕を開けたのだった。



## 番外一（前書き）

ほのぼのの回です。本編には全く関係ありません。

話は過去に戻り、最初の話は量産型能力者計画のとき、二つめの話は14～15話の間の話です。

## 番外一

とある日常の完全調整

スーパーマーケット。略称スーパー。

高頻度に消費される食品や日用品など取り扱う店のことである。

スーパーで手に入る食材は基本安価なものが多い。一重に安価といっても食品でも青物や肉・魚類などは特に季節などの定期的な要因やその他外的な要因によって値段が上下する。前日が安いからと言って今日が同じ値段とは限らない。また、店舗によってはタイムセールといった特定の時間に割引を行うこともあるのだ。

いいものをいかに安く買うか。これはチラシの入念な情報収集と店舗に足しげく通って培った経験がモノを言うのだ。

これは半額弁当を巡って争う。ことはなく、割と平凡に安いものを求めスーパーに通うとある少女の日常を描いた物語である。

憑依前は親が共働きということもあってか基本料理をしなければならぬ環境だった関係で多少なり料理ができた俺。今ではそのスキルを活かして妹達のご飯を作る毎日である。

……なんだかなあ。とはいえ、ここじゃロクな娯楽もないから料

理は楽しいし、無表情ながらも喜んでいらしく美味しいと言ってくれるのは嬉しいんだけど。そんなわけで、5人の妹達のために食材を買いに行かなければならないのである。

まずは情報収集だ。お店で直接見てもいいのだが、俺の場合はチラシを見て献立を考える派だ。端末からネットにアクセスし情報をゲットする。

学園都市は実験都市のようなものだ。それは超能力といった不思議能力だけじゃなくありとあらゆる分野で発揮されている。それは食料品も例外ではない。

例えば野菜。普通は外で育てたりビニールハウスで育てるイメージが強いだろうが、学園都市産の野菜はビルの中で生産を管理されているのだ。品種や生産方法の科学的な実験を行っているそうだ。実際の農業も科学的な見地は切り離せないだろうけど完全管理体制な製造は異質に見えるんだろう。

憑依前の記憶がある俺としてはそれって大丈夫なのかと思うけど食べてみたらとても美味しかった。無農薬とか有機栽培だとかのほうが美味しくて体にいいんじゃないかと思ってたけど、そんなことはないのかもしれないな。ちなみにそういった野菜も扱っているが、外部から取り寄せているためかやや割高になる。値段のこともあるが、安全性で学園都市産のほうがここでは人気があるみたいだ。逆に、学園都市産の野菜はまあイロイロいじくったものだから外部では受けが悪いみたいで、学園都市内部での販売のみになるが。

脱線したがとにかく食料品は安いので目移りしてしまう。元々貧乏性だからなあ。今日は卵と鶏肉が安い、特に卵は2パックでまとめるとなお安い！ふむ、卵と鶏肉か………親子丼とかいいな。甘辛い

かんじで。ことう味の染み込んだ鶏肉から染み出る肉汁、あつあつのご飯　　ゴクリ。

よし決まった。早速行こうか、スーパー（戦場）に。

で、スーパーに到着。店内には学生が多い。学園都市の学生の比率が高いのもあるけど、基本学生は寮生活で自炊が必要な人もいるからね。学生でもたまにメイド服な人も見かけるよ？なんかメイドを育成する学校があるんだとかないんだとか。元の世界ではメイドなんてメイド喫茶ぐらいしか見たことなかったけど、こちらでは割と珍しくないようだ。

そうそう珍しいと言えば前に小学生ぐらいの大人を見かけた。誤字ではない。本当に見た目が小学生2〜3年生みたいな大人だったのである。ビールを購入するとき身分証見せてたけど、店員の引き攣った表情は忘れられない。あの体で成人しているんだから、普通に歩いてても補導とかされそうだ。

お目当てのものをを見つけ、思わず取ったどー！とポーズを取る。なんか視線が集まった、少し恥ずかしい。気を取り直してお支払い。ちなみにカードで支払ってます。天井曰く必要経費で落ちるらしいけど詳細は知らん。無駄遣いには気をつけているけどね。

「不幸だ……………」

スーパーから出てすぐ、一人のツンツン頭の少年が溜息をついてた。右手にはさっきのスーパーのレジ袋。中身はぐしゃりと型が潰れてしまっている卵パック。どうやら落としたらしい。左手には小銭が見えるが、1パック買うにはお金が足りず、まとめ買いした1パック分の予算しかないようだ。

……………ふむ。まあ六人分ならば1パックあれば十分か。

「ありがとうございます！」

「いやいや気にしないで」

何度もお礼を言われると恐縮するなあ。しかし喜び過ぎじゃないか？泣くほど嬉しかったらしい。もしかすると苦学生なのかもしれない。無能力者は奨学金低いらしいなあ。

まあでも良いことした後は気持ちいい。鼻歌混じりに家路につくのが良かった。

とある下着の完全調整

「あのさ、聞きたいことがあるんだけど」

「どうしたんですか、00000号？と、ミサカは首を傾げて問い

ます」

「今度の実験で生まれる妹達の下着って芳川って女の人が注文してきたらしいんだよね」

「そつらしいですね」

「なんで縞パンなんだろうね」

「それは安かったのではないでしょうか。最も無地のほうが安いように思えますが、とミサカは疑問を抱きながら答えます」

「まあ結局選んだ人のセンスなんかね。……ちなみに俺達も縞パンなんだよね」

「芳川桔梗は今回の実験から参加したのですから、この縞パンは前の実験で別の人が選んだということですね？」とミサカは」

「……………天井が選んだらしい」

「……………」

しばらくとある研究員は縞パンフェチとまことしやかに囁かれるようになってくる。

### 第三十三話

鉄の塊を投げつけられバチバチと火花が散ってる端末。樹形図の設計者と交信する端末、衛星を操作する端末の両方がそんな状態である。いじってはみるがもう反応はしない。いくらなんでも壊れてしまったものは操作できない。

ああああああ　　ッどうすんだこれえ?! けどあの時避けなければ当たってたしな　　あ!? 磁力使えば当たらずに済んだんじゃない?..... 今更気付くとは。今多分リアルorzな体勢になってると思う。

「とにかく包囲されてるので早々にちよ..... 投降してください」  
どうやら一人だけではないらしい。こちらの銃撃を警戒してか通路の奥に銃を構えた男がいるようだ。建物の構造上、逃げ道はその道しかなく一戦交える覚悟をしなければならない。くそっ、これまでか? いやまだだ、考える!

端末が壊れ、樹形図の設計者の予言を送受信できなくなった今、予言を改竄することはできなくなった。そして既に衛星の軌道変更を行っている。衛星の操作も端末が壊れたため、軌道修正はできない(保安上、樹形図の設計者を載せた衛星を動かすことができるのはここ施設のみだからだ) 今から端末を修理し、軌道修正できれば問題ないだろうが、それらを2時間以内に直すのはかなり厳しいはずだ。このままであれば衛星は壊れるのはほぼ確定。樹形図の設計者による予想演算は二度と出来なくなるだろう。

この場合どうなる? 依頼中の実験の再演算はできない。となると実

験は停止するのか？それともあえてスケジュール通りに継続するか？このような状況で明確な指針であった樹形図の設計者が無くなれば、どのように事態が推移するかを先読みするのは難しい。その為の予言改竄作戦だったわけだし。

では直ちに投降し、端末を直して衛星の軌道修正を行ってもらおうか？……………それはダメだ。今回はあくまで奇襲だから成功したようなものだ。当然警戒され警備が厳重になるだろう。そうなったら今の戦力では突破は不可能である。それ以前に投降すれば脱走できるかどうか問題になるわけだが。

となると打てる手は一つしかない。樹形図の設計者を破壊し離脱する。時間を稼ぎことも視野に入れて。離脱できれば今後は研究施設を襲撃し、状況を確認しよう。

幸い向こうには銃撃に耐える能力者は一人だけらしい。空力使いの彼女を倒せば弾幕を張りつつ離脱しやすいだろう。

「お断りしますっ！」

じりじりと距離を詰め、それと共に雷撃を少女に目掛けて放つ。少女は咄嗟に横っ跳びして避けた。やはり電撃は通用するみたいだな。

「みんなあいつ倒して脱出するぞ！」

初めての能力者との戦い。自然と緊張が走りアサルトライフルを握る手に力が入った。なんとしても勝たなくちゃいけない。



絹旗の周囲を電撃が飛ぶ。妹達が弾幕を張りつつ時折電撃を混ぜ攻撃してくるからだ。いかにアイテムの中でも戦闘慣れしているとはいえ、決して広くない部屋の中で遮蔽物もなくかわし続けるのは不可能だ。必然的に絹旗は入口の壁まで追い込まれ、身を隠した。

今回の依頼は、実験動物の捕獲である。一応多少傷付けても構わないといわれているが基本死亡させてはならない。こちらの戦力を考える。人員はこちらのほうが上だ。間違いなく倍近くある。しかし、戦力となると心許ない。こちらはスキルアウト、無能力者ばかりだ。更に武器は拳銃のみ。時折応戦はするもののアサルトライフルの前には無力だ。そもそも実験動物がアサルトライフルなんて銃火器を持っているなんて話は聞いていない。味方が役に立たない以上自分が何とかするしかないのだが。

彼女の能力は「オフエンスアーマー窒素装甲」。大気中の窒素を自在に操る能力なのだ。先程の怪力は圧縮した窒素を制御し、扉を持ち上げたのである。銃弾が通用しないのもこの能力を利用したもので、とある研究により植え付けられた自動防御性によるものだ。本来能力者は能力を行使する際、意識的に演算しなければ能力は発動しない。しかしこの自動防御は本人の意識に関係なく攻撃された場合、自動的に圧縮された窒素の壁が展開されその攻撃を防ぐ。

堅牢な防御力を持つ能力なのだが反面弱点もある。当然の事ながら窒素を操る能力なので窒素がなければ能力が使えない。とはいえここは窒素がないわけじゃないし、最悪足りなければ液体窒素が入ったスプレーを念のため持ち合わせている。

そしてもう一点。能力が遠距離戦に向かない。能力の範囲が体から

数センチ程度しか展開できないため格闘戦向きなのである。それを補うために銃を持ってきているのだが、先程のように物を投げようにも近くに投げられそうなものもない。

そんなことで膠着せざるを得ない状況に陥った。時間を掛ければ味方がくるし、いつまでも弾幕は張れないはずだ。つまり時間稼ぎをしたかったのは絹旗達も同様だったのである。

この依頼、ギャラはよかったがとことん割にあわなさ過ぎだ。更に実験動物にはバカにされるし……、上司に愚痴を言いたくなる気分だった。

急に銃撃がピタリと止む。弾切れか？と思えば絹旗はゆっくりと様子を伺った。

見えたのは銃を構えた実験動物の姿　と放物線を描いて迫る普通の弾丸にしてはやや大きい筒状の弾だった。

思ったほどに爆音がするわけでもなく、爆発するってわけじゃないのね、グレネード。しかも着弾早いし。うん。まあ弾がきかない（キリッ）ってだから大丈夫だよな。うん。妹達はやり過ぎという言葉を知らないようです。もっとも着弾位置は大分離していたからあくまで吹っ飛ばして気絶させるのが目的なんだろうけど。妹達ハンパねえなあ。俺ドン引きです。

「今のうちに一気に押しましょう、とミサカは提案します」

うん気を取り直していこう。予備のマガジンもあるとはいえ、弾に

も限りがあるしね。

奥にいる男達もグレネードがあることを知って警戒してか顔すら出さなくなった。今のうちに入口まで歩を進める。少女は倒れていたが、どうやら無事らしい。ちゃんと息していた。ごめんね。…………ほんとなんか色々ごめん。

内心で謝りつつ、再度通路に意識を向け　　その刹那、左頬を衝撃が襲うのであった。

00000号を殴つたのは絹旗最愛だった。グレネードによる攻撃に気付き着弾する前に跳び退いたことで衝撃をある程度抑えたのである。直撃していれば瞬く間に意識を失っていただろう。彼女の能力では攻撃を阻むが一定以上の衝撃を完全に殺すことができないのだ。また仮にグレネードが直撃していれば窒素装甲が防ぐ限界値を超えダメージを受けていたかもしれない。そのため幾分か抑えたとはいえグレネードの衝撃が激しく、壁に吹き飛ばされ叩きつかれた時は、瞬間呼吸ができないほどだった。しかし意識を刈り取られるほどではない。痛みを耐えつつ密かに近付いてくるのを待っていたのである。

「ぐッ　　！」

「実験動物のくせにあまりこちらを舐めないでください。先程の暴言も含めて超倍返しです！」

他の妹達は00000号が側にいるため攻撃ができずにいる。絹旗としてはそれは好都合だった。先程は距離を詰められなかったが、これならばいくらでも近接戦闘に持ち込める。

00000号もただやられるつもりはない。凄まじい威力の殴打だったがなんとか耐え切った。そして電撃を放ち応戦しようとする

ができなかった。絹旗が距離を詰め攻撃してくるので、かわすことに必死になり演算に割く時間を与えてくれなかったのである。仮に隙をついて放てたとしても避けられてしまう。以前に身につけた超反応も使用するには多少時間がかかる。これは実戦慣れしていない00000号の致命的な弱点だった。

付かず離れないようにしながら猛攻する絹旗。なんとか唸る拳をかわしつつ隙をつこうとする00000号。お互いに一步も譲れない状況だった。

（このままだと押し切られる！下手すると電池切れになるか？どうする！？）

なかなか攻撃に移れずに焦る00000号。一瞬の気の迷いが動きを鈍らせた。戦い慣れした絹旗が見逃す訳がない。一撃で意識を刈り取ろうと拳が00000号の顔面を捕らえる！かわせない  
と判断した00000号は腕でガードした。

直撃し吹っ飛ばされる00000号。しかし絹旗は妙な手応えに顔をしかめた。殴りつけたにしては少し手応えがない。これはまるで

「しまった

」

そう先刻自分がしたことと同じこと。殴られる前に後ろに跳び衝撃を抑えたのだ。だから普通に殴られるよりも吹っ飛んだのだった。そしてそれは絹旗との距離ができたということ。

「させません！」

距離を稼いだとは言え、まだそこまで離れたわけではない。電撃を放たれてもかわす自信はあるし、今のうちに距離を詰めれば十分対応できる。再度一気に00000号との距離を詰めた。

「これで超終わりです！」

迫る拳、先程の巻き戻しのような光景。しかし今回は同じ結果にはならなかった。その時、絹旗は光に包まれた！

まばゆい光に絹旗は目が眩む。いかに窒素の壁も閃光を防ぐことはできない。まともにあの閃光を目にしては反射的に手で顔を覆うざるを得なかった。

00000号がしたことは電撃による目眩まし。電撃では当たらない可能性があるので目眩ましを使うことにしたのだ。

「ごめんな、負けるわけにはいかないんだ」

バチバチと音を鳴らし申し訳なさそうな声を聞いて絹旗は意識を失った。

## 第三十四話

手強い相手だった。それだけにこちらでも無事では済まなかった。腕には酷い痣ができ、辛うじて腕が上がる程度だし、攻撃を交わしつづけたためか肩で息をするぐらい体力の消耗が激しかったのである。悔しいが純粋な戦いの技量は相手の方が上だったんだろう。初めての能力者との戦いだ。むしろ勝てたのが奇跡に近い。年下の少女に手をかけるという意味でももう二度と戦いたくない相手だ。

しかしどうやら一番強い敵だったようで、相手の戦意は喪失したようだ。抵抗らしい行動が一切ない。これならば十分にここを離脱できる。

退路を確保しつつ出口に向かう。それにしても重要施設が襲撃されているのに追っ手しかこないのは何故だろうか？本来ならアンチスキルが出ばってきてもおかしくはない。彼らがいればこちらも危なかったはずだ。もしかすると上層部が妹達の襲撃を知り、クローンを公表できないから出動を取りやめさせたのか？それならば好都合だがな。まあそんな都合よくはないだろう。じゃあ残る可能性は……。

入口には多数のアンチスキルが横列に並んで銃を構えつつこちらを伺っている。やっぱり入口封鎖か。銃は非致死性のゴム弾とかだよな………多分。追っ手が捕獲に失敗した時の後詰めとして配置されていたんだろう。

しかしこれはどうしたもんだか。地下への通路はフェンスの向こう側、内側をこうもぐるりと囲まれてしまっただけでは強行な手段に訴えないといけない。………しかしそうすると今までのように極力相

手を傷付けなくて戦うのは無理だ。それはこちらにもいえることだろう。彼らは無能力者とはいえ治安維持部隊だ。対能力者の戦闘経験も豊富だし、訓練を積んでいる。そして十分過ぎるほどの数の差があるのだ。まともに戦えばこちらもただでは済まない。できるなら奇襲するような形でできればいいのだが。入口には隠れるような場所や遮蔽物になりそうなものは殆どない。それにさっきの閃光技は瞬間的な効果しかない。ここにいる全てのアンチスキルの目を眩ませるのは確実性に乏しいし、立ち直りが早ければ、逃げている最中に後ろから撃たれる可能性もある。

「お姉様、これを使ってはどうでしょうか、とミサカは提案します」  
そういつて34号が出した物は筒状の手榴弾みたいなもの。たしかこれは……………」

「これはスモークグレネードです、とミサカは説明します。元は実験で使われる予定だったものです。あまり有りませんが」

「なるほどこれを使って脱出するわけか」

こくりと頷く34号。スモークグレネードによる煙幕の中フェンスの向こう側に行くのは難しいことではない。電磁波の反射を利用してある程度ならどこに誰がいるのか知覚できるからだ。最も人物を特定するとなると大分近付かなければならないが、今回はそのまでの精度は必要ない。何処に誰がいるか把握しつつその間を一気に駆け抜ければいいだけのこと。ひたすら逃げの一手である。

顎で合図しつつ、意図を察した三十四号がスモークグレネードを数名の妹達に渡し、投げるタイミングを計る。

3、2、1、0  
！

スモークグレネードはアンチスキルの元にほうり込まれた。

パンと小さな破裂音が鳴ったあとプシューと煙が沸きだし騒然となるアンチスキル。始めのうちは銃で応戦してきたものの煙で視界が遮られた状態ではそうそう当たるものではない。勘なのか、或いはかすかな音を頼りにしているのか度々射線を修正しているようだが、それでも当てるには至らない。どんどん間合いを詰める。

「撃ち方やめ！これ以上は同士討ちになるじゃん！」

アンチスキルのリーダーらしき女性の声が響く。俺達はすでにアンチスキルの目と鼻の先まで紛れ込んだことに気が付いたらしい。こちらには手出しできないうちに人混みと煙の中を駆け抜ける。

想定通り簡易のリーダーのような知覚能力のおかげで煙幕内ではこちらにアドバンテージがある。人がいない隙間を縫うようにしながら避け、時折電撃を放ちつつ活路を開く。煙から抜け出れば、幾人かのアンチスキルが煙から逃れようとしていたが妹達によつて無力化された。ここまでくればフェンスまでは一気にいける。地下に逃げ込むのは容易だろう。妹達も無事辿り着いたようだ。……あれ、おかしい。十人いない。半数もの妹達がいらないなんて。まさか先程の銃撃にやられたか？！思わず振り返るが煙に阻まれて状況はわからない。だがすぐにネットワークから反応があった。

（お姉様、先に逃げてください、とミサカは言います）

な　　。　一瞬時が止まる。

（ちょっと待て、このまま逃げればいいじゃないか、どうして!?!）



（お気づきだとは思いますが、このまま逃げたとしてもアンチスキルが追ってきます。確実に逃走するならばここである程度彼らを足止めするのが適切です、とミサカは現状を分析しつつ判断します）

足止めのためにわざと残ったのか！？十人も残ったのは、事前にそうするように打ち合わせしていたんだらう。次第に煙幕も勢いを無くしており、無事だったアンチスキルが体勢を立て直している。追いついてくるのも時間の問題だ。

（だったら俺が残れば）

（今のお姉様では、怪我もあり足手まといにしかありません、とミサカは客観的な意見を述べます。現状私達の何名かが残り足止めするほうが逃走の成功率が高いです、とミサカは考えます）

（でも！）

作戦が失敗し見通しが立たない今、捕まればどうなるのかわからない。追っ手が投降を呼びかけていたことからすぐに殺されることはないかもしれないが、あの狂気の実験の犠牲になるかもしれない。

（大丈夫です。もし捕まってもお姉様がこの実験を阻止して助けてくれることを信じていますから、とミサカは心情を吐露します）

（それに最大限逃げる努力はするつもりですから、とミサカは諭すように告げます）

（ だから行ってください）

次々にそう告げる妹達。……………。

(……………わかった。先に行つて……………待つてる)

その場に残つた妹達は十名。フェンスを越えたところで、抗戦しはじめたのだらう、背中越しに様々な音が響いた。唇を噛み締め、地下に向かう。もう振り返らない。振り返るわけにはいかない。ただ突き進むのみだ。

皆のおかげで俺を含めた残りの妹達は無事に病院に戻つてくることができた。しかし、あの場に残つた十名は結局一人も戻つてくることはなかった。

## 第三十五話

明け方まで病院で彼女達を待った。カエル先生には身体のことを含めて心配かけてしまったが、我が儘をいってでも朝まで待ちたかったのだ。しかし彼女達が帰ってくることは無かった。今自分はとも酷い顔をしてるだろう。カエル先生が見かねて睡眠導入剤を使い強制的に眠らせようとしなければ、多分ずっと茫然としたままだっただろう。

起きたのは昏過ぎだった。

「おはようございますお姉様、とミサカは挨拶します」

「みんなは………?」

2号は首を振った。やはり彼女達は………捕まったのだろう。あの時の判断が間違いだったのだろうか無理にでも一緒に逃げるべきだったんじゃないのか、けれど彼女達がいなければ自分達は逃げられなかったのでは　と自問自答する。

「お姉様」

自責の念に駆られそうになったところで4号に声をかけられ思考を止めた。

「ん、どうした?」

「妹達の状況と樹形図の設計者はどうなったのか調べていたのですが、昨日の襲撃事件も、樹形図の設計者の衛星のことも報道されて

いないのです、とミサカは報告します」

「……………あれだけ派手にやったけど情報は規制されているのか」

お姉様もかなり派手に施設の襲撃を行っていた。けれど襲撃の事実は無かったことになり、施設は経営破綻のために閉鎖になったと捏造されたことを聞いている。恐らく実験に関わる総てを上層部が隠蔽しているんだろう。しかし、襲撃犯である妹達がクローンのために公表できないというのならわかるが、それならば襲撃犯の情報だけを規制すればいいはずだ。なにか別に理由があるんだろうか。それに衛星が墜落したのなら外部の日本やら他国だってそれを観測ぐらいはしていそうなんだが。学園都市が外部の情報を規制しているのだろうか？それとも外部が規制している？或いは衛星は墜落しなかった？うーん、これに関してはなんとも言えないな。

しかしこちらにしてみれば報道されないのは不都合である。なにしろ樹形図の設計者を載せた衛星はちゃんと墜落したのかすらわからないからだ。情報送受信センター或いはクローン関連の研究所に行つて情報を得なければならぬ。流星に昨日の今日で情報送受信センターに行くのはかなりの危険が伴うだろう。それに計画がどのように変更されたかも調べなければならぬ。となると研究所襲撃しかないか。前回と同じ規模なら余程のことがない限り人数が減つた今でも十分対応できる。前回と違つてこちらには武器もあるからだ。昨日程の強い能力でも現れない限りは。

……………本当は今すぐにでもあの場に残つた妹達を助けに行きたい。行きたいが、現状彼女達を助ける方法がない。彼女達の身柄はアンチスキルが拘束したとしても、上層部によって研究所に引き渡されるはず。ならば根本的な問題を解決することが先決だ、焦るな。

「まずは樹形図の設計者と実験がどうなったか調べよう」

「わかりました。ですがお姉様、今日は休まれてはいかがでしょうかとミサカはお姉様の身体の状態を見ながら気遣います」

このところ連日イベント尽くしだったからな。けれど研究所脱走してからまだ五日もたつてないんだぜ。確かに多少疲労しているかもしれない。昨日負った怪我も痣はまだ残るし患部に触れば鈍痛があるが大分ひいている。

「いや時間との勝負だから、ここは調査を優先しよう。みんなも体調は大丈夫か？昨日のこともあるし、あまり無理はしないでくれよ」

問題ないと答える妹達。よし、早速襲撃と行きますか！

人数は十人に減ったが前回とほぼ同規模な研究所の襲撃は呆気なく完了した。……少しは学習しないのかと思わずツッコミたくなつたが、まあそのおかげで情報が得られるんだからどうでもいいか。ついでに妹達は弾薬の補充までやってる。その間に調査調査ーっと端末に入っていた計画の報告書を見つける。昨日の日付の報告書を開いた。

「一方通行と超電磁砲との想定外の戦闘により計画に不具合が発生していないか、またスケジュールに変更が必要か樹形図の設計者で再演算を行うよう依頼中。」

しかし樹形図の情報送受信センターを逃亡中の妹達によって襲撃され、樹形図の設計者を搭載した人工衛星「おりひめ1号」は衛星軌道上を離れ、大気圏に突入に落下したため再演算が不可能になる。

襲撃を行った二十名の妹達のうち十名の身柄は警備員によって拘束されたが、残る十名は現在も逃走中である。拘束された十名は治療後搬送する。

現状計画の継続が困難な為、実験の開始は延期。今後の経過によっては計画の凍結を検討する。なお一七八三四体の妹達の製造は継続するものとする』

衛星が落下した　　目標は半分達成したのか。それに彼女達が怪我を負ったようだが生きている。微かな安堵。昨日の襲撃は無駄ではなかったのだ。その上計画の凍結の話も出ている。偽の予言が必要だと思ったが、どうやらなくても凍結しそうである。このまま凍結すれば妹達は解放される！……襲撃犯の俺や襲撃した妹達はただじゃ済まないかもしれないけど。それでも今いる妹達、これから生まれる妹達は実験によって死ぬことはないだろう。

ん？　　報告書は一つだけではないらしい。今日の日付の報告書？ 新たな報告書に目を通す。

『衛星軌道上より墜落した衛星は大破、一部が太平洋沖に着水。樹形図の設計者を回収するため第一次搜索隊を派遣。発見された残骸レムナントの一部を回収』

残骸！？ 大気圏で燃え尽きた訳ではなかったのか？ 続きがあるので読み進める。

『分析の結果、残骸の状態は良好であり、樹形図の設計者の再構築は可能であると判明。万全を期する為、復元した樹形図の設計者で再演算後、計画を実施する』

そんな！樹形図の設計者は復元不可能ではなかったのか？分析結果の詳細を読むと残骸は樹形図の設計者の中枢であり、外殻に守られた為無事だったようだ。それで樹形図の設計者の再構築が可能であると判断されたらしい。くそ、想像以上に外殻が硬かったのか。残骸が落ちてくる可能性が無かったわけじゃなかったが、まさか無事な状態で落ちてくるとまでは思わなかった。衛星の安全設計、万全すぎるだろ！

残骸は未だ回収中であるらしいが、全ての残骸を回収するために回収部隊が緊急で動いているようである。どうやらこの件はまだ終わりを迎えないようだ。これからのことを考えて俺は頭を抱えた。

## 第三十六話

お姉様が目を覚ました 病院に戻ってきてしばらく経った夜遅くの事だ。立て続けに暗い話ばかりだったので多分精神的に参っていたんだろうか。思わずホロリと涙が出たのは仕方ないことだと思う。無表情な妹達がなんだか温かい目を向けてきたことに恥ずかしさを感じて赤面しながら泣いてないんだと訴えた（言い訳した）のはあまり思い出したくないことだ。夜分遅くのことだったのでその場では会えなかったが、一日置いて面会が叶った。

「そう。寝ている間にそんな状況になってたのね」

お姉様は会ってすぐに今の状況を聞いてきた。樹形図の設計者に偽の予言をさせ、破壊する為に情報受信センターを襲撃したこと、偽の予言は失敗したが樹形図の設計者の破壊したこと、逃亡時に妹達が捕われたこと、破壊したことで計画凍結が検討されていたこと、しかし樹形図の設計者の残骸が見つかり樹形図の設計者が再構築され計画がまだ続きそうなこと。余すことなく話した。

「じゃあ残骸を壊せば、計画を頓挫させることができるのね」

「検討つてなつてたけどね。可能性はあると思う。樹形図の設計者が立てた計画だけに、樹形図の設計者がないと想定外の自体に弱いのかも。あと問題は」

「残骸の輸送日時や搬送先、搬送ルートがわからないことね」

残骸はまだ太平洋沖で回収中らしい。再構築となると学園都市で行うだろうけど、いつになるかどうやって持ち込まれるのかわからな



い。

「なら私の出番ね」

「出番ねって、お姉様。身体もまだ万全じゃないのに！」

まだ身体を動かすのも厳しいはずだ。それだけの重傷を負ったのである。

「大丈夫よ。流石に動き回ることにはできないけれど、能力を使うのは問題ないみたいだしハッキングして調べるぐらいならできるわ」

お姉様のハッキング能力は能力を利用したものだから、俺よりも数段上だ。だから調査するとなるとお姉様がいると心強いが身体のことを考えると素直に頷けない。

「まあ任せなさい。……………それに少しは姉を頼りなさい」

お姉様……………。

「ありがとう、お姉様」

そう返すとお姉様ははにかみながら微笑んだ。

どうやって調べようか思い付かなくてどこか襲撃して情報を得ようとしていた俺に呆れ顔のお姉様はジャッジメントやアンチスキルのシステムやら衛星の監視カメラをハッキングして情報を集めてくれた。そっかー、学園都市で一番情報が集まるのはそこだね、うん。そのこの脳筋がって視線止めて……………。そうしたハッキング行為による情報収集を重ね、残骸の情報が入ったのは二週間経過した頃の

ことだった。

研究所に向かう一台の車。その後部座席にはキャリーケースが鎮座している。その中には樹形図の設計者の核となる残骸を載せていた。残骸はサルベージに時間がかかり学園都市に持ち込まれるのが遅れていたのである。運び込まれた残骸は樹形図の設計者の再構築のために研究所に送られる途中なのだ。

残骸の運送中、学園都市に持ち込まれるまでに幾度か襲撃を受けた。表面上樹形図の設計者はまだ健在で衛星軌道にあることになっている。だが樹形図の設計者を狙っていた各国・組織は墜落を観測していた。学園都市側が事実を隠蔽したことで残骸を狙い動き出していたのである。残骸を得ることができれば、数十年も先進した科学力を持つ学園都市の技術の一端に触れることができ、なにより学園都市最高の頭脳と称される超高度並列演算器・樹形図の設計者が再現できるかもしれないのだ。そのため裏側では残骸を巡り激しい争奪戦が行われていた。

そんな攻防を凌ぎきり学園都市内に持ち込まれた残骸なのだがその割には今は護衛もなくただ残骸を載せた一台のみ。外部勢力を攪乱するために様々な欺瞞情報を流し目立たぬように行動しているためである。正しい情報を知るのは極少数の者だけであるし、外部勢力はこの残骸の位置を知り得ない。

その残骸を乗せた車の対向車線から車が強引に割り込んできた。そしてそのまま進路を妨害するように停止する。輸送中の車は急ブレーキをかけざるを得なかった。後方にも車が停止し、挟んだ車の中からスーツ姿の男達の手には拳銃を持ち次々と降りる。その拳銃は学園都市製の高性能なものではなかった。学園都市内でこのような銃を持つものはいない。持つとすればそれは学園都市のものではない。つまり彼らは外部組織の人間だった。

彼らの組織「科学結社」は学園都市内に協力者がいた。その協力者はとある上層部と密接に関わっているため正確な情報を掴める。だから他の組織を出し抜き、欺瞞に躍らされず本命を引き当てることのできたのだ。運転手達を引き出し残骸を強奪しようとする男達。科学結社の手に残骸が落ちようとしていた。

学園都市に残骸が持ち込まれた情報を掴んだ後ルートを特定した。情報が錯綜しており恐らくは真のルートを隠すためにダミー情報が流れているらしく、お姉様がいなければ正しい情報が掴めなかっただろう。で妹達全員で待ち伏せしてるんだが……………。

「遅くね？」

すでに通過予定の時間を経過している。この一体は信号を操作して意図的に渋滞を起こしている。だから見落とした可能性はない。もしかすると別の問題が発生した？情報操作が行われたことを考える。と何者かが残骸を狙っているはずだ。そいつらに襲撃を受けた可能

性がある。外部組織に持つていくこと自体は問題はないかもしれない。要は樹形図の設計者によって実験の再演算されなければいいのだから。しかし持ち去られた場合、学園都市が暗部を繰り出して取り返されたらまずい。それ以前に、襲撃によって搬送ルートが変更されてしまう可能性もある。やはり確実に潰したほうが身のためだ。待ち伏せをやめ、ルートを遡る。見逃すわけにはいかないの地下は使えない。追っ手に捕まる前になんとか目的を達成できればいいんだけど。

……これがフラグになったのかは定かではないが、そろそろと辺りを囲む男達。どうやら間に合わなかつたらしい。こんなタイミングに追っ手なんて。

「どうやら樹形図の設計者を狙っているのは本当みたいだな」  
スーツ姿の男がそう呟く。どうやら網を張っていたらしい。

「あー邪魔しないで欲しいかな。できれば無駄に消耗しないでいきたいんだけど」

演算を開始し、身体にバチバチと火花が起る。脅迫という名の説得です。お分かりでしょうか？

「いやいや、そういう訳にもいかないさ。せつかくのご対面もあるしな」

ご対面？どういうことだ？男達の背後から新たな人影が。その姿には見覚えがあった。妹達。そう、そうだった。俺達の探索には彼女達も参加していたんだ！

この子達は俺達のことをどう思っているんだろう。ただの脱走者、捕らえるべき対象なんだろうか、わからない。けど俺は皆を助けたいんだ。だからなんとかして説得しないと。

「みんな聞いて」

「捕まえろ」

言葉を遮るように男が号令を発した。妹達の身体からバチバチと火花が沸き起こる。くっ戦うしかないのか!?

## 第三十七話

スーツ姿の男や他の追っ手やつら、そして研究所に残っていた妹達と対峙している。妹達は臨戦体制だ、くそっ戦うしかないのか!? 身構えつつ妹達を見る。目が合った瞬間、彼女達は攻撃を開始した。

男達に向けて。

「はい？」

思わず間の抜けた声をあげてしまったのは仕方ないだろう。緊張していた空気が霧散したのに合わせて、思考ができなくなったことで火花も掻き消える。

無防備な状態で電撃を受けたことで、瞬く間に沈黙させられてしまふ男達。ふうと一息ついた妹達。一体なにが起こってる？

「お姉様、大丈夫でしたか？とミサカは問い掛けます」

お姉様と呼ばれるようになったのは、逃走した日のはずだ。だからお姉様と呼ぶ妹達は一緒に逃走した妹達だけのはず。しかし彼女達の検体番号は逃走した妹達とは異なる。

「え？なんで？その呼び方？」

「お姉様が脱走した理由は知っています、とミサカは答えます」

「だからずっとお姉様を探していました、とミサカは無事にお姉様を見つけられて安堵します」

つまりそれって。

「他の研究所に残った妹達も、お姉様が去られてから造られた妹達も全てを知っています、とミサカは説明します。あの日お姉様が言った言葉も全て」

（ミサカは計画の為に造られた模造品です。実験動物に過ぎません。実験が無くなれば、ミサカは存在理由がありません、とミサカは答えます）

（だったら俺の為に生きてくれ！）

（……………それはどういう事でしょうか、とミサカは問い掛けます）

（前にも言ったが、お前達がいなくなるのは辛い。この計画でお前達の命が奪われるって考えたら胸が張り裂けそうだ。そんな気持ちになんてなりたくないんだよ！）

（だからずっと傍にいてくれよ！頼むから！）

……………あれかつ！あの時は一杯一杯だったからそこまで感じなかったけど目茶苦茶恥ずかしいこと言ってるじゃん！てかなんで生まれていないはずの妹達まで！？

「ネットワークを利用して記憶は共有しています、とミサカはお姉様の表情から推測して答えます」

（もっともそのせいで全ての個体がお姉様に興味を抱いてしまったようですが、とミサカは心の中で呟きます）

そうか、そういうネットワークの利用方法があったよね。あははは

は、もう開き直るしかねえ！

「そして全ての個体がお姉様と一緒にこの実験を凍結させたいと願っています、とミサカは思いを伝えます」

「ですから、妹達は皆生きるために全力でお姉様を支えます、とミサカは決意を表明します」

……………そうか。そっか！生きる為に 『生きたい』とハッキリ言った。妹達がそう望むなら姉として頑張らなきゃな！

「全部知っているってことは、残骸を壊して実験を頓挫させようってことも」

「私達が知っていることは情報送受信センターで残った個体から共有した範囲までです、とミサカは報告します」

樹形図の設計者を破壊する意図までは知っているか。

「彼女達は無事か？」

「はい大丈夫です。流石に研究所に監禁されましたが、怪我も治っています、とミサカはこたえます」

よかった。これを無事に終わらせて早く解放してあげないと。

「推察するに残骸を破壊すれば計画を凍結させられるのでしょうか、とミサカは確認します」

「ああ、その通りだ。残骸を乗せた車がくるはずだったんだけどま



だきていないんだ。もしかすると外部の組織に襲撃されて奪われたか何らかのトラブルに巻き込まれたらしい。だから今から探しに行くよ」

「そうですか。でしたらこの近辺にいる他の個体も一緒に探させてはどうでしょうか、とミサカは助言します」

どうやら探索のためかなりの妹達が来ているようだ。外に出る時は基本バレないようにネットワークを遮断してたからなあ。電磁の膜を解きミサカネットワークに接続した　　久し振りで懐かしく感じる。二万人の妹達と繋がったことであまりの多さに思わず苦笑いしてしまう。それにしても二万人の妹達が、五十人だったころでは考えつかないほど増えたんだなと感慨深いものを感じてしまう。

初めてこの世界に来た時は自分の状況に愕然とし、死亡フラグを回避しようとした。それが妹達に感情を芽生えさせたい、妹達も助けたいと願うようになってこんなところまできている。あと少しだ。

終わらせよう、この実験を。

ネットワークを駆使して妹達の目撃情報をまとめると、二十分前に残骸を乗せた車からキャリアケースを強奪し逃走した車があり、無線で運転手が誰かに連絡していたそうだ。そして十分前に渋滞の中、車を取り捨ててキャリアケースを運んでいる怪しい男達がいたらしい。なんとか捕まえなきゃいけない。場所は今の所からそう遠くは

ないので目撃情報を頼りにみんなで手分けして男達の足取りを追う。  
そして男達を見つけた。

だけど、なんで。

巻き込まれたのかはわからないが赤髪の少女が辛うじて立ち上がる  
ものの満身創痍だ。

どうして、こんなところに。

いずれも酷くやられた状態であり、少女も耐え切れずにはったりと  
倒れる。

何故、学園都市最強のレベル5、一方通行がいるんだよ！？

「あん？ツたく今度は超電磁砲かア？……いや、オマエクローン  
の方がア」

「なんでお前がこんな所にいるんだよ！？」

「コレが必要だから回収しにきたンだろうが」

一方通行の手にあるキャリアケース。どうやらこいつが残骸らしい。

「そいつを何処に持って行く気だ？」

「ああ？クソだリイ依頼をしてきたのはソツチだろうが………聞い  
てねエのか？暗部がアテになンねエし実験を始める為にコイツが必  
要だから奪回しろと言ってきたのは teme ンとこの研究者が………

オイ、もしかしてオマエ逃げ出した方のクローンか？」

「……………」

「テメエのせいで、実験が遅れてるんだろ。これで実験が始められるじゃねエか」

ニイツと凶悪な笑みを浮かべる一方通行。一歩一歩ゆっくりと近づいてくる。プレッシャーは今まで対峙した相手とは比較にならない……………逃げられそうにない。キャリーケースだけでも壊したいが一方通行が阻んで狙えない。妹達を呼ぶ？束になってかかって勝てるのか？

くそ。くそつ、糞！クソツ！！ここまできてどうしてこんな結果なんだよつ！！！！

砥信さんは危険を冒してまで俺達の命が危ないことを伝えてくれた。お姉様はこんな強い相手に立ち向かってくれた。カエル先生は俺達を匿って助けてくれた。そして妹達は「生きたい」と願った。

それだけの思いがこんな奴に、こんな奴らに踏みにじられていいのか！？

認めない。認められるか！こんな奴に蹂躪されるつもりはない。それでも立ち塞がるというのなら。

「……………てやる」

「あア？」

アサルトライフルを捨て、拳を握りしめる。沸々と沸き上がる闘志。それに呼応するかのようにバチバチと火花を散らす。「オイオイ、超電磁砲でも勝てないのに雑魚のオマエが学園都市の頂点に敵うと思ってるのか？」

たしかにお姉様でも勝てなかった。レベル4の俺じゃ勝算なんてないかもしれない。けれどそれではいそうですかと諦める気はない。一方通行が立ち塞がる壁だというのなら。

「超えてやる！」

さあ、超えようか。学園都市最強ってヤツを。

## 第三十八話

「デカイ口叩くじゃねエか、学園都市最強に向かってなア」

心底楽しそうに嗤いかける一方通行。

「なにがそこまで楽しいのかわからんが、負けたら返上だな。最強の」

「ハア？オマエ本気で勝てると思ってんのか？人形って頭の出来も悪いンですかア？」

嗤いをやめる一方通行。

「負けないから最強なんだよ」

ダツと襲い掛かって来る一方通行。その速度は並の速さではない。そのまま俺を掴もうと手を突き出してくる。けれどこちらの準備も十分にできている。早く動けるのはなにもお前だけじゃないんだ！

「な？」

能力を利用した超反応で一方通行に触れないようにかわす。本来ならこのまま捕まえて投げ飛ばしたいぐらいに無防備に延ばされた手だが、一方通行の能力はベクトル操作。触れることはできないだろう。それにしてもコイツ……………。

触れようとまた無防備に伸ばしてくる手をかわしつつ距離を取る。徐々に距離を開けた所で一気に一方通行の脇を前転しつつ逃げた。

実際に対峙してみてもなんとというか単調な攻撃に拍子抜けしてしまう。何て言うか雑だ。防御なんて考えていない捨て身なんだが無造作で大雑把だからな。やたら威圧感のある素人といったほうがいいかもしれない。少なくとも近接戦闘においては訓練を積んだ者で避けることに専念すればかわすことができるだろう。最も洗脳装置で知識があってもさほど格闘の訓練を行っていない俺が避けられるのは超反応のおかげだが。

一方通行が手近なビルの壁をダンと叩く。……一体なんのつもりだ？ドン、ダンとなにかをぶつけられたような音いや衝撃が壁を伝っていく。まるでなにかを狙うようにそれは移動していた。何を狙ってるんだ？なにかが割れるような音　俺の頭上にガラスが降り注いだ。

ふざけんな！横っ飛びでかわしたが地面にぶつかり跳ね返った硝子の破片が太股を掠める。あの衝撃はビルの窓を破壊するためのものだったのか。

しかしモヤシは所詮モヤシ　といってもそんなマイナス要素を帳消しにして余りある程ベクトル操作は厄介だ。こちらが手出しできない以上防戦一方なんだから。恐らくコイツの戦いのスタイルは強力な能力に頼ったものなんだろう。ベクトル操作という汎用性の高い能力は奇抜で多才で強力な攻撃、圧倒的な堅牢さを誇る防御の攻防を兼ね備えたものなんだから身体を鍛える必要がない。

キャリアケースはずっと護られたままだ。狙うとしても射線上にはいつも一方通行がいる。蹴りが地面を削り、時折周囲の物が飛び交う、そんな一方通行の攻撃のなかでもなかなか隙を伺えない。

今無事なのもあいつが本気を出していないからに過ぎないからなんだろう。雑な近接戦闘はともかく、本気で初っ端から一気呵成に攻め続けられたらこちらはどうしようもないのだから。侮ってくれてるほうがこちらは助かる。

しかしこの拮抗状態もいつまでもつかわからない。こちらから仕掛けないといつかは電池切れで負けるだろう。

まずは反射を確認してみるか。超反応は同時に使いこなすことはできないため止める。電撃の槍とか威力の高いものが反射されたらことだ。ポケットからコインを取り出す。以前訓練室で超電磁砲を練習してたやつだ、それを一方通行に加減して投げつけた。コインは接触したと思うぐらいまで向かっていくが、なにかに阻まれて跳ね返ってくる。成る程、これが反射か。見えない薄い膜みたいなものが一方通行を覆っていて、そこに物が接触あるいは入り込むと反射される。そういったところか。イメージはこの間の空力使いの少女に似ているかもしれない。だが反射膜は非常に薄く、あらゆるベクトルを操作する以上、電撃なんてきかないだろうが。反射を通り抜けるものはせいぜい酸素やら光やらだけだろう。酸素を奪えたらいいが速効性的手段がない。

ベクトルとは量と方向を合わせた方向量のことだ。つまり反射はこの方向を逆向きにさせることなんだろう。……！何度か繰り返しているうちに一つだけ思いついた。ただこいつは賭けだ。

「なんだ？オマエやる気あんのか？それとも早くも戦意喪失ですかア？」

挑発してくる一方通行。　　コインじゃだめだ。辺りを見渡す。  
エアコンの室外機が目にとまった。磁力を操作し、壁から室外機を

引きはがす。そしてそのまま室外機を投擲　　！室外機は一方通行にぶつかると反射され、そのまま地面に激突しグシャリと潰れバラバラになってしまう。よし、弾はできた。

今度はバラバラになった室外機の残骸を磁力で操り自身の周囲に集める。ネジや鉄塊が浮いている異様な空間が出来上がった。そしてそれらを一齐に一方通行にぶつけた。一見すればさっきの攻撃とさほど変わらない。一方通行に向かう鉄塊の弾。またか　　と失望した顔の一方通行。当然動じず反射で受けることを選択する。だが違うのはここからだ！

次の瞬間、一方通行は顔を歪ませた。

「なん……………だと……………！？」

鉄塊の弾の一部は、一方通行の腹部と頭部を直撃し、奴は倒れた。

いてててて。咄嗟に身を守ったが跳ね返ってきた鉄塊にぶつかってしまった。よろめきながらも起き上がる。一方通行は倒れたままだ。暫く様子を見るがピクリとも動かない。……………やったのか？

勝ったという実感がどうにも沸かなくて一瞬呆けるが、すぐさま目的を思い出す。残骸を壊さなきゃ。キャリアケースを守る相手はいない。キャリアケースに手をかけ中身を確認すると中には基盤のよ



うなものが入っていた。これが残骸。これに電撃を流せば機械なんてひとたまりもないだろう。

手を伸ばし取ろうとそう思った途端世界が反転する。へ　　？あ  
あ、自分が回転しながら宙を舞っているのか。なんて呑気に考えながら地に叩きつけられた。激痛が襲い頭がクラクラする。

巻き起こされたのは風。それに吹き飛ばされたようだ。こんなことができるのは、一方通行か。倒れたままだけどいつの間にか片手を空にかざしている。大気の流れを操って風を巻き起こしたとでもいうのか。なんて出鱈目な奴……。倒したつもりだったが今の俺の力じゃ、勢いが足りなかったか。

動かないといけないのに動けない。想像以上にダメージは大きかった。そうした間にも一方通行が立ち上がり、こちらに向かってくる。ああ逃げないとまずいのに。奴はなにかを叫びながらひたすら俺の身体を蹴り飛ばす。その度に悲鳴を上げるが次第にそれもできなくなっていく。視界がぼやけた。当たり所が悪かったのかな。ああ畜生。立ち上がりたいのに動かない。まだやりたいことがあるのに、やるべきことがあるのに倒れるのか。

みんな、ごめん。

### 第三十九話

気がつくと思議な空間にいた。辺りにはなにもない。たしか自分は一方通行にやられたはず。だが自分の身体には傷一つない。なんでだ？もしかして死んじゃったのか？まあ憑依で異世界に行ってたんだから、死後の世界があってもおかしくはないけど。

負けたか。負けたら、実験が始まってしまふ。妹達二万人は一方通行に殺されヤツはレベル6に到達するのだろう。なにもできなかったんだな。やっぱレベル4の俺がレベル5の最強に勝つ自体が無理だったのか。

ああ、悔しい。悔しいなあ。勝ちたかった。負けたくなかった。残骸を壊して実験を凍結させて、妹達、お姉様や砥信さんと一緒に過ごす。それもできないのか。いやだ。こんな気持ちで生涯を閉じるのは嫌だ。

背後に人の気配。振り返るとそこには裸のミサカがいた。この子は誰よ？と首を捻る。無表情な顔を見ている限り妹達なんだろうが、なにかが違うと感じる。まさかお前は。

憑依するということは魂が肉体に入り込むということになる。ということは元の肉体の主の魂はどうなるのか？上書きされてしまったのか、どこかにいってしまったのかわからなかった。それが今ここにいる。そうなんだろうミサカ000000号。

彼女はなにも答えない。しかし変わらぬ表情からは否定も肯定も読み取れないが何故か確信めいたものを感じていた。それにしても何故ここに彼女が？身体を乗っ取られたことに対する怒りや恨み？い

やそんなものは感じられない。じゃあ一体何故？

目の前に違った景色が広がる。負傷した一方通行の姿だ。先程の続きらしい。反応すらしなくなったこちらを見て興味を失い何処かに連絡しようと携帯を取り出す一方通行。しかし電話をかけようとするとところで動きが止まる。周囲にはこの場の異変に気付いたのか妹達が十数名で取り囲んでいた。笑みを浮かべる一方通行。勝てない勝てるイメージが浮かばない。このままじゃみんなやられる。それなのに指を加えて見ているだけなんて。そんなの堪えられない。

どうすればいい。死んでしまった俺はなにができるんだ？悩む俺をじっと見ていた00000号は指を指した。その先は死体である俺の指。けれど、何故かピクリと動きはじめ。もしかして死んでない？けれど俺が動かしている気がしない。まさかお前が動かしているのか、00000号。彼女は頷き肯定した。

じゃあここは死後の世界じゃなく俺の心の世界とでもいうのだろうか。科学の世界なのに、なんてオカルトな世界なんだ。……まあ、憑依なんて経験した俺が言えたもんじゃないか。オカルトがあるなら意外と魔法やら心霊やらって神秘的なものもこの世界にはあるのかもしれないな。

この世界ですつとお前は外を見ていたのか。ずつとお前は俺の側にいたんだな。この身体を共有してるからかなんとかなくだが伝わる。時折演算しなくても能力が使えたことがあった。最初の天井を殴った時なんかはそうだ。それはお前を通して能力の行使ができたのか。

お前は諦めていない。手を延ばす00000号。まだ戦えるのか、俺は。その手を強く握り返した。しかしどう戦えばいい？俺だけじゃ力が足りない。仮に00000号の力を借りることができたとし

ても、勝てるだろうか？

（お姉様　　！）

ミサカネットワークを通して妹達の声が聞こえた気がした。………  
そうか今度は一人じゃない。足りないなら借りればいいんだ。みんなの力を借りて一方通行、お前を倒す。結束した妹達の力なめんなよ。

おかしい　　周りを妹達が囲んでいるが一向に仕掛けて来ない。

一方通行はそんな疑問を抱きながら妹達を睨んでいた。てつきり仲間を助けにきたのだと踏んでいたのだが近付くどころか動かない。まるでなにかを待っているような　　。ピクリ。まさか、まだ立ち上がるといふのか。先程倒したはずの人形はすでに死に体のはずだ。起き上がれるはずがない。だが予想を裏切るように彼女はふらふらとしながらもしかし着実に立ち上がろうとしていた。今までに出会い立ち向かってきた奴らとは違う。倒れたのに心が折れた表情ではない。むしろ戦う前と変わらない決意に満ちた表情で、立ち上がったのだ。

「はッ、満身創痍じゃねエか人形」

なんとか立ち上がった、それが現状だった。なにか一つでもぶつけ

ていれば彼女はあっさりと倒れるかもしれない。

「さっきなにをしたかもわかってるんだぜ、オマエがやったことそれは磁力の引力を利用したんだろ？」

00000号が行ったことは単純だ。一方通行に投げた鉄塊を彼が反する瞬間に磁力で鉄塊を自分側に引き戻したのである。一方通行がデフォルトで設定している反射は鉄塊の進む力をそのまま引き戻る力に変換することだ。だが反射する瞬間に00000号に引き戻る力が働けば、進む力に変換され一方通行に当たるという原理である。

しかし彼女では反射する範囲やタイミングを完全に見極めることができなかった。だからこそ複数の鉄塊を用意し、そのどれかが当たるように一方通行に当たったタイミングで引き戻すようにしたのである。その結果、2つの鉄塊が当たったのだ。生身に鉄塊が直撃すればただでは済まない。

しかし。

「まア二度ときかねエけどな」

彼女の攻撃にはいくつか問題点があった。まず、精度の問題。これは反射タイミングがわからずに数で頼った攻撃だからだ。つまり全く当たらない可能性も有り得る。むしろ二カ所も当たったことは幸運なことだった。その上一方通行に当たった数より00000号に当たった鉄塊のほうが多い。このままこの攻撃を続ければいくら体力が低いとはいえ一方通行が倒れるより先に彼女が倒れる可能性が高い。

次に威力。進むベクトルを引き戻すには、より大きな力が必要になる。彼女のレベル4の力では引き戻すだけの力があつたとしても進んでいた力にいくらか相殺されてしまう。そのため一方通行に直撃しても十分な威力を発揮できなかったから彼は耐えることができたのである。

そして最後に一方通行の反射の設定は変更可能であるということだ。デフォルトでは演算による脳の負荷をかけないようにするため、あくまで酸素などの必要なものを除いた全てのものを真逆に反射させる設定ではあるが、角度を変えて逸らすように設定することも可能である。その場合そのまま引力を用いても、反射の内側に進むベクトルにならない。

同じ攻撃は通用しない　しかし彼女は再び鉄塊を集めた。一方通行からすればそれは悪手にすぎず所謂自棄をおこした行動にしかみえない。だが、00000号は構わずに攻撃を開始する。当然鉄塊は一方通行に反射された。微妙に反射角を変えられたため一部の鉄塊のみが00000号を襲う。磁力を操作中の彼女には避けられないはずだった。

しかし彼女は機敏にかわす。まるで最初の頃の戦闘のように。そう彼女は超反応を行っていた。本来超反応は制御が非常に困難であり、即座に使いこなせない問題と並行して行うことができない問題があった。しかし、今は違う。00000号は彼と彼女の二つの意識が共存している。磁力の操作を彼が行い、超反応を彼女が行うことでマルチタスクを実現したのだ。多重能力とは異なり同一能力の使用である。最も演算の要である脳への負担は大きいが。

「ちよこまかと逃げてンじゃねえぞ、人形！」

一方通行が急接近するも、磁力を利用した高速回避でかわす0000号。一方通行の攻撃をひたすら避けつつ、距離を開けると鉄塊を誘引し、一方通行に投げ、跳ね返った鉄塊を避ける。ただその作業の繰り返し。勝てることもできなければ負けることもない。それが永遠に続けることができるなら。

しかし、寝てる間ですら超能力が働く一方通行とレベル4しかない0000号との超能力の使用する時間の限界の差は明白だった。つまり長期戦で負けてしまうのは、先に限界に達する000000号。

足りない　だから力を集める。自分と共存している彼女の力を借りれるのならば、他の妹達からも借りればいい。ネットワークを介して演算の補助をもらう。一つ一つの演算処理能力は大したことはない。しかし並行分散した演算処理を制御し調整することで、まるで一つの巨大なコンピュータのように大幅に演算処理能力を上げた。

妹達による演算能力向上ブースト　それが同一脳波を有する完全調整とフルチューニングと呼ばれた彼女のみに許された力。

だがほぼ二万人による演算補助は彼女の脳に多大な負荷をかけていく。本来許容できる演算能力を大幅に越えているからだ。額の血管が切れ血を流し、キリキリと頭痛が走る。強大な力を得た代わりに刻々と命を削らなければならない。廃人になる可能性をはらんだまま。

そしてそれだけの対価を払ってもなお学園都市の頂きは遠い。あくまで完全調整が届いたのはレベル5とレベル4の境界線に過ぎない。妹達全てを集めたとしても一方通行はおるか超電磁砲ですらその演算能力は劣る現実。できることは超能力が向上したことと少しの時

間。

絶望的な差の中、不意に完全調整が止まる。肩で大きく息をしていた。

「……………どうした、もう鬼ごっこは終わりか。まア人形にしては頑張ったほうか？」

「……………ああそうだな。もう必要ない」

「この一方通行を相手にこんだけの時間を生き延びたんだ。だからいい加減……………」

「そういえば」

楽になれと一方通行が発する前に完全調整が遮る。

「あん？」

「ボクシングつてのは、訓練するときと試合をするときでスタミナの消耗が違うらしいな。まあ、ヘッドギアとか守るものもないんだ。当たるからもしれないプレッシャーが大きいからかかる疲労は半端ないだろうな」

それがどうしたと睨む一方通行。

「反射で守れるとはいえ、一度は攻撃が通りそして倒れたんだ。一度あることは二度あるかも知れない。何度も鉄塊がくればそれなりにプレッシャーを与えたはずだ。それに攻撃が当たらない。空振りつてのは相当体力の消耗が激しいんだぜ。お前疲れてるだろ」



一方通行もまた疲労の色が見える。息を切らして顔色も悪い。しかし疲れているのは完全調整も同じ。むしろ肉体的なダメージの大きい彼女のほうが不利。

「スタミナを切らしているとより沢山呼吸しなければならぬ。呼吸は生きるために必要だから反射はできないだろ」

一方通行の反射は有害なもの以外は総て通す。それは呼吸によって取り込まれる酸素も含まれる。

「そんな時に酸素濃度が減ったらどうなる？」

それは酸素欠乏症による意識の喪失。一帯の酸素濃度を減らすことで行える自らも巻き添えにした自爆技。結果二人とも崩れ落ちる。

しかし完全調整が行ったわけではない。完全調整はほぼ二万人の妹達による演算補助を行ってもらっていた。ほぼ　つまり残りの妹達は？完全調整の周囲にいた妹達による酸素をオゾンに電気分解　これが酸素濃度低下の真相だ。自分では勝てないと判断した00000号が完全調整になってまで稼いだのは酸素濃度が意識が喪失するくらいまで低下するための時間稼ぎ。自分が一方通行と相打ちになっても妹達の誰かが残骸を破壊する。そこに全てを賭けた。そして自分は勝ったのだ。

薄れゆく意識の中で白目を剥いて倒れた一方通行を見て思う。

ざまあみろ。

## 第四十話

一方通行が倒された。

最強が相打ちとなった情報は瞬く間に広まった。成し遂げたのはレベル4とレベル3の発電能力者達。例え複数人だとしても、本来墜ちることがない最強が倒れたのだ。ならばその倒した相手を倒せば自分が最強ではないか、一方通行はレベル5じゃなくても倒せるのではないかと錯覚し野心を抱いた者がいたためである。

そのため妹達と00000号は情報統制し騒ぎが収まるまで軟禁される結果となる。もっとも彼女達は動きたくても動けないという状況になっていた。

00000号が倒れたあとすぐに冥土返しの病院に収容された。最も肉体的な損失は一部を除いて御坂美琴ほど酷いものではない。だが問題は脳。一方通行による頭部への衝撃、妹達を介した演算能力向上による脳の酷使、そして酸欠状態に陥った彼女の脳は相当なダメージを受けていた。

だから彼女は目を覚まさない。奇跡的にも命は費えなかった。だが命だけ取り留めただけでも言える。深い眠りからずっと目を覚まさない。

彼女が眠っている間に刻々と情勢は変わり無情に時は過ぎていく。天気予報が外れるようになってすでに約二ヶ月。一方通行が倒されて一ヶ月半ほど過ぎても、00000号は目を覚ますことはなかった。妹達は甲斐甲斐しく身の回りを世話をし、御坂美琴も度々様子を見に来る。今日も御坂美琴は見舞いにきていた。自身の怪我はす

すっかり治療されており、学校に復帰している。

「よつす、元気してた？」

返事はない。

「流石に眠りすぎよ、あんた。もうそろそろ起きない？」

髪を撫でながら美琴は問い掛ける。ここ最近たまにやり取りされる問答だ。当然、返される言葉はない。

彼女はこの一ヶ月半の出来事を思い返す。絶対能力進化計画は残骸を妹達によって破壊されたため、樹形図の設計者が再構築できず再演算が不可能になり凍結。これは一方通行と超電磁砲の戦闘による影響もあつたが、一方通行が絶対に勝てないはずの妹達に負けたことが後押ししている。元々妹達の実力は全員集めても超電磁砲すら越えられないはずだったから演算結果が覆されたのだ。

そして計画凍結により不要となった妹達の身柄を冥土返し引き取る。名目上はクローンの体細胞の研究という形で各国の研究機関に妹達が送られることになった。それでも100人は学園都市に残ることとなる。彼女達は確定されていた死の運命から逃れることができた。

けれどそんな運命を覆した立役者の少女は眠ったままだ。妹達を助けた張本人が未だ眠り続けているなんて主役不在の演劇みたいなものじゃないか。そんなのは納得できない。

「あなたのお陰でみんな助かったんだから、とつとと起きなさい。ねえ起きてよ。姉や妹を悲しませすぎなのよ」

「オリジナルのお姉様………」

傍に控えた妹達も無表情ではあるがじつと眠り続ける姉を見つめる。

もう彼女はやり遂げたはずだ。ならば眠り続けてもいい。やり遣したことなど無いはず。本当に無いはずだ。けれどなにかが。まだなにかが終わっていない。彼女の中の彼も、彼女の中の彼女もまだ一つ終えていないことがある。だから。

「……………」

どうやらこの物語はハッピーエンドになるらしい。

病院で目を覚ました時に一ヶ月も眠ってたなんて言われた時は啞然とした。いやまじで。まあ、培養器に浸ってた時もそれ位寝てたんだから、おかしくは無いのかな？今はもう七月。陰鬱だった冬は過ぎ去りあれからさらに四ヶ月経ったわけ。

でだ。この四ヶ月になにかあったかと言うと。事件の後遺症は身体的にはなかった。ただまあ、脳は大分やられたらしく再検査の結果自力でのレベル5への進化は閉ざされた。それでもレベル4のままだし、進化には寿命より長い時間が必要だったのでぶっちゃけ自分に殆ど損はない。むしろ僥倖である。

ああ自力では出来ないというのは、あくまで自分の力でレベル5に成れないだけで、実のところ妹達の演算補助による演算能力向上は健在だ。ちなみに逆もできて妹達に演算補助をすることでレベルを落とすこともできる。ぶつちやけ下げれるだけで殆ど意味ないけどな。レベルを自由に調整できる。能力名、フルチューニング完全調整。レベル4にして限定レベル5の超能力者。それが今の自分だ。

でここで話がややこしくなってくるのだが、超能力進化計画を覚えているだろうか？元々は絶対能力進化計画のおまけみたいな存在の計画だったんだが、いわゆる某忍者漫画の影分身修業みたいなあれである。あれは二万人の妹達を犠牲にし一方通行と戦った経験値で俺をレベル5にするアプローチをしているわけだが、俺がそれ以外の方法でレベル5に到達してしまった。これを知った一部の研究者が妹達の有用性を理解し、ネットワークを利用した演算の並行分散処理ができればレベル5を量産できるのではないか、或いはレベル6に到達かもしくは一方通行を越えるレベル5ができるのでは、とそう考えたのである。つまりは超能力進化計画から転じて絶対能力進化計画や量産能力者計画の別アプローチが検討されたのである。だから躍起になってデータを録らせると五月蠅くなった。

しかし今の俺や妹達はカエル先生の研究に組み込まれている。だから勝手に検査などできない。この手札を使ってちよつとした我が儘をお願いした。いや正当な取引か。それは。

「Well、なにを考えているのかしら」

砥信さんの身柄である。計画凍結後、行方不明になっていた彼女は暗部に連れ去られていたそうだ。そのままであれば彼女はとうなっていたかわからない。

ネットワークを介した演算補助は脳の負担が大きく優秀な脳の研究者が必要だとか屁理屈こねて彼女の身柄を押さえたのである。思ったよりすんなり通ったわけだが。

「聞いてよ砥信さん。打ち止め（ラストオーダー）がお姉様のこと嫌いになるとか言ってるんだよ、一方通行のとは危ないから帰ってこいって言うてるのに」

打ち止めとは一番最後に生まれた妹で10歳ぐらいの女の子である。最終信号と呼ばれる彼女は、妹達と比較すると上位個体となりネットワークの管理的権限を持っている。そのため妹達の反乱対策な役割なんだが、彼女が役割を果たす前に反乱は終了していたわけだ。普通はそんな存在を最初に生み出すべきだと思うんだが順番間違っていないだろうか研究者達よ。まあかわいいのでいいか。

因みに研究者の天井は打ち止めを連れ去ろうとしたが失敗して行方不明である。なんでもプロジェクト失敗して多額の負債を抱えてしまい、とんずらついでに打ち止め使って妹達にウイルスを巻き、学園都市内で暴れさせてその隙に学園都市外の外部組織のところへ逃げる気だったらしいが、残骸を狙ってきたのがその組織らしく組織ごとアンチスキルに拘束され逃げ場を失っただけ。今も逃走を続けているらしいが。

まあそれはさておきその打ち止めは今一方通行の家に住んでいる。溺愛する末っ子を取られたので気が気ではない。様子を見に行ったり料理しに行くのだが、世紀末よろしくな一方通行のマンションはスキルアウトなんか強襲してきてサバイバルだ。まじ危ない。だから連れ帰ろうとするんだけど嫌いになるとか言われて崩れ落ちることを何度か繰り返し返した。

一方通行とは別に和解したわけじゃないし仲がいいというわけではないが、たまに作った料理を食べてはくれる。それを見て打ち止めが夫婦みたいと嫉妬するのだが。くそう、あのチンピラモヤシいつの間にうちの子をたらしこんだんだ。あんにやるーアクセラレーターじゃねえ。アクセラローターで十分だ。因みに妹達にその話をしたら空気がピシリと固まった。どうやら同じ気持ちらしい。お姉さん達はあなたたちの交際は認めません。それとお姉様に気になる相手がいるらしい。いい人ならばミサカネットワークを駆使して全力でバックアップする所存です。

「過保護すぎるのもどうかと思うわ」

溜息をつく砥信さん。いやだってなあ。あれが弟とかきつくね？視線をそらさないで、砥信さん。

まあそんなわけでこの顛末はだいたいこんな感じだ。最初はクローンに生まれて大変だったけど、今は割と平穏で充実してる。樹形図の設計者を破壊してできてしまった負債の返金のために、治安維持なただ働きをするけれど。まあ概ねハッピーエンドということだ。

妹達の有用性が証明されたことで妹達の能力の名称を変えてもらった。レデイオノイズ欠陥電気からレデイオノイズ量産電気へ。

彼女達を欠陥と蔑む者はもういない

。



## IF（前書き）

明けましておめでとございます。今年もよろしくお願いします。

今回の話はもしこの話が続けばどんな感じなのか書いてみました。

科学サイド路線でいってます。

誤字修正しました。

もしも科学サイドで話が続けば

七月。茹だるような暑さが続くと思うとうんざりする。しかしながら、ヒンヤリとした冷房の効く部屋に引きこもってもいられず、この暑さの中に身を晒さねばならない。ちりちりと照り付ける陽射しのせいで恨めしげにぼとぼと歩く俺は近寄りがたい雰囲気が出ているだろう。そんな暑い最中街中に出ているのにはわけがある。

最近になって学園都市で起こっていた連続爆破事件 グラビトン 虚空爆破事件。本件は風紀委員を狙った事件であり、数名の風紀委員が負傷している。しかしたまたま事件に関わったお姉様が事件を解決、犯人が捕縛された。それが昨日のこと。

この虚空爆破事件はとある超能力の一つ、シンクロトロン 量子変速という能力者によって引き起こされたものである。その名の通り量子を変速させるという能力なのだが、爆発はアルミニウムなどに含まれる重量子グラビトンという量子を急激に加速させることで物体を破裂させる現象を利用したものだ。書庫という存在がある以上すぐに犯人が捕まるはずだった。

しかし事件は難航する。今までの爆破の規模から考えると最低でもレベル4の犯行だと推測されていた。だが、該当する人物は釧路帷子くしろかた びり 名前の酷さに閉口した。鎖帷子みないな名前は絶対親は狙ってつけたんだろう。小学校で虐められるぞ は、事件の数日前から昏睡状態であり、犯人ではなかったのだ。

捕まっただのは介旅初矢。<sup>かいたびはつや</sup>同じ量子変速の能力者なのだが、書庫に登録された彼はレベル2の能力者だった。もちろんお姉様や俺のように能力が進化する可能性はない。けれどそれは極々珍しいものだし、ましてやいきなり二段階も上げるなど有り得ないのだ。

しかしそんな有り得ないことがひよつとすると疑念が生じる噂がネット上に流れていたのである。

<sup>レベルアップ</sup>幻想御手。実物がなんであるかは明らかにないのだが能力のレベルを向上させるものがある。そんな都市伝説がここ最近急に流れ始めているそうなのだ。虚空爆破事件以外にも書庫のレベルと合わない能力者が引き起こした事件が幾つか報告され、それが信憑性を帯びてきたのだ。

能力の向上　　つまり演算能力の向上と考えられ、幻想御手はミサカネットワークのようなものを利用したものじゃないかと考えたお姉様が何か知らないか俺を呼び出したのである。まあ俺に思い当たる節はなく、結局お姉様達は別アプローチで事件を追うらしい。というかお姉様、風紀委員や警備員じゃないんだけど事件に関わって大丈夫なんだろうか。今はその帰りだ。あまりの暑さに辟易しながら病院に戻った。

今はカエル先生の病院に住んでいる。これは俺や妹達の稼働時間寿命が短いので、延命措置のためだ。病院につくと今度はカエル先生に呼び出された。今日は治療の日ではなかったはずだがなんだろう？カエル先生の部屋に向かうと彼は一人ではなかった。

「わざわざ悪いね。忙しかったかい？」

「もう終わったんで、問題ないっすよ。で、今日は一体なにかあつ

たんですか？」

「実は君に、いや君達に協力して欲しいことがあるんだよ。できれば協力してくれないかな？」

「もちろん構わないですよ。一体なんですか？」

カエル先生には返しきれない恩があるしできるだけ協力するつもりだ。

「まず先に紹介していいかな？彼女は木山春生君と言ってね。君達妹達の協力が必要らしいんだ」

白衣の女性である木山春生がこちらにお辞儀をする。慌てて挨拶を返すと、淡々と事情を説明しだした。

彼女は学園都市外部から招聘された科学者らしい。AIM拡散力場制御実験と呼ばれる実験に彼女も一時的に関わることになる。しかし実験はAIM拡散力場を刺激し暴走の条件を探る実験だったのだ。実験は失敗。被験者となった置き去り（チャイルドエラー）学園都市の制度を利用して学園都市に置き去りにされ身寄りを無くした子供達のこと。は昏睡状態になり、今も眠り続けているのだという。何とも胸糞が悪くなる話だ。

「それで私はその子達を目覚めさせるために研究を始めたんだ。しかし、そのためには高度な演算装置が必要になる」

。冷や汗が流れる。まさかそれは。

「それで私は樹形図の設計者の使用許可を申請した。しかし23回

も申請したが、全て却下されたんだ」

や、やっぱりかーっ！実は樹形図の設計者は表向きには未だに存在していることになってる。理由は落ちたことがばれれば面子的な問題があつて上層部がひた隠しにしているらしい。いつかバレるのになにやつてるんだろう。どちらにせよ木山さんが幾ら申請しても意味を成さないのだ。罪悪感がずきずきと胸を締め付ける。

「樹形図の設計者の利用を諦めた私は他に高度な演算装置を構築できないかを模索した。その時に君達の存在を知り、複数の脳を繋げたネットワークを構成することで一つの脳に見立てた高度な演算装置を造ることを思い付いたんだ。君達に直接頼みたかつたんだが、当時はまだ絶対能力進化実験が始まつたばかりだったから、介入ができなくてね」

すごい優秀な研究者なんだな、この人。

「それで他の方法で実現できないか研究を始めたのだが、研究に没頭していたので、実験が凍結していたことを最近まで知らなくてね。研究はほぼ完成していたのだが、君達にお願いしたほうがいいと判断したんだよ」

「なるほど。つまりは俺達に演算装置として力を貸してほしい。そういうことですね」

「その通りだ。だから頼む。力を貸してほしい」

深々と頭を下げる木山さん。木山さんはおそらくその子達のために必死に奔走したのだろう。目には隈ができていた。………なんといつかあの頃を思い出すなあ。　だとしたら、答はひとつでしょ。

「よかった。君達が協力してくれて。本当にありがとう。お陰で代替案を使わなくて済んだ」

頭を下げる木山さん。さすがに少し照れる。

「代替案ってその研究していたやつのことですよ。なにかまずいことでもあったんですか？」

「君達は御坂美琴のクローンであるから、同一の脳波でネットワークを構築しているので問題はないんだが、脳波ネットワークを構築する場合どうしても脳波を同一にしなければ解決しなくてね。共感覚性を利用して脳波に干渉し同一にするのだが弊害があるんだ」

「弊害ですか？」

「ようは他人の脳波に無理矢理同一にされるため、脳のコントロールができなくなるんだ。そのため影響を受け続ければ昏睡状態に陥ることが想定される。必要になる演算能力を確保するには学園都市の能力開発を受けた一万人ほどの人間を犠牲にしなければならなかった」

「一万人!？」

「あの子達を目覚めさせるにはどんな事も厭わない覚悟があった。けれどその前にたまたま君達の状況を知ったんだ」

もし実行していたら彼女はすぐに拘束されていただろう。本当に運が良かったのかもしれない。一万もの人が昏睡しなくてよかった。

「……………ん？昏睡？最近どこかで聞いたような……………？あつ、釧路帷子か！……………待て。量子変速、介旅初矢、脳波ネットワーク。ぼんやりとだが否定できない想像が頭を過ぎる。」

「木山さん、そのネットワークの使用者はすぐに昏睡するんですか？」

「いや、個人差はあるが数日のうちには弊害は起きない」

「その間は演算能力が向上するから、どんな人でも能力が進化したりするんですか？」

「可能だ。副次的な効果だが同系統の能力がネットワークにいれば思考パターンを共有することでより効率良く能力を進化させることができる」

線は繋がった。

「木山さん、もしかしてそれって幻想御手とか言いませんか？」

「！？どうしてそれを！？」

木山さんの顔が驚愕に染まる。反応や話を聞いた限りでは嘘をつい

ているようには思えない。となると一体どういうことだ？

これが幻想御手事件を始めとした一連の事件の始まりだった。



## 外伝2（前書き）

外伝の続きではありません。

単純にタイトルだけ思い付いたので、無理矢理頑張って書いた。それだけです。

## 外伝 2

世界は無数の人がいる。そして色々な世界がある。

憑依という不可思議な経験で科学の世界の非日常に足を踏み入れた俺。様々な出会いを経て手にしたものは、常識はずれな科学の力と掛け替えのない絆、そして平穩だった。

これから始まるのは、平穩を取り戻したはずの俺と魔法の出会いのお話。 科学少女ビリビリミサカ、始まるよ！ えっ、今度は魔法？

### 科学少女ビリビリミサカ

第一話「それは始まりなの？ミサカとマッドの出会い」

ラボ。見まごうことなく研究室である。なんかすごい既視感だな、おい。ラボ自体はここどこよなんだけど、このシチュエーションが初めて憑依した日を思い出す。もう1年以上前になるのか？時間が経つのは早いよね。

にしてもここは何処よ？先生の研究室とかなんだらうか？にしてはなんでまた見知らぬ研究室なんかにいるんだ？たしか定期検査のために培養器に入っていたはず。まさか拉致られた？しかしデータ取りには協力してるし一体どういうことよ？

まあともかくここにいっても埒が開かない。外に出てみるか。

「やあ、やっと目覚めたようだね」

ドアを開くと初めて会うのどこか見覚えのあるイケメンがいた。誰だろうと思わず目を細める。

！？有り得ない、なんでコイツがいるんだ？そいつはジェイル・スカリエッティ。  
憑依前の世界で見たアニメ「魔法少女リリカルなのはStrikers」の悪役である。

「成る程、君は次元漂流者で管理外世界の住人なんだね」

一通り自分の状況を説明したら、そうスカリエッティがいった。こちらも知らないふりをしてスカリエッティから、ここがどこなのか聞いている。どうやら無人世界のスカリエッティの研究室らしい。その無人であるはずの世界に俺が倒れていたから介抱してくれたみたいだ。

ちなみに「リリカルなのは」では地球以外にも幾つもの次元世界が存在する。そしてその世界の中にはミッドチルダと呼ばれる魔法が存在する世界があるのだ。そこには数多の世界の管理、維持を目的とした時空管理局、通称管理局が存在する。異なる次元世界を認識し航行する技術力を持ち、管理局の管理と保護を受けている世界を「管理世界」、逆に次元世界を認識しておらず、航行できる技術を持たない世界を「管理外世界」といい、管理世界は勿論のこと管理外世界でも定期的な巡回なんかもやってたりする。普通に不法入国のような気がするが、大丈夫なんだろうか。ちなみに地球は第97管理外世界だったはずだ。次元漂流者はいわばなんらかのはずみで

他の次元世界に迷子になっている者をさす。

しかし、リリカルなのはに学園都市なんて出てきてはいないはずだ。作中の舞台が学園都市の外でたまたま出ていなかっただけか？たしかあのアニメは別に原作があつたはずだし、有り得るといえば有り得るけど。やっぱ学園都市ってアニメの世界だったんだな。

「それにしてもリンカーコアがないのに魔法みたいな超能力を使い、それを研究する学園都市か……。なかなか興味深いね」

「いやそつちの魔法とかのほうが凄いいんじゃないか？流石に俺は空飛んだりとかはできないよ」

「他人の芝生が青く見えているだけかもしれないが、やはり未知の技術というものには興味が沸くものさ。さっきの一方通行のベクトル操作なんて是非解明してみたいものだね」

目をキラキラとさせるスカリエツティ。これだけ見ればいい人そうなんだけどな。

「で、話は戻るけど君はどうしたいんだい？」

「勿論地球に帰りたいかな。みんな待つてるし。スカリエツティさん、悪いんだけど協力してもらえないかな」

「まあ構わないよ。その代わりに君の能力のデータを取っても構わないかい？対価は全面的に君の帰還をバックアップするからさ」

スカリエツティが捕まっていないところを見ると少なくともStrikers以前だよな。戦闘機人もまだ開発していないんだらうか

？しかし発電能力なんて役に立つのかな？実現しても物体透過したり刃物爆発させるスキルのが強そうだけど。ま、いいか。帰るまでの間、研究に協力することを承諾した。

そして一週間ぐらいして地球の地に降り立った。けれどこの地球には学園都市が無くて、リリカルなのは世界の地球だった。

「次元世界ではなく平行世界の住人だったんだね、君は」

途方に暮れる俺にスカリエツィ      スカさんが声をかけた。正直構う余裕もない。次元世界と平行世界は別物らしい。次元世界はあくまで独自の文化を持つが平行世界のように地球とほとんど同じような歴史をなぞる世界はないらしい。つまり帰る方法がない。

帰りたい。帰りたいなあ。学園都市にきたときはあまり感じなかったけど。今は学園都市に帰りたい。ここは地球には違いないけど、知り合いが全くいない。そう思うと目茶苦茶辛しい涙が出てくる。俯いたままひたすらただ泣いていた。

「どうしたん、お姉さん？泣いてるん？」

顔だけあげてみると、車椅子の少女がこちらを窺うように見ている。

「ああ、うん。ちょっと家に帰れないらしくてね」

「帰れない？」

しまった。余裕無くて咄嗟に言い訳が浮かばず、そのまま言ってしまった。

「あーっーん、何て言うかとある事情で家族と一生会えなくなつてね。それでちよつと落ち込んだんじやって」

胡散臭さ爆発であるこんなの誰も信じるわけが

「そうなんや……………」

うわ、信じちゃってるよこの子。どんだけ純心なの、この子!?!? すごく気まずそうな顔してるし。

「そこのおじさんは家族やないの?」

「違つよ、彼女とはたまたま知り合つたんだ。彼女を帰す契約をしたんだけどそれができなくなつてね」

「そうなんや……………。そうや!」

良いこと思い付いたって顔付きでポンと手を打つ少女。

「よかつたら、ウチに来おへん?」

「……………いやいやいや。危なくない? 見知らぬ人なんか連れて帰っちゃダメだよ?」

「大丈夫や、お姉さんのさっきの顔は嘘やあらへんやろ?……………それに家には私以外誰もおらんし」

そういつて、少し悲しい表情をする少女。泣きたいのはこつちなんだけどな。とちよつと苦笑いしてぐりぐりと頭を撫でた。少し嫌がるそぶりを見せたけど大人しく撫でられている。可愛いなあ。打ち

止めみたい。

「ありがとね。じゃあちよっとの間厄介になるね。スカさんはどうするの?」

「おじさんも一緒にきてや」

「僕は……まあそうだね。君を無事に帰す契約だから、君の身がどうなるかきちんと最後まで見届けないとね」

スカさん……。意外に義理堅いんだな。

「よし、じゃあ案内してもらおうかな?えっと俺は000000号、でこっちは」

「ジェイル・スカリエッティ。科学者だよ」

「君の名前は?」

「私?私はやて。八神はやてや!」

……容姿、関西弁、車椅子の時点で気付けよ、俺。八神はやて

リリカルなのはの続編リリカルなのはA'sで起きる闇の書事件の中心人物である。

夜中、散々ゲームしたりしてはしゃぎ疲れたはやてを寝室に運びつつ、古めかしく分厚い本を一冊確認しスカさんと居間に戻る。

「で、スカさん。あれってやばいものじゃないよね？」

「気が付いてたかい？彼女の寝室にあったあれはロストロギア『闇の書』。失われた文明の遺産の一つでね。特にあれは暴走すると次元世界一つ破壊してしまうほどの厄介なものさ。まさかこんなところにあるなんてね」

闇の書は本来『夜天の書』とよばれる古代ベルカで造られた収集蓄積型の融合型デバイスである。元々は魔法技術を後世に残すことを目的としたデバイスだったはずが、過去の所有者によって改悪され、暴走するデバイスになってしまったのだ。

「彼女が車椅子を使っているのも闇の書が魔力を奪って彼女の足を麻痺させているんだろう。このままいけば彼女は魔力の枯渇によって」

死んでしまう。それが嫌だから闇の書の守護プログラムであるヴォルケンリッターは事件を引き起こした。闇の書に必要な魔力を集めるために。しかしそれを集めれば闇の書は暴走し次元世界は崩壊するともならず。アニメでは結局、闇の書の意味である管制人格が犠牲になって事件は終結した。はやてに深い悲しみを残して。

しかしこの世界はそのままその通りになるのか？既に俺やスカさんみたいなイレギュラーが入り込んでいる。バタフライエフェクトで未来が変わってしまうんじゃないか？

違う、違うな。そういうんじゃない。ややこしい理屈でごまかすな。俺を慰めてくれたはやてが今苦しんでいるんじゃないか。そして自分はその知っている。なにかするには十分だよな、それで。



「スカさん、俺、はやての足を治してやりたい」

「そうかい？まあ僕はどちらでもいいんだけどね。夕食を<sub>ご</sub>馳走になつたし、それに闇の書の解析も興味があるから手伝うよ」

「……………スカさん、素直に助けたいって言えはかつこいいのに」

拝啓、異世界にいるみんなへ。俺は異世界で人助け始めました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8634w/>

---

とある科学の完全調整（フルチューニング）

2012年1月4日23時49分発行